

仮面ライダーメドゥー サ

JALBAS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“Fate / stay night”と“仮面ライダー龍騎”、更に“プリズマ☆イリヤ”のクロスです。

と言っても、龍騎は設定を流用しているだけでキャラは全部Fateです。

メインの英霊は一応ライダーなのですが、出番は殆どありません。
他の英霊も同様です。

それでもって、主役は慎二です。

目次

191	《 番外編 》	失われた聖杯戦争	
	《 最終話 》		161
	《 第七話 》		139
	《 第六話 》		122
	《 第五話 》		92
	《 第四話 》		66
	《 第三話 》		42
	《 第二話 》		20
	《 第一話 》		1

《 第一話 》

僕の名は「城戸慎二（きど しんじ）」、東京にある「清明院（せいめいいん）大学」の大学院に通う学生だ。

僕は今、もう二度と戻る事は無いと思つていた、生まれ故郷である関西の「冬木市」に向かう電車の中に居た。

元々僕は冬木市に代々続いていた魔術師の家系である、「間桐家（まとうけ）」の長男で跡取りだった。祖先はロシア人であったようだが、二百年前に何らかの事情で日本の冬木市に移住して来たらしい。しかし日本の風土に合わなかったのか、間桐の魔術師としての血は年々薄れていき、僕の代でとうとう魔術回路は完全に無くなつてしまつていた。

その為僕の祖父である「間桐臓硯（まとう ぞうけん）」は、同じく冬木に代々続く魔術師の家系の「遠坂家（とおさかけ）」から「桜（さくら）」という名の養女を取り、その娘に間桐家を継がせる事を画策した。

最初は、僕はその事を知らなかった。単に身寄りの無い娘を引き取つただけで、間桐の跡取りは自分だとばかり思つていた。だから僕は、桜を普通に可愛がった。彼女も僕

を慕ってくれていて、兄妹の仲は非常に良かった。

ところが父が他界し、高校二年となった時に僕はその事実を知ってしまった。そして散々悩んだ末に、僕は家を出る決心をした。十七年間ずっと騙されていた事に腹が立つたという事もあるが、それ以上に僕と祖父の間に入って妹の桜が苦しむのを見たくないという気持ちの方が強かった。

祖父とかなり揉めた末に、僕は勘当同然の身で家を出て東京に移住した。そのまま「間桐」の姓を名乗るのも嫌だったので、戸籍を偽造して「城戸慎二」となったのだ。

そんな僕が何故再び冬木市に向かっているかと言うと、一年間行方知れずだった親友の「衛宮士郎（えみや しろう）」に突然呼び出されたからだ。

衛宮は高校時代僕と同じ弓道部に所属していて、妹の桜は彼に憧れてかなりの好意を抱いていた。

衛宮には、六歳下の「美遊（みゆ）」と言う名の妹が居た。僕と桜の関係と同じで本当の兄妹では無かったようだが、非常に仲の良い兄妹だった。更に、衛宮の美遊ちゃんへの溺愛は異常なくらいだった。いつも何よりもまず彼女が優先で、自分の事は二の次になっていた。まるで美遊ちゃんの幸せが自分の幸せだとも思っているようで、桜がよくやきもちを妬いていた。

ただ美遊ちゃんは生まれつき体が弱く、元々長くは生きられないと言われていた。僕が家を出る約半年前、高校二年の夏頃に容体が悪化し、美遊ちゃんは寝たきりになってしまった。その介護の為に、衛宮は弓道部も辞めてしまっていた。

ところが僕が清明院大学の研究室に入る頃、何と衛宮が同じ大学の研究室に入ってきたのだ。彼が東京に移住していた事も、同じ大学に入っていた事も僕は知らなかった。そんな事よりも何よりも、僕は衛宮が美遊ちゃんを一人冬木に残して東京の大学に進学して来た事が信じられなかった。旧知の藤村家に預けて来たとの話だったが、あれほど溺愛していた美遊ちゃんの側から衛宮が離れられる筈が無いと思っていた。何故東京の大学に進学したのか？どうして美遊ちゃんの側を離れたのか？いくら聞いても衛宮は頑として教えてはくれなかった。

しかも再会した衛宮は、依然とは全く人が変わってしまった。お人良しで誰とも仲良くなり、頼まれるとまず嫌とは言わず「穂群原（ほむらはら）のブラウニー」とまで言われていた性格は一変し、無口で人付き合いの悪い変人と化していた。何かあいつをそう変えてしまったのか？それは僕には全く判らなかった。

衛宮は大学では、唯々研究に没頭していた。僕では到底理解できないような研究を、一人昼夜を徹して黙々と続けていた。そうして一年前、僕らが大学院に進んだ頃に突然

姿を消してしまつたのだつた。

そんな衛宮から、昨夜急に電話があつた。

『慎二……明日の夜二十一時に、冬木駅前のヴェルデの前に一人で来い……』

「はあ？ い……いきなり何を言い出すんだ？ お前……今迄ずっと何処に居たんだけ？ 冬木に戻つていたのか？ ……いつたい、何をやってたんだけ？」

『……来れば……話す……』

それで、電話は切られてしまつた。

当然無視する事もできたが、今迄衛宮が何をやって来たのか？ どうしてあんなつてしまつたのが氣になつた。だから冬木に来るのは氣が進まなかつたが、こうしてここまですべて来たのだ。

新都の冬木駅で電車を降りる。待ち合わせ場所は、駅前のヴェルデの入口前だ。

ヴェルデの入口前はもう閉店時間という事で、殆ど人の姿が無い。そもそも、こんな時間に待ち合わせというのも非常に胡散臭い。喫茶店なども当然閉まつていて、開いているのはコンビニか飲み屋くらいであろう。

しばらくその場に立つて待つていたが、一向に衛宮が現れる様子もない。

「な……何をやってるんだ？あいつは？こんな時間に、こんな所に呼び出して……」
等と文句を言っている時、既に明かりの消えたヴェルデの店内で何かが動くのが視界に入る。

「……………?!」

驚いて振り向くと、店内に一人の女性が立っていた。だが、その格好は異様だった。そのブロンドの髪で金色の瞳の女性は、黒い西欧風の鎧を着ていたのだ。

「ま……まさか?」

その時代錯誤な恰好を見て、僕は思わず幽霊か何かだと思ってしまう。

「うわああああああああっ!」

僕は大声を上げて、思わず逃げ出そうとしてしまった。ところが突然、何かに腕を引っ張られてしまう。

「えっ?!」

何とガラス窓を突き抜けてその女性の腕が飛び出し、僕の腕を掴んでいた。

「ぎゃああああああああっ!」

僕は、恐怖で錯乱してしまった。

必死に逃げようとするが彼女の腕力は強く、逆にどんどん引っ張られていく。そうして信じられない事に、僕の体はガラス窓の中に吸い込まれてしまったのだ。

「えっ?!…………あ…………あれ?」

気が付くと、僕を引つ張る腕も、時代錯誤の恰好をした女性の姿も何処にも無かった。僕は元通りヴェルデの前で、尻餅をついて座り込んでいた。

「な…………何だったんだ? さっきのは…………ん?!」

ふと先程までとは、周囲の雰囲気が変わっている事に気付く。

辺りが妙に静かすぎる。夜の二十一時過ぎとはいえ、さっきまで街には車等の騒音が響いていた。だが今は、それが全く無いのだ。

「…………」

良く街を見てみると車は一台も走っていない、周りには人つ子一人居ない。おかしいと思つて、ヴェルデ側のガラス窓を見てまた驚愕する。

「ええっ?!」

何と、ヴェルデのガラス窓には、背後を行き交う車や人が映っている。しかし振り向くと、やっぱり車も人も全く居ない。

「ど…………どうなってるんだ? これは?…………」

「う…………うう…………」

すると、静寂の中に微かに人の声が聞こえて来た。

「ん?…………だ…………誰か居るのか?」

先程の幽霊の件もあつて怖かつたが、やはり気になるので僕は声がする方に向かつて行つた。ビルの角を曲がつて裏手の方に行くと、端の方に人が一人倒れていた。それは、女性のようだった。

「だ……大丈夫……ですか？」

近付いて行つて顔を覗き込んで、僕はまたまた驚いてしまう。

「さ……桜っ?!」

それはもう六年も会っていない、妹の桜であつた。

僕は慌てて、桜を抱き起して声を掛ける。

「桜……おい!桜っ!」

「えっ?……に……に……さん?……ど……どうして……ここに?……」

「どうしたんだ?しつかりしろ!桜っ!」

「ご……ごめんなさい……兄さんまで……巻き込んで……しまったのね……」

「はあ?何を言つてるんだ?巻き込んだつて……何に?」

「や……やっぱり……わたし……先輩とは……た……戦え……なかつた……」

「先輩?……え……衛宮の事か?……あ……あいつは何処に居るんだ?」

「……だ」

その時、遙か後方から声がした。

誰も居ない筈の無人の街に、足音が響き渡る。桜を抱きかかえる慎二の前に、一人の青年が姿を現した。

「え……衛宮?……」

「一年振りだな? 慎二……」

「だ……だめ……に……逃げて……にい……さ……」

そこまで言つて、桜は氣を失つてしまう。

訳が判らず、慎二は士郎に問い掛ける。

「衛宮?……ここはいつたい何処だ?……な……何で? 僕達以外誰も居ないんだ?」

「……は、"Unlimited Mirror World"……俺が創り出した、固

有結界の中だ」

「……固有結界?……ま……まさかお前、魔術師だったのか?」

「正当な魔術師家系の後継ぎじゃない……元々、親父の切嗣とは血が繋がっていない。だが、俺には生まれつき魔術回路があつた。六年前までは、殆ど満足に使えなかつたがな……」

「何だつて?……うっ……」

その時急に、慎二は息苦しくなつて来る。

「えっ?」

更に気付くと、自分の体から塵のようなものが出て……いや、塵のように見えるが、それは彼の体が消滅し始めていたのだった。

「なっ?!……ど……どうなってるんだ?これは?……」

良く見ると、抱きかかえている桜も同様であつた。

「この空間では、生有る物は長く状態を維持出来ない。人間など数分で消滅する」

「なっ?……何だっ?!」

「ここに居続けるには、このカードデッキを使わなければならない……もつとも、それでも十数分程しか持たないが……」

士郎は懐から黒いカードデッキと、一枚のカードを取り出した。そのカードには、剣士の絵が描かれている。

「このように、デッキを腹に当て……」

士郎は、カードデッキを自分の腹に当てる。するとデッキからベルトが飛び出し、士郎の腹部にデッキが装着される。

「このクラスカードを使う……変身!」

士郎は剣士……“セイバー”のカードをデッキにセットする。

『Installer……Sabber!Alter!』

電子音のメツセージと共に、カードデッキを起点に黒い重厚な鎧が士郎の体を包んで

いく。彼の目は金色に輝き、最後にその頭部を黒い騎士の仮面とバイザーが覆い隠してしまう。

「な……何っ?」

慎二は、唯々呆然とするばかりだった。

「お前も、早く変身しなければ消滅するぞ」

黒い仮面の騎士と化した士郎が、慎司に苦言する。

「はあ?……そ……そんな事言っても、僕はそんなデツキなんか……」

そう言う慎二に、士郎は無言で桜の腹部を指差した。

「?!」

桜の腹部には、士郎が使ったのとよく似た灰色のデツキがベルトで巻かれていた。更に桜の手には、一枚のカードが握られていた。ただそのカードには、何の絵柄も描かれていなかった。

「くっ……」

慎二は慌てて桜の腹部からデツキを外し、それを自分の腹部に当てる。すると士郎の時と同じようにベルトが飛び出して、慎二の腹部へと巻き付いた。

「へ……変身!」

慎二も士郎と同じように叫び、何も描かれていないカードを腹部のデツキへとセット

する。

『Install……』

電子音のメッセージと共に、カードデッキを起点に慎二の体にもプロテクターのような物が装着されていく。しかしそのバトルスーツは灰色の軽装な物で、頭部も簡素なマスクに覆われただけだった。但し、彼の体の消滅は止まっている。

「……っ?!……さ……桜!」

変身により慎二は消滅を免れたが、生身の桜の方はそうはいかない。彼女の体からは、未だに塵が噴き出していた。

「滞在時間を延ばせるのは、変身した者だけだ……生身の者は、そのまま消滅する」

動揺する慎二に、冷徹に黒い騎士の士郎が言い放つ。

「そ……そんな?……おい!どうすればいいんだ?お前は、何か方法を知ってるんだらう?」

「簡単な事だ……ここから出て元の世界に戻ればいい」

「何だと?」

「変身すれば、この世界と元の世界の行き来も可能となる」

そう言つて黒い騎士は、側面のガラス張りの壁に向かって歩いて行く。そして、吸い込まれるようにガラス窓に入つて行つた。

「?!」

慎二はまた驚くが、慌ててそれに続く。桜を抱えたまま、ガラスの壁に飛び込んで行く。すると直後に、騒音の溢れる世界側へと飛び出した。

「……………は？……………周囲に音がある……………も……………元の世界に戻ったのか？」

慎二は直ぐに、抱いている桜に目を向ける。しかし桜の体からの塵の発生は無くなっていたが、彼女はずっと気を失ったままだった。

「桜……………おい！桜！しっかりろ！」

桜は死んでいる訳では無かったが、殆ど生気が感じられなかった。体は酷く冷え切っていて、まるで仮死状態にあるかのようなようであった。

「あの中に長く居過ぎたようだ……………もう、桜が目覚める事は無いだろう。いずれ、その命の火も消える……………」

相変わらず冷徹に、残酷な事実を言い放つ黒い騎士。

「なっ……………何だとおおとおおっ！」

その言葉に、慎二は激昂してしまう。

「ふざけるなっ！衛宮あああああああつ！」

灰色のバトルスーツを纏った慎二は、怒りに任せて思い切り黒い騎士に殴り掛かった。

「ぐっ！……うううっ！……」

しかし黒い騎士の強靱な鎧はびくともしないだけで無く、逆に殴った慎二の拳の方が痺れて来てしまう。

「そんな、未契約の状態では話にならん」

「何っ？」

そう言われた直後、突如慎二の体が宙を舞った。

「ぐうはあああああああああつ！」

その身は数メートル程飛ばされ、背後にあつた壁に派手に叩き付けられてしまう。

「うっ！……ぐううううう……」

更に跳ね返って地面倒れ込み、それと同時に変身も解けて元の姿に戻ってしまう。カードデッキとクラスカードも飛ばされ、その横に派手な音を立てて転がった。

いったい今、何をされたのかは全く判らない。恐らく殴られたようなのだが、その攻撃は慎二には何も見えていなかった。

「桜の事で俺を恨むなら、それは筋違いだ。彼女は、あの中で死ぬつもりだったんだ……お前が来なければ、本当にそうなっていただろう」

「な……なに？……」

「桜は英霊を呼び出したが、契約をしなかった。土壇場で、戦いを拒んだのだ」

「戦いを……拒んだ？」

慎二の脳裏に、先程の桜の言葉が浮かぶ。

“や……やっぱり……わたし……先輩とは……た……戦え……なかった……”

慎二は、ゆつくりと体を起こす。

その前に立つ黒い騎士は変身を解き、元の士郎の姿に戻ってから言う。

「桜を助ける方法が、一つだけある」

「何？……本当か？」

「聖杯戦争に勝ち残る事だ」

「せ……聖杯戦争だと？……ばかなー！……それは、お前の親父が潰したんじゃないのか？」

“聖杯戦争”……それはこの冬木の地で、約二百年前に始まった儀式である。

万能の願望器である聖杯に選ばれし七人のマスターが、七人の英霊をサーヴァントとして使役して聖杯を求めて殺し合う。呼び出される英霊のクラスは、“セイバー”、“アーチャー”、“ランサー”、“ライダー”、“キャスター”、“バーサーカー”、“アサシン”の七つだ。そうして最後に生き残ったマスターだけが、聖杯を手に入れてその願いを叶える事が出来るのだ。

二百年前より始まり過去に四度行われたが、ここまで聖杯を手にした者は未だに一人も居ない。六年前には本来五度目の聖杯戦争が行われる筈であったのだが、一人の男がこれを阻止してしまう。それが「衛宮切嗣（えみや きりつぐ）」、士郎の義理の父親であった。

切嗣は何らかの手段を講じて冬木の地の聖杯を封印し、二百年前から続いていた聖杯戦争に完全に終止符を打ったのだった。

「確かに衛宮切嗣によって、この冬木の聖杯戦争は六年前に絶たれた……だが、俺の開発したカードデッキシステムが、再び聖杯戦争を可能にしたのだ」

「なっ？……そ……それじゃあ、お前が大学で研究していたのは……」

士郎は慎二の問いには答えず、淡々と新しい聖杯戦争のシステムを説明する。

「カードデッキは、全部で七つある。そしてカードデッキに認められた者がマスターとなり、それぞれ一体の英霊をサーヴァントとして召喚出来る。マスターは英霊と契約し、クラスカードにその魂を封じ込める。そのカードに込められた英霊の力をデッキで解放し、マスターが鎧として纏って直接他のマスターと戦う。基本的に戦闘は、固有結界であるミラーワールドの中で行う事がルールとなる。ミラーワールドの中では何を壊そうが、実世界には一切反映されない。実被害が無ければ、魔術協会や聖堂教会に気

付かれる事も無いだろう。但し、人の命だけは別だ。ミラーワールドの中で命を落とせば、その者はそのまま消滅する……それが俺が創り出した、新しい聖杯戦争のシステムだ」

「そ……それが……聖杯戦争だと言う事は……」

「そうだ！……勝ち残った者だけが、聖杯を手にする事が出来る。そうすれば、どのような願いでも叶う」

「じゃあ……桜を助ける事も……」

「そういう事だ……桜を助けたければ、お前もマスターとなつて戦え！七つのカードデッキを全て破壊し、七枚のクラスカードを全て集めれば聖杯が手に入る……その為に、まずは英霊と契約しろ！」

「英霊と……契約？」

「そうだ！契約を交わせば、クラスカードに英霊を封じ込められる。その証が、この令呪だ！」

士郎は左手の甲を慎二に翳し、そこに刻まれた紋章見せ付けた。

「さつき言ったが、お前が契約すべき英霊は既に桜が召還している。英霊は霊体だから、この世界では実体化出来ない。人間とは逆で、ミラーワールドの中でしか実体化は出来ない。だから、ミラーワールド内を捜せ……但し、変身しても滞在できるのは十三分だ。

それ以上滞在すれば、消滅してしまうから注意しろ」

そこまで言つて、士郎は慎二に背を向けて立ち去ろうとする。

「ま………待て！衛宮っ！」

慎二に呼び止められ、士郎は足を止める。

「契約つて言つても、令呪を受ける事ができるのは魔術師だけだろう？僕にはもう、魔術回路は無い。だから英霊と契約は出来ない……」

慎二が言い切る前に、士郎は返答を始める。

「それは心配無い。お前は元々、魔術師の家系の生まれだ。魔術回路が無くなつていても、その痕跡は体に残っている。カードデッキがそれに作用して、擬似魔術回路をお前の体に残り出す。さっきお前は、カードデッキで変身が出来ただろう？このシステムなら、お前でも英霊と契約する事が出来る……」

言いながら、士郎はまた歩き出して行く。

「ま………まて………待てよ！衛宮っ！………お………お前は僕に、殺し合いをしろつて言うのか?!」

士郎は今度は立ち止まらず、去りながら慎二に告げる。

「偽られていたとはいえ、お前も十七歳までは自分を間桐の後継者と思つていた筈だ………聖杯戦争に、関わる覚悟はあつたんだろう？」

「そ……そんな事を言われても……ぼ……僕は……」

「殺らなければ、お前が殺される……そして、桜も死ぬ!」

そこまで言って、士郎は何処かへと立ち去ってしまった。

「……」

慎二は冷たくなって動かない桜を呆然と見詰めながら、しばらく無言でその場に佇んでしまうのだった。

へ 仮面ライダーメドゥーサ……次回予告 へ

「いったいどういう事なの?」

「どうもこうも無い。聖杯戦争が、再び始まったというだけだ」

「だから! 何でこの冬木でまた、聖杯戦争が始まるのかって聞いてんのよっ!」

「ま……待ってくれ!……ぼ……僕と……契約してくれ!」

「何故? 私が貴方と契約しなければならいのですか?」

「えっ?」

「私を召喚したのは桜です。貴方では無い……」

「変身!!」

『Install……Rider! Medusa!』

「仮面……ライダー……だと?！」

『戦わなければ、生き残れない!』

《 第二話 》

冬木市の新都にある言峰教会。

そこにこの地の霊脈の管理者である女性魔術師が訪れ、神父である「言峰綺礼（ことみね きれい）」に激しく問い掛けていた。

「いったいどういう事なの？」

「どうもこうも無い。聖杯戦争が、再び始まったというだけだ」

「だから！何でこの冬木でまた、聖杯戦争が始まるのかって聞いてんのよっ！」

その女性は遠坂家の六代目当主である、「遠坂凜（とおさか りん）」であった。

彼女は高校卒業後、魔術協会の総本山であるイギリスの時計塔に入学していた。それが一通の招待状により、急遽この地に呼び戻される事となった。それはもちろん衛宮士郎からの、今回の聖杯戦争への招待状であった。

「六年前、衛宮切嗣によって冬木の聖杯は完全に封印されたわ。もうこの地では、聖杯戦争は起こり得ないんじゃないの？」

「私に言われても困る。聖杯戦争を復活させたのは切嗣の息子……もつとも、実の息子

では無いがその衛宮士郎だ。切嗣の封印を、何らかの手段で解除したのであるか?」

「それは無いわ!」

凜は、即答で言い切った。

「ふん……気付いていたか?」

「当然でしょ? 私はこの地の霊脈の管理者よ! 封印が解かれれば、直ぐに判るわ! この地の聖杯は、未だに封印されたままよ!」

「しかし、衛宮士郎の言う聖杯は本物だ。事実英霊が召喚され、その力を発揮出来ている。今迄の冬木の聖杯戦争のサーヴァントとは、大分システムが違うがな。更に冬木市全体に、"Unlimited Mirror World"等というとてもつかまらない固有結界を発生させている。こんな事は、とても一人の魔術師に出来るレベルでは無い。それこそ、聖杯の力でも使わなければな」

「衛宮くんは、貴方の所にも来たのか?」

「無論だ。今は任を解かれたが、元々私はこの地の聖杯戦争の監督役だからな」

「それで、聖堂教会には報告したのか?」

「出来る筈が無かろう? 実際には、この地の聖杯は封印されたままなのだ。何をどう説明するのだ? 報告するのは、最低でも状況を把握出来てからになるだろう。それは、お前とて同じではないのか?」

「確かにそうよね?……お邪魔したわね」

そう言つて、凜は教会を出て行こうとする。

「待て凜! お前も、この聖杯戦争に参加するの?」

綺礼の言葉に、足を止めて振り返る凜。

「何? もう貴方は監督役じゃ無いんでしょ? 報告の義務があるのかしら?」

「聖堂教会に属する者としては、状況は確認する義務があるのでな。」

「……私も同じよ。この地の管理者として、私抜きで勝手な事はさせないわ!」

そう言つて凜は、赤いカードデッキを取り出して綺礼に向けて翳す。そしてそのまま、教会を後にするのだった。

冬木市の新都にある総合病院。

その一室で、間桐桜が眠っている。ベッドの脇の椅子には、項垂れた慎二が座つていた。

桜は、完全な昏睡状態だった。かろうじて生きてはいるものの、意識は全く無い。全体にこれといって異常は無いのだが、生命力が極端に低下してしまっていた。病院でも手を尽くして調べたが、原因は解らず治療のしようも無かった。

「ヤ…………桜…………」

慎二は、まだ決心がつかなかった。

桜を助けるには、聖杯戦争に勝ち残って聖杯を手に入れるしかない。だがその為には、他の六人のマスターを殺さなければならぬ。正確には相手のカードデッキを破壊してクラスカードを奪えば良いのだが、戦闘は常にミラーワールド内で行われる。カードデッキが無くなればミラーワールドからは出られなくなり、その者は当然死ぬ事になってしまう。そしてその死闘を行う相手の内の一人は、紛れも無く自分の親友の衛宮士郎なのだ。

「桜は衛宮と戦う事が…………衛宮を殺す事ができないと、自分が死ぬ道を選んだ…………いや、ちょっと待って？そもそも、何で桜はこんな戦いに参加したんだ？いったい桜は、聖杯に何を望むつもりだったんだ？」

「…………っ?!」

その時ふと、病室の窓を何かが過る。慌てて慎二はそちらを向くが、そこには何も映っていないかった。

「ん？…………今、誰かが覗いていなかったか？」

慎二は立ち上がって、窓に寄って行く。窓からは、外の景色が見えて来る。

「…………そんな筈無いよな？…………ここ、四階だもん…………」

多分気のせいであると思ひ、慎二はそのままお手洗いに行く。

用を足してから手を洗おうと、慎二は洗面台の前に立つ。すると……

「?!」

目の前の鏡に、自分の姿が映る。それは当然なのだが、その背後に女性の姿が映っていた。薄紫色の長い髪をして、黒いボディコンスタイルの非常に色っぽい女性だ。ただ何故か自分の目を、目隠しで覆ってしまっている。

「えっ?……ここ男子トイレだぞ!」

慎二は驚いて振り向くが、後ろには誰も居なかつた。

「なっ?……何っ?」

そこで再び前を向くが、鏡にはやはり慎二の後ろにその女性の姿が映っている。

「ま……まさか?……」

それが桜の呼び出したサーヴァントだと気付いた時、彼女は鏡の中から慎二に攻撃を仕掛けて来る。いきなり鏡の中の女性は、彼にナイフのような物を投げ付けて来た。それは鏡から飛び出して来て、慎二の眼前に迫っていた。

「うわああああああああああつ!」

咄嗟に叫んで、慎二はその場に屈み込んだ。ナイフは慎二の頭を霞めて、勢い良く背後の壁に突き刺さる。その柄には鎖が付いていて、放たれた時と同等のスピードで素早

く鏡の中に戻って行く。そして今度は、屈んだ慎二に向かって第二撃が放たれた。「のおわあああああああつ！」

今度は真横に転がって、必死にその攻撃を躲す。ナイフはまた直ぐに鎖により引き戻され、また慎二が避けた先へと放たれて来る。

「ひっ！ひいひいひいひいひいひいっ！」

とにかく慎二は、ひたすら懸命に逃げ回った。だが狭いトイレの中なので、徐々に逃げ場が無くなり追い詰められていく。

「そ……そうだー！」

そこで慎二はカードデッキを取り出し、腹部に当てて装着する。

「へ……変身ー！」

そして何も描かれていないクラスカードを、デッキへとセットする。慎二の体が、灰色の軽装のバトルスーツに包まれてく。

「こうなりや一か八かだー！」

慎二はそのまま、鏡の中に飛び込んで行った。造りは全く外の世界と同じだが、ミラーワールドの中に入った慎二の前にはサーヴァントの女性の姿がはつきりとあった。と、そこまでは良かったのだが、その先をどうしていいか慎二には判らなかった。

“えっと……け……契約って……どうするんだ？”

戸惑う慎二に、サーヴァントは再び攻撃して来る。

「ぐわあああああああつっ！」

サーヴァントの放ったナイフが、慎二の左腕に突き刺さった。軽装のバトルスーツ程度では、超人的な力を持つ英霊の攻撃を防ぎ切れなかった。

更に攻撃を加えようとするサーヴァントに、慎二が叫ぶ。

「ま……待つてくれ……ぼ……僕と……契約してくれ！」

するとサーヴァントは一旦攻撃を止めて、静かに慎二に言い放つ。

「何故？私が貴方と契約しなければならぬのですか？」

「えっ?」

「私を召喚したのは桜です。貴方では無い……」

「だ……だから……ぼ……僕が、桜の代わりにマスターになったんだ!そ……そういう訳だから……」

「それは、貴方の都合でしょう?私には関係ありません!」

「へっ?」

再び、彼女は慎二を襲って来る。鎖付の杭のようなナイフが、またも慎二目掛けて飛んで来た。

「うわあああああああつっ！」

「お…………お前も…………マスターなのか？」

「そうだ…………私のクラスカードは“キヤスター”。英霊の力を宿して変身しているから…………そうだな、“仮面キヤスター”とでも言ったところか？」

「か…………仮面…………キヤスター？」

「無契約のマスターを襲うのはルールに反するかもしれないが、このような好機を見逃すほど私もお人好しでは無いのでね…………死んでもらうぞ！小僧！」

キヤスターは浮遊したまま、一枚のカードを腹部のデッキにセットする。

『Shoot Vent!』

電子音に続き、キヤスターの周囲に幾つもの魔方陣が出現する。そしてその魔法陣から、無数の光弾が慎二に向かって放たれた。

「うわああああああああっ！」

慎二は慌てて、その光弾を避けて走り出す。光弾は地面に食い込んで、彼の周りに次々と大きな爆煙を噴き上げていく。慎二はまたしても、必死になって逃げ回る羽目となってしまう。

「な……………何で僕が？……………こんな目に……………」

光弾はひとつひとつが凄まじい威力で、命中した箇所は大きく抉られてしまっている。今の慎二の貧弱な軽装では、直撃を喰らえばひとたまりも無いだろう。

「う……うわっ！」

しかし運悪く、慎二は躓いて派手に転倒してしまう。

「ふっ……そこまでだな？死ねっ！」

俯せに倒れ込んでしまった慎二に、遂に光弾が命中する。彼はそれを受けて、凄まじい爆炎に包まれてしまった。

「ぎゃああああああああつ！」

だが大きな爆炎が晴れた時、慎二の体は消滅してはいなかった。

地面に突っ伏して倒れたままであるが、まだ五体は満足で意識も残っていた。

「うっ……ううう……」

今のバトルスーツは貧弱な軽装ではあるが、かろうじて慎二の命だけは護ってくれたようだ。もつとも、キヤスターはまだ本気で無かったという事もあるのだが……

キヤスターは、そんな慎二の前にゆっくりと降り立った。

「……………」

慎二は、無言で倒れたままだ。

「ふん！まだ息があるようだな？……どうだ？話によつては、助けてやらん事も無いぞ？」

「……………な……何？」

「カードデツキをこちらに渡せ。素直に敗北を認めれば、命だけは助けてやろう」

「ぼ……ばかを言うな……ここ……ここで、カードデツキを失えば……」

「消滅してしまうか？……それは心配するな。私が、お前を元の世界に連れ戻してやる」

「な………に……」

「信用出来んか？だが、拒んでもここで殺されるだけだ。それならば、信じるしか無いと思うがな？」

確かにこの状況下では、要求を呑まなければ絶対に助からない。だがしばしの沈黙の後、慎二は顔を上げて言い切った。

「………断る……」

「何だと？このまま、私に殺されたいと言うのか？」

「それも……ご……ごめんだ……」

「はあ？」

「ぼ………僕は………負けられ………ない……」

慎二はそう言いながら、何とか体を起こす。まだ立ち上がれはしないが、跪いた姿勢でキャストアーを鋭く睨み付けながら続ける。

「さ………桜を………桜を助ける………そのためには………僕は、絶対に負けられないんだ！」

「ほごくな！そんなザマで、どうやって私に勝とうというのだ？そんなに死にたいのな

ら、今直ぐに殺してやる！」

キャスターは周囲に再び魔法陣を発生させ、慎二に向けて容赦無く光弾を放つて来る。

「……………?!」

今の慎二には、もうそれを躲す事も出来なかつた。固く目を閉じて、悔しさに唇を噛みしめる慎二。

しかしその時……

「何っ?!」

光弾が命中する直前に、突如黒い影が横切つて慎二を連れ去つて行く。目標を失つた光弾群は、地面だけを抉つてその場に大きな爆煙を噴き上げた。

「き……貴様は?……何者だ?!」

キャスターは即座にその黒い影を視認し、そこに目掛けて更なる光弾を放つ。しかしその影は非常に素早く、巧みに光弾を躲して病院の裏手の方に逃げ去つてしまう。

「ちっ……逃すかっ!」

慌ててキャスターは、その影を追つて再び上空へと飛び上がって行く。

病院の裏手を少し進んで、草むらの陰に入った所で黒い影は慎二をその場に降ろし

た。

「うっ……うわっ！」

慎二は尻餅をついた姿勢で、ゆっくりと自分を助けてくれた者の姿を見上げる。

「お……お前は?!」

それは先程慎二を襲った、髪の毛長いボディコン姿の女性サーヴァントだった。

「な……何で?……僕を……」

彼女はもう敵意は見せずに、穏やかに慎二に問い掛けて来る。

「先程の言葉は、本当ですか?」

「え?……先程の……言葉?」

「桜を……助けると……」

「あ……ああ……ほ……本当だ!桜は僕の、たった一人の妹なんだ……ぜ……絶対に助ける!……し……死なせてたまるもんかつ!」

ほぼやくそ気味に、慎二はそう吠えた。

「そうですか……ならば、目的は一致しました。貴方と契約を結びましょう!」

「へっ?」

そう言うと同時に、サーヴァントの体が激しく輝き出す。光はたちまち彼女の全身を包み込み、更に広がって慎二までも包み込んでしまう。

「うわっ！……な……何だっ?!」

その光が治まると同時に、慎二の変身が一旦解かれてしまう。そして慎二の右手の甲に令呪が刻まれ、その掌には「騎乗兵」の絵が描かれたクラスカードが乗せられていた。

「……これは？……ら……ライダーのクラスカードか？」

更に慎二の腰に装着されたカードデッキの色が、濃い紫色に変わっていた。

「……これで……僕は……ライダーの力を使え……うわあああああつ！」

そう言い掛けた所で、凄まじい爆風に吹き飛ばされてしまう慎二。

「くっ……」

何とか立ち上がった彼の前に、再びキヤスターが姿を現した。

「見つけたぞ！……何っ?!」

キヤスターは、慎二のベルトの色が変わっている事に気付く。

「お前……契約を果たしたのか？」

すかさず慎二は、ライダーのクラスカードをデッキにセットしながら叫ぶ。

「変身!!」

『Instaall……Rider! Medusa!』

電子音のメツセージと共に、カードデッキを起点に慎二の体に濃い紫のバトルプロテ

クターが装着されていく。最後に頭部をコブラの頭を模った仮面が包み、巨大なバイザーがその眼部を覆った。

「仮面……ライダー……だど?!」

契約を交わし英霊の力の宿った鎧を纏った慎二は、*“仮面ライダー”* となったのだ。言うなれば、仮面ライダー・メドゥーサである。

「行くぞっ!」

仮面ライダーは、仮面キャスターに向かって突進して行く。

「ぬうっ!……く……喰らえっ!」

キャスターは再び周囲に魔法陣を発生させ、無数の光弾をライダーに放つ。だがライダーは素早い動きで光弾を悉く躲し、一気に間合いを詰めて来た。

「うおおおおおおおっ!」

そしてキャスターに向かって、渾身のパンチを放った。

「ぐうはああああああああっ!」

胸に激しい火花が飛び散らせ、キャスターは派手に後方に弾き飛ばされてしまう。そうして数メートル先の地面に、思い切り叩きつけられた。

「くうううううっ……な……何てパワーだ?……に……肉弾戦では……こつちが不利か?……」

キャスターはよろけながらも立ち上がり、再び羽を広げて上空に飛び上がった。

「よ……よくもやってくれたな？お返しだ！今度は手加減抜きで行くぞー！」

キャスターの背後に、先程の倍の大きさの魔方陣群が出現する。その魔法陣群から、より強力な光弾の雨がライダーに向けて放たれた。

「ふんっ！」

しかしライダーは目まぐるしく位置を変え、全ての光弾を難無く躲してしまう。

「お……おのれっ！」

そして今度は、ライダーの方が仕掛ける。一枚のカードを取り出して、デツキへとセツトする。

『Attack Vent!』

電子音に続き、ライダーの両手に鎖のついた鉄杭が現れる。ライダーはそれを、上空のキャスターに向けて交互に放った。

「とおおおおおおおおっ！」

「ぐうわあああああああっ！」

一本は何とか躲したが、もう一本に片方の羽を砕かれてキャスターは地面に落下してしまう。

「くううううううっ！」

キヤスターは何とか起き上がったが、そこに間髪入れずライダーが突進して行く。一
気に間合いを詰めたライダーは、キヤスターに向けて怒涛のパンチを浴びせて来た。

「はあああああああああああつ！」

「があああああああああつ！」

全身に激しい火花を飛び散らせ、ほぼ棒立ちのサンドバック状態と化してしまふキヤ
スター。そうして最後に強烈な一撃を受けて、またも派手に弾き飛ばされてしまった。
「があああああああああつ！」

キヤスターは先程よりも遠くまで吹き飛ばされ、頭部から地面に落下して倒れ込ん
だ。

「ぐっ……………う……………ううう……………」

さすがに今度は、直ぐに起き上がる事は出来なかつた。

「さっきの言葉を、お前に返そう……………大人しくクラスカードとカードデッキを渡せば、命
だけは助ける」

ライダーは、未だに倒れたままのキヤスターに言い放つ。

「な……………なん……………だど……………」

「もう勝負はついた……………出来れば僕は、人殺しはしたくない」

「ふ……………ふぎけるなつ……………わ……………私が……………負けるかあああああつ！」

怒りで気力を取り戻したのか、キャスターはふらつきながらも何とか立ち上がる。

「……………この程度で……………勝った気になるな……………い……………今……………私のとつておきを喰らわせてやるっ！」

キャスターは決め技のカードを取り出して、よろけながらもデッキへとセットする。

『Final Shoot Vent!』

今度はキャスターの手前に、今迄には無かった巨大な魔方陣が出現する。そこにキャスターの全魔力が集中していき、魔法陣が激しく輝き出していく。

「くっ…馬鹿め……………ならば仕方無い！」

ライダーも必殺のカードを取り出し、すかさずデッキへとセットする。

『Final Vent!……………Qubley!』

電子音と共に、ライダーの顔部を覆ったバイザーが開く。そこに現れた魔眼が、眩いまでの輝きを放った。

「なっ?!……………」

それによって巨大魔方陣が消滅したばかりか、キャスターの動きが完全に止まってしまふ。

「ど……………どうなって?……………う……………う……………ない……………」

まるで石化したかの如く固まって、キャスターは全く身動き出来なくなってしまう

た。

「ライダーキック!!」

そう叫んで、ライダーはキャスターに向かって駆け出しながら大きく跳び上がった。上空で体勢を変えて、左足を曲げて右足を大きく前方に突き出した。跳躍の頂点から降下を始めると速度が加速され、足が空気を発火させて激しい炎を巻き起こす。その炎はライダーの全身に広がり、火の玉と化したライダーがキャスターに激突していく。

「うおおおおおおおおおおおっ!」

「ぎいやああああああああつ!」

キャスターが立っていた一帯が、凄まじいまでの爆炎に包まれてしまう。

するとその爆炎の中から、ゆっくりとライダーが歩み出て来た。彼の右手には、キャスターのクラスカードが握られていた。

数メートル離れた所でライダーは立ち止まり、爆炎の方へと向きを変える。激しい炎が治まっていった後には、変身が解けて衣服も体もボロボロになった一人の外国人の男が蹲っていた。

「お前は?……冬木の人間では無いな?」

「そ……そうだ……わ……わたしは……が……ガリ……アスタ……ろ……六年……前……魔術協会……から……だ……第五次……聖杯戦争の……ため……に……」

男の腹部では、カードデッキから激しい火花が飛び交っていた。そのデッキは直ぐに小さく爆ぜて、そのまま消滅してしまう。

「……こんど……こそ……せ……せいはい……を……この……て……に……」
そこまで言つて、男の体は崩れていく。煙のように……いや、塵のように消滅していった。

「……」
その様子を、ライダーはしばし無言で見詰めていた。

「んっ……」
そこでふと、ライダーは自分の体も消滅し始めているのに気付く。指の先から、細かい塵のような物が噴き出し始めていた。

「や……やばいつー！」
ライダーは慌てて辺りを見回し、手近な窓を見付けてそこへ飛び込んだ。

「……っ?!」
病院の窓から飛び出して来たライダーは、その場に着地する。周囲には普通に騒音が戻っており、元の世界である事を実感する。そこでライダーは変身を解いて、元の慎二の姿に戻った。その右手にライダーのクラスカード、左手には奪ったキャスターのクラスカードを持ち、慎二は小さく眩いた。

「ぼ……僕はついに……ひ……人を……っ?!」

そこで突然、慎二は自分を見詰める視線の存在に気付く。慌てて振り返り、今飛び出して来た窓へと目を向けると……

「え……衛宮っ?!」

窓の中に……と言っても病院の室内では無く、窓ガラスの向こうのミラーワールドの中に、士郎の姿があった。

「ようやく契約を済ませたようだな?……ならば、後は戦うだけだ……」

そう言つて、士郎の姿はミラーワールドの奥へと消えて行く。

「ま……待て!……衛宮っ!……変身っ!!」

慎二は再び仮面ライダーに変身して、ミラーワールドの中に飛び込んで行った。

だがしかし、もうその場には士郎の姿は無かった。

「衛宮っ!おい!何処だ?……衛宮ああああああっ!」

その後いくら探しても、ライダーは士郎を見つけられる事は出来なかった。

へ 仮面ライダー・メドゥーサ……次回予告 へ

「あら?もしかして、間桐くん?」

「や……やあ……久しぶりだね、遠坂」

「ねえ慎二さん？お兄ちゃんは、一緒にや無いんですか？」

「え？」

「慎二さんや遠坂さんも帰って来てるなら、お兄ちゃんも一緒かなって思っちゃって……」

「ま……待てよ！遠坂！……ほ……本当に、僕と戦う気なのか？」

「遠坂と間桐は、昔から聖杯戦争で必ず戦う運命にあるのよ！覚悟を決めなさい！慎二！」

「な……何だ？……あのデカブツは？」

「ま……まさか？……バーサーカー?！」

『GUOOOOOOOOOOOOOOOOOO!』

『戦わなければ、生き残れない!』

《 第三話 》

僕はライダーのサーヴァントと契約を交わし、その力を駆使してキャスターのマスターを倒した。これで僕も、正式にこの聖杯戦争に参加した事になってしまった。

だが僕はまだ、色々な意味でこの戦いに納得がいていない。

衛宮は何故？このような形で聖杯戦争を復活させたのか？あいつの目的は何なのか？どうしてあいつは、あのようにな変わってしまったのか？そして今、あいつはいつたい何処に居るのか？

そんな疑問を抱えながら、僕は衛宮の家の前まで来てしまっていた。

今衛宮は、果たしてこの家に居るのであるか？妹の美遊ちゃん、藤村先生の家で面倒を診てもらっていると聞いた。もし衛宮が居ないのなら、ここは空き家になっている事になるのだが……

「あら？もしかして、間桐くん？」

「えっ？！」

そこで急に後ろから声を掛けられ、僕はゆっくりと後ろを向く。

「ああ、やっぱりそうだ……お久しぶりね」

その顔を、僕が忘れる筈は無い。

幼い時から僕は、ずっと彼女に憧れていた。しかし間桐家の長男という立場が枷となつて、素直になれずいつも彼女とは少し距離を置いて接していた。

彼女はこの地の霊脈の管理者である、遠坂家の六代目当主「遠坂凜」だ。

「や……やあ……久しぶりだね、遠坂」

緊張して、声が少し上擦ってしまふ。

「どうしたの？こんな所で……今は、東京に住んでいるって聞いていたけど……」

「あ……ああ……じ……実は、衛宮に呼び出されてさ……だけどあいつ、待ち合わせ場所に全然来なかったから……」

慌てて僕は、適当に話を取り繕った。

「ふうん……そうなの？」

その時何故か、一瞬遠坂の顔色が変わつたような気がした。

「と……遠坂こそ、どうしてここに？君は確か、イギリスの時計塔に入学したって聞いていたけど……」

「私も……衛宮君に呼び出されたのよ」

「えっ?!」

何だつて?……と……言う事は……

遠坂は一流の魔術師で、この地の管理者でもある。それを衛宮が呼び出したと言う事は、当然彼女も……

「ん?……どうかした? 間桐くん?」

青ざめて黙り込む僕に、遠坂が疑念を抱いて来る。

「あ……い……いや……な……何でも無いよ……それより、*「間桐くん」*は止めてくれないか? 僕はもう、*「間桐」*じゃない」

「あつ……そつか! 勘当同然で、家を飛び出したんだつたわね? じゃあ、今のお名前は?」

「あ……ああ……城戸……城戸慎二だ」

「城戸?……うくん、馴染めないわね……じゃあ、*「慎二」*って呼んでいい?」

「え?……べ……別に……いいけど……」

「そう? じゃあ、一緒に行きましようか? 慎二」

そう言つて、遠坂は僕の手を取つて歩き出す。

「お……おい! 遠坂っ!」

つい照れてしまう僕には全くお構いなしに、遠坂はどんどん衛宮家の敷地内に入つて

行く。

「こ……こいつ、こんな強引な性格だったのか？」

学校では物静かな優等生で通していたけど、猫被っていたのか？」

衛宮家の玄関の前まで僕を引き摺って来て、遠坂は何の躊躇いも無しに呼び鈴を鳴らす。

『は〜い!』

すると中から、何か聞き覚えのある女の子の声が聞こえて来た。

え?……こ……この声って?

玄関の横開きの戸が開けられ、一人の女の子が顔を出した。その女の子は、遠坂の顔を見てきよとんとしてしまふ。

「あ……あの?……どちら様でしょうか?」

僕の方は、その女の子の姿を見て思わず呆然となってしまうていた。

「いきなり失礼致します。私、遠坂凜と申し……」

遠坂が言い掛けたところで、女の子は彼女の後ろに居る僕に気付いて声を上げる。

「し……慎二さん?……慎二さんですよね? わあっ! お久し振りです!」

それは衛宮の妹、美遊ちゃんであった。

な……何で?! 美遊ちゃんは寝たきりで、藤村先生の家に居るんじゃないの?

どうしてここに居るの？何で、こんなに元気なんだ？

「や……やあ……ひ……久し……ぶり……」

訳が分からず、僕はうまく言葉が出て来なかった。

「あつーし……失礼しました！と……遠坂さんと言われますと、この地の霊脈の管理をなさっている……」

「ええーその遠坂です」

いきなり僕の方に声を掛けてしまった美遊ちゃんは、慌てて遠坂に詫びを入れる。遠坂の方はそんな事は少しも気にしていない様子で、かつて学校でそうであったような余所行きの笑顔を崩していない。

とりあえず僕と遠坂は、そのまま居間へと通された。遠坂家は冬木では有名だから、面識は無いが美遊ちゃんも当然知っている。僕は衛宮の親友だったから、美遊ちゃんとも親交が深い。そんな訳で、是非上がって行って下さいという話になったのだ。

「あらあ？遠坂さん？それに慎二くん？本当に久しぶりね！」

居間には、藤村先生も居た。

藤村先生は僕と衛宮、もちろん遠坂もそうだが、皆が通っていた「穂群原（ほむらはら）学園」の教師だ。衛宮が幼い頃からこの家に入出入りしていて、衛宮や美遊ちゃんの

姉代わりでもある。だから東京の大学に進学する時、衛宮は藤村先生に美遊ちゃんを託した。

しかし予想通り、衛宮はここには居なかった。

僕だけで無く遠坂の事も知っている藤村先生が居たので、つい昔話に花が咲いてしまふ。

しばしの間、他愛も無い談笑が続く。中々、今の衛宮の事を切り出せる雰囲気にならなかった。

そんな時、美遊ちゃんの方から切り出して来た。

「ねえ慎二さん？お兄ちゃんは、一緒じゃ無いんですか？」

「え？」

「慎二さんや遠坂さんも帰って来てるなら、お兄ちゃんも一緒かなって思っちゃって……」

「いや……それはこつちが……うぐつ！」

そう言い掛けた時、テーブルの下で遠坂に下腹部を蹴られてしまう。

「何だ？衛宮くんは、帰って無いんですね？」

相変わらずの作り笑顔で、遠坂は言葉を返す。そして横目で、僕を鋭く睨み付けた。

“空気を読みなさい!”

遠坂の目が、僕にそう訴え掛けていた。

「私達も、この家の門の前で偶然会ったんですよ。久しぶりに故郷に戻って来たので、懐かしい衛宮くんの顔でも見たいなと思っただけです」

遠坂は、うまくその場を取り繕う。さすが、猫被りの女王だ。僕の方も、それに話を合わせていく。

「あ……あいつ最近、殆ど研究室に顔を出さなくてさ……ぼ……僕も……しばらく会っていないんだよ……」

「そうなんですか……お兄ちゃん、ここしばらくは全く家に帰って来ないんです。一年くらい前からは、何の連絡もくれなくなっちゃって……」

「本当よねえ……こんな可愛い妹を一年間もほったらかして、いったい何やってのよ!あのバカ士郎は!」

美遊ちゃんの言葉に続いて、藤村先生が文句を言う。

一年前?……じゃあ、あいつが失踪した事を美遊ちゃん達は知らないんだ。未だに、東京に居ると思っっているんだ。という事は、冬木に戻って来ている事も知らないのか?

以降は、衛宮の事を美遊ちゃんに色々と聞かれた。

しかし失踪の事や聖杯戦争の事を話す事は出来ないの、かなり口を濁した会話になってしまった。そんな後味の悪い思いのまま、僕は衛宮家を後にするのだった。

衛宮家を出てしばらく歩き続けて行くと、交差点に差し掛かったところで突然遠坂が僕に言ってきた。

「慎二……貴方も、マスターだったのね？」

「……っ?!」

遠坂の言葉に、僕は動揺を隠せない。

しかし、この場は何とか取り繕おうと慌てて否定する。

「な……何の事だ?ま……マスターって?……ああ……もしかして、『聖杯戦争』とかいうやつの話かい?そんなものは、とつくの昔に無くなっているじゃないか……そもそも、僕には魔術回路が無い。僕がマスターになんかなれないのは、君が一番良く知っているだろう?」

すると遠坂は、笑みを消した真剣な目で僕を見詰めて言ってきた。

「確かに、六年前はそうだったわね?……でもそれじゃあ、今の貴方から魔力を感じるのはどうしてなのかしら?隠しているつもりかもしれないけど、私には誤魔化せないわよ……それに、貴方は衛宮くんと呼ばれて来たんでしょ?じゃあ、その理由は私と同じ筈

よね?」

そう言つて遠坂は、バッグからある物を取り出して僕に向けて僕に向けて翳した。それは、赤いカードデツキだった。

「か……カードデツキ?!……や……やはり遠坂? 君は……」

「そう! 私もマスターの一人よ!」

慎二と凜は、しばらくの間そのまま睨み合っていた。先にその沈黙を破つたのは、当然凜の方だった。

「じゃあ、始めましょうか?」

「ま……待てよ! 遠坂!……ほ……本当に、僕と戦う気なのか?」

「当然でしょ? マスター同士戦うのが、聖杯戦争よ!」

「だ……だけど僕は……き……君と戦うなんて……」

「衛宮くんが貴方と呼んだって事は、貴方を間桐の後継者としてマスターに決めたとて事よ! 遠坂と間桐は、昔から聖杯戦争で必ず戦う運命にあるのよ! 覚悟を決めなさい! 慎二!」

凜がカードデツキを腹部に当てると、赤いベルトが飛び出してデツキを彼女の腹部に固定する。そこで凜は「槍兵」の絵が描かれているカードを取り出し、叫びながらデツキへとセットした。

「変身!!」

『Instaall……Lancer!Cu Chulainn!』

ベルトを起点に赤いバトルプロテクターが、凜の体へと装着される。頭部を覆う仮面には、彼女のトレードマークであるツインテールの髪が柵引いている。

「くっ……変身!!」

慎二も仕方なく、デッキにクラスカードをセットする。

『Instaall……Rider!Medusa!』

紫色のバトルプロテクターがその体を包み込み、慎二は仮面ライダーへと姿を変えた。

「そう? 貴方のクラスはライダーなのね? じゃあ、行くわよ!」

そう言つて仮面ランサーとなった凜は、手近なカーブミラーの中に飛び込んで行く。

「ええい!……くそっ!」

ライダーもそれに続き、身近なカーブミラーの中に飛び込んだ。

二人は現実世界と同じカーブミラーから飛び出し、全く同じ景色のミラーワールドに降り立った。人も騒音も無い静寂な固有結界の中で、ライダーとランサーが対峙する。

まずはランサーが一枚のカードを取り出して、腹部のデッキへとセットした。

『Lance Vent!』

するとランサーの手に、深紅の槍が現れた。

「行くわよっ!」

ランサーはライダーに突進して来て、素早く槍で突いて来る。

「ま……待てよ!遠坂!……待って!」

ライダーはまだ戦う決心がついていないようだが、ランサーは一切容赦しない。彼に向けて怒涛の突きを放って来る。ライダーはそれを懸命に避けていたが、直ぐに壁際に追い込まれてしまう。

「はああああああああつ!」

そこに、ランサーの渾身の一突きが炸裂する。

「うわあああああああつ!」

ライダーは何とか跳び避けてそれを躲したが、背後にあつた壁は木端微塵に砕け散っていた。

「どうしたの?逃げてるだけじゃ勝てないわよ!」

「くそっ!……やるしか無いのか?」

このままでは殺されると、ライダーも覚悟を決めてカードをセットする。

『Attack Vent!』

ライダーの両手に、鎖付の鉄杭が現れる。

「はああああああああああつ！」

「うおおおおおおおおおつ！」

迫り来る槍を巧みに交わして、ライダーは鉄杭をランサーに向けて放つ。ランサーは槍を使って難無くその鉄杭を弾き、すかさずまた鋭い突きをライダーに放つ。

「やああああああああああつ！」

「とおおおおおおおおつ！」

ライダーも素早い動きで後方に飛び避け、間合いを取ってまた鉄杭を放つ。

しばらくはこの繰り返りで、戦況は拮抗してしまっていた。

「これじゃ埒が明かない！」

そう考えたライダーは、思い切って間合いを詰めようとする。当然ランサーは鋭く突いて来るが、その攻撃を紙一重で交わしてライダーはランサーの懐に飛び込んだ。

「うおおおおおおおつ！」

そこでランサーの腹部に、怒涛の如きパンチの連打を浴びせる。

「きやあああああああああつ！」

腹部に激しい火花を飛び散らせて、ランサーは大きく後方に弾き飛ばされて地面に叩きつけられた。

「くうっ！……や……やるじゃない？」

だがそれ程大きなダメージは受けなかったようで、ランサーは直ぐに起き上がった。た。

「それじゃあこつちも、そろそろ本気を出させてもらおうかしら？」

ランサーの魔力が高まっていき、全身から赤いオーラが立ち昇っていく。

“ちっ！……余計に火をつけてしまったのか？”

ライダーは、つい熱くなってしまった事を後悔する。

だがその時……

「うわっ?!」

「なっ?……何っ?!」

突然、地面が大きく振動を始めた。

「地震かっ?!」

ついそう叫ぶライダーだが、それは有り得ない事であった。固有結界の中には、通常空間のような自然現象は一切発生しない。

『……っ?!』

その振動の原因は、直ぐに二人の前に現れる。

ライダーとランサーが対峙している遙か彼方から、巨大な影が迫って来た。身の丈は彼等の倍以上はあるだろうか？褐色の鎧を纏っていて、その全身にまるで血管が浮き出

ているような赤い筋が張り巡らされている。それはあたかも血が流れているかのよう
に、時間差で赤く点滅を繰り返している。その頭部を覆う巨大な仮面の目も、同じよう
に赤く輝いていた。

「な……………何だ？……………あのデカブツは？」

「ま……………まさか？……………バーサーカー?!」

『GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!』

その巨人……………バーサーカーは、二人の側まで歩み寄って来たところでおよそ人のもの
とは思われないような雄叫びを上げる。そして手に持った巨大な斧剣を振り上げて、ラ
イダー達に向かって突進を始めて来る。

「く……………来るわよー!」

「ち……………ちいいいいいい!」

ライダーはすかさず鎖付の鉄杭を放つが、そんな物はバーサーカーの鎧にいともしんじょう
に弾かれてしまう。

「何だどつ?!」

そして巨大斧剣が、ライダーに向けて振り降ろされた。

「くうううううううう!」

ライダーは前に転がるようにしてそれを躲し、バーサーカーの懐に入り込む。

「うおおおおおおおっ!」

そこで先程よりも力を込めて、怒涛の連打をバーサーカーの下腹部にぶち込んだ。

だが、バーサーカーには全く応えた様子が無かった。

「なっ?!……………何とも……………無いの?」

そして左手で、軽くライダーを払い除けてしまう。

『GUOOOOOOOOOOOOOOOO!』

「うわあああああああつ!」

たったそれだけでライダーは派手に弾き飛ばされ、近くの壁に激しく叩きつけられてしまう。

「ぐふっ……………こいつ……………桁違いだ……………」

次にバーサーカーは、ランサーに向かって来る。

「……………このおおおおおっ!」

ランサーは魔力を込めて、槍で思い切りバーカーサーを突いて行くが…………

「えっ?!……………う……………うそっ?」

その渾身の突きも、片手で難無く受け止められてしまう。更にバーサーカーは、槍を掴んだまま腕を大きく振り回した。

「きゃあああああつ!」

槍ごと派手に振り回された後、ランサーも壁へと投げ付けられてしまう。

「ああああああああああああんっ！」

「……………この野郎おおおおおっ！」

再びライダーが突進して行くが、今度はバーサーカーの巨大斧剣を避け切れずにその身に剣撃を受けてしまう。

「ぐうはああああああああああつっ！」

胸部から激しい火花を飛び散らせて、弾き飛ばされたライダーはまたも壁に叩きつけられてしまった。

「だ……………だめ……………まるで……………大人と子供ね？……………半端な攻撃は効かない上に……………あ……………あいつの普通の攻撃全てが……………こっちの必殺に近い威力だわ……………」

よろけながら立ち上がり、ランサーは覚悟を決める。

「……………他の敵が見ている前では、使いたく無かつたけど……………そうも言つてられないわね？」

ランサーは決め技のカードを取り出して、デッキへとセットする。

『Final Vent!……………Gei Boruku!』

ランサーの槍が、赤く激しく輝き出す。ランサーは両手で槍を構えて、姿勢を低くして魔力を増大させる。

「はああああああああああっ!」

そうしてバーサーカーに向かい、猛突進を開始する。その速度はどんどん加速され、ランサー自身が光に包まれる。まさしく光の矢と化したランサーは、高速でバーサーカーの胸を一気に貫いた。

『GIYAAAAAAAAAAAAAAAA!』

バーサーカーを貫いた光の矢は、数メートル後方で止まってランサーの姿へと戻る。

断末魔の叫びを上げたバーサーカーは、膝を落として頭を垂れる。全身を覆っていた血のような赤い筋は光を失い、仮面の目も暗転してしまう。

「やった……のか?」

ようやく立ち上がったライダーは、呆然とそれを見詰めていた。

「えっ?!」

ところがランサーの方は、首を傾げていた。バーサーカーを倒したのであれば、彼女の手にはクラスカードが出現する筈である。しかしランサーの手には、まだバーサーカーのクラスカードは得られていなかった。

「なっ?……何だと?!」

その光景を見て、ライダーはまたも驚きの声を上げる。

『GUU……GUUU……』

『GIYAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA!』

激しい爆炎に包み込まれ、再び断末魔の叫びを上げるバーサーカー。

その爆炎の中からゆっくりと歩き出て来たライダーは、足を止めて後方を振り向く。

「……………?!」

しかしそのライダーの手の中にも、バーサーカーのクラスカードは出現しなかった。

爆炎が治まると、そこには膝を落としたバーサーカーの姿があった。先程同様完全に動作は停止していて、目の光も失われている。だがその身を包む鎧は、全く消滅してはいなかった。もしバーサーカーが倒されたのであれば、真つ先に鎧が消滅している筈である。

「ま……………まさか……………」

『GUU……………GUUU……………』

動揺するライダーとランサーの前で、バーサーカーはまたも息を吹き返し再生して元の状態に戻ってしまった。

「ふ……………不死身なの?」

圧倒的に強い上に不死身では、全く手の付けようが無い。絶望感に押し潰されそうになり掛けたところで、ライダーは体の異変に気付く。

「?!」

自分の指先から、塵のようなものが噴き出し始めている。戦闘が長引き過ぎた為に、体が消滅をし出していた。

「ま……まずい！急いでミラーワールドから出るんだ！」

ライダーはランサーに向かってそう叫び、手近なカーブミラーに飛び込んで行く。ランサーもその言葉を受けて、慌てて近くの無傷なカーブミラーに飛び込んだ。

ライダーとランサーは、相次いで現実世界の同じ場所に戻って来る。バーカーサーも二人を追って来るかと少し警戒していたが、しばらく待ってもバーサーカーだけは同じ場所には現れなかった。

『……』

ライダーとランサーはそれからまた少しの間睨み合っていたが、ランサーの方が変身を解いて凜の姿に戻る。それを見て、ライダーも変身を解いて慎二の姿へと戻った。

慎二が元の姿に戻ったところで、凜は少し笑みを浮かべながら彼に話し掛けて来る。

「……ねえ慎二？ちよつと提案があるんだけど？」

「え？……」

「しばらくの間、同盟を結ばない？」

「な……何だつて？」

凜の考えが良く分からず、慎二は戸惑っている。

「まさかバーサーカーが、あれ程の化け物だとは思わなかったわ……あんな不死身の怪物、とても一人じゃ倒せそうに無いわ。だからバーサーカーを倒すまでの間だけど、お互い協力し合わない？」

「あ……ああ……か……構わないよ」

慎二は、迷わず合意する。

元々彼は、凜と戦う事には大きな抵抗があつた。一時的にとはいえ、彼女と味方同士になれるのはかえって好都合だった。

慎二と凜の居る場所から、衛宮家を挟んで反対側の交差点。

そのカーブミラーから、バーサーカーが飛び出して来る。

『GU……GUUU……』

その体が激しく輝き出したかと思うと、バーカーサーも変身が解けていく。ただその仕組みは、慎二達のものとは大きく異なっていた。

全身を覆っていた巨大な鎧は、それ自体がロボットのパーツのようになっていた。それらが組み合わさる事によって、あたかも巨人のようにカモフラージュしていたのだ。全てのパーツが外されて現れたマスターの本体は、小柄な高校生くらいの女の子に過ぎ

なかった。

それは長くしなやかな銀色の髪をして、ルビーのような赤い瞳を持つ少女であった。ただその少女の赤い瞳は、どこか普通では無く正気を失っているかのようであった。

「……」

しばらくすると、その少女の表情が変わっていく。正気を失っていたかのような焦点の定まっていない瞳は、ごく普通の女の子の瞳へと戻っていった。

「えう……あ……あれ？」

少女は不思議そうに、辺りを見回している。

「……、家の裏手じゃない？……何で私、こんな所にいるんだろう？……い……いけない！約束の時間に遅れちゃう！」

少女はそう叫ぶと、慌てて走り出して行く。

そうして彼女は衛宮家の正門の方に回り込んで、門を駆け抜けて玄関の前まで辿り着く。その場で少し息を整えてから、ゆっくりとそこにある呼び鈴を鳴らす。

『は……い……』

中から声がして、横開きの戸が勢い良く開かれる。そこに現れた同い年程の少女に、その女の子は両手を合わせて頭を下げながら言う。

「……めん！美遊！少し遅れちゃった！」

「いらつしやい！イリヤ！全然大丈夫だから、早く上がって！」

「うん！」

イリヤと呼ばれたその少女は、美遊に促されるままに衛宮家の中へと入って行くのだった。

へ 仮面ライダーメドウーサ……次回予告 へ

「そもそも、バーサーカーの正体は誰なんだ？やっぱり魔術師なんだろう？」

「あんなゴツイ魔術師、この冬木には居ないわ！」

「六年前アインツベルンが召喚しようとしていた英霊こそ、 “バーサーカー” なのだ」

「もしかしたら、あいつがバーサーカーかもしれないだろ？」

「おそらくあいつは、 “アサシン” あたりでしょう？」

「そうか？それで判った……桜をこの聖杯戦争に参加させたのは、あんただな？」

『戦わなければ、生き残れない！』

《 第四話 》

バーサーカーとの戦いの後、僕と遠坂は冬木大橋の近くの公園に来ていた。

僕はベンチに腰掛け、お互いに情報を交換していた。

「ふうん……貴方、東京で衛宮くんと同じ大学だったの?」

「ああ、それを知ったのは研究室に入ってからだけどね……だけど、東京で再開した衛宮は全く人が変わっていた。あんなにお人よしだった男が、無口な冷血漢になっていて……」

「確かに……つい先日会った彼は、酷く無愛想な感じだったわね? 氷のように、冷たい目をしていたわ……」

「遠坂は、昔から衛宮と交友があったのか?」

「貴方程じゃ無いわ。言葉を交わした事はあつたけれど、二人だけで話した事は無かつた。彼、生徒会長の柳洞(りゅうどう)君とも仲が良かったでしょ? 私は何かと柳洞君と衝突していたから、その関係で顔を合わせる事も多かつたの。ただ、親友の綾子からは良く彼の話を聞いたわ。貴方が言うように度を超したお人よしで、いつも他人の為に

ばかり動いてたつて……今の彼は、全くそれとは正反対ね？」

「いったい、何があいつを変えてしまったのか？……妹の美遊ちゃんも、関係していると思つていたんだけど……」

「今日会つた感じじゃ、彼女は関係無さそうね……それに、衛宮君があんな魔術師になつてゐるなんて……」

「ん？……この地の管理者なのに、遠坂は衛宮の事はマークしてゐなかつたのかい？」

「聖杯を封印した彼の養父はマークしていたけど、彼は本当の息子じゃ無かつたし。衛宮切嗣も、彼を魔術師として育ててはゐなかつたから……実際学生時代も、彼からは全く魔力を感じなかつたわ……」

「そうか……」

「そもそも、今何処に居るのよあいつ？聖杯戦争は始まつたつていうのに、全然姿を現さないじゃない？現れたのは、カードデッキを渡された時だけよ！本当に戦う気があるの？」

突然遠坂は、凄い剣幕で僕に聞いて来る。

「い……いや、僕に聞かれても……」

「まあ、今はそんな事よりも、バーサーカーをどうするかね？」

「そもそも、バーサーカーの正体は誰なんだ？やっぱり魔術師なんだろう？」

「あんなゴツイ魔術師、この冬木には居ないわ！貴方が倒したキャスター同様、他所から来た魔術師かもしれないわね？」

「ならやつぱり六年前に、聖杯戦争の為に冬木に来ていたのかな？」

「?!」

僕がそう言うと、遠坂は何かを思い立ったように急に立ち上がった。

「……付いて来て」

「え？」

そう言つて遠坂は、僕に背を向けてどんどん歩き出してしまふ。

「ちよ……ちよつと待てよ！おい！遠坂！」

僕は、慌て彼女の後を追つて行つた。

遠坂に連れられて、僕は新都の言峰教会に来ていた。

礼拝堂に入ると、何か曰くがありそうな不気味な神父が僕達を迎えてくれた。

「今度は何用だ？凜？」

「情報交換よ。あれから何か判つたかしら？」

遠坂はこの神父と親しいようで、遠慮無しにずけずけと質問している。

「いや、特に無いな……そちらはどうだ？」

「マスターが二人判ったわ。一人は彼よ」

そう言つて遠坂は、僕をその神父に紹介する。

「間桐……じゃ無かつた、*“城戸慎二”*君よ」

「間桐？……そうか、間桐家の長男か？」

「*“間桐”*と呼ばれるのが癪に障るので、僕は直ぐに否定した。

「元な！……今は、僕はもう間桐とは関係無い！」

「ふむ……もう一人は誰だ？」

「もう彼が倒しちゃったけど、*“アトラム・ガリアスタ”* っていう六年前に魔術協会から

聖杯戦争の為に派遣された魔術師よ」

「何？彼が？……そうか、まだ冬木に留まっていたのか？」

「あともう一つ、バーサーカーとも遭遇したわ。これがとんでもない巨体で、私達の倍以

上の背丈だったわ」

「ほう？いつたい、どんなマスターなのだ？」

「それが判らない……だから、貴方に聞きたいの」

「私に？……何をだ？」

「マスターになりそうな人物の心当たりを……六年前、貴方聖杯戦争の監督役だったで

しよ？結果的に聖杯戦争は行われなかったけど、その候補者に心当たりがあるんじゃないかと思って」

「成程、そういう事か……確かに、候補者は何人か知っているが……」

「それを教えてくれない？」

「私がそれをお前に教えるのは、フェアでは無いのでは？」

「そう言う神父に、遠坂は嫌らしい笑みを浮かべながら言う。

「何を今更……もう貴方、監督役じゃ無いんだから関係無いでしょ？それに、私は情報を提供したわ。魔術の世界は等価交換じゃ無かったかしら？」

「やれやれ、まんまと嵌められたか？……判った、教えよう」

「そうこなくっちゃ！」

僕は、呆れてそのやりとりを見ていた。

何と言うか、彼女はとてつもなくしたたかな女だ。物静かな優等生などと信じていた、自分が情け無くなつて来た。

「もう一人、魔術協会から派遣された魔術師が居た。名は『バゼット・フラガ・マクミツ』。だが彼女は、聖杯戦争が無くなるや否や他の任務で呼び戻された。以降、消息は分からない。まず、冬木に留まっているとは思われない」

「うん、うん」

「あとは、お前も良く知っていよう。遠坂、間桐……いや、『マキリ』と並ぶ、冬木の聖杯戦争を創り出した御三家のもうひとつ……」

「え？……まさか？アインツベルン？」

「そうだ。アインツベルン家が第五次聖杯戦争の為に用意した、マスターでありながら聖杯の器でもある存在、『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』」

「そいつが、まだ冬木に居るの？」

「本来ならば聖杯の器である彼女が、ここまで生き永らえる事は出来ない筈だった。だがどうやったのかは知らないが、彼女は今も生きている。成長し、お前達が通っていた学校に通っているようだ」

「え？……穂群原学園に？」

「そうだ。但し、聖杯の器としての機能は完全に失われている。もつとも今回の聖杯は、そのような物を必要としないようだがな？」

そこに、僕が口を挟む。

「そのイリヤスフィールって娘、凄い大女なのか？」

「いや……凜よりも小柄な少女だが？」

「はあ？それじゃあ、全然バーサーカーとは似ても似つかないじゃないか？」

「確かにな……だが、六年前アインツベルンが召喚しようとしていた英霊こそ、『バー

「サーカー」なのだ」

『何だつて（ですつて）?!』

思わず、僕と遠坂の声が被っていた。

教会からの帰り道、僕はずっと気になっていた事を遠坂に尋ねた。

「なあ遠坂？あの神父、魔術師なんじゃないのか？」

「あら？良く気付いたわね？」

「やっぱりそうか？……じゃあ、あいつもマスターかもしれないじゃないか？」

「ええ、間違い無くそうでしょうね？」

「なっ？……気付いていたのか？それで何で、こっちの情報を漏らしてんだよ！もしかしたら、あいつがバーサーカーかもしれないだろ？」

「いいえ、あいつはバーサーカーじゃないわ」

「な……何でそう言い切れるんだよ？」

「あいつがバーサーカーなら、あんな襲い方はしないわ。一人のところを狙って、確実に狩っていくでしょうね？でもそんな戦法、そもそもバーサーカーには適さない。おそらくあいつは、『アサシン』あたりでしょう？」

その言葉は、ひどく納得がいった。

「暗殺者」、如何にもあの神父にぴったりの感じがする。

「そんな相手に隠し事なんて、するだけ無駄よ。ならそれをうまく使って、逆に情報を引き出してやるのよ」

本当にしたたかな女だ、遠坂凜。

「まずは、イリヤスフィールについて調べましょ！」

その時僕は、突然桜の事を思い出した。良く考えたら、今日はまだ病院に行っていないかった。

「わ……悪い！遠坂！……それ、明日にしてもらえないか？」

「え？……どうして？」

「い……いや……病院に……さ……桜の所に行ってやらないと……」

そう言った途端、遠坂の顔色が変わった。

「えっ？……桜がどうかしたの?！」

僕は遠坂を連れて、桜の病室に来ていた。

「……桜……」

目覚める事の無い桜を、遠坂は辛そうにじっと見詰めている。うっかりしていた。

桜を間桐家に養女に出したのは、遠坂家だ。だから桜は、遠坂の実の妹なのだ。

しばらく無言で桜を見詰めていた遠坂だったが、ようやく顔を上げて口を開いた。

「……慎二……貴方の戦う理由は、桜なのね？」

「え？……あ……ああ……」

「そう……だからって、手加減はしないから……」

遠坂は潤んだ瞳を僕に向けてそう言うと、そのまま病室を出て行ってしまった。

彼女が帰った後も、僕は桜の横にしばらく座ってじっとその顔を見詰めていた。

ただいくら待っても、桜が目覚める事は無い。それでも僕は、彼女の傍に居てやりたかった。六年もの間、ずっと離れ離れになっていたのだから……

日が沈むまで桜の横に居て、ようやく僕は病室を後にした。

人気の消えた通路を進んで階段を降り、病院の夜間出入口から外に出た時、僕は急に背後に強烈な殺気を感じてしまう。

「……っ?!」

慌てて振り向いた僕の目に、異様な人影が飛び込んで来る。病院のガラス戸の奥か

ら、そいつはじつと僕を睨み付けていた。痩せ細った長身で全身を濃紺のバトルプロテクターに包み、顔には白い骸骨のような仮面を嵌めている。

「ま……まさか？……アサシン?！」

そいつはいきなり、何か黒い物を僕に投げ付けて来た。間近に近付いて、それがナイフである事が分かった。

「のおわあああああああつっ!」

僕は真横に転げるようにして、何とかそのナイフを躲す。そしてすかさずカードデッキを取り出し、腹部に当てて装着する。

「へ……変身っ!!」

『Instaall……Rider! Medusa!』

クラスカードをセットして仮面ライダーに変身して、僕は病院のガラス戸の中に飛び込んで行った。

ミラーワールドに飛び込んで来たライダーに対し、アサシンは引き続き投げナイフで攻撃を仕掛けて来た。

「ちっ……」

ライダーをそれを巧みに躲しながら、攻撃用のカードをデッキにセットする。

『Attack Vent!』

鎖付きの鉄杭を両腕に装着し、アサシンの攻撃の合間を縫って今度はライダーがアサシンを攻撃する。

「……」

アサシンは何も言葉を発する事無く、辺りを縦横無尽に飛び回ってライダーの鉄杭を躲していく。

「(っ)……(っ)のおおおおおっ!」

間合いを詰めようとしても、アサシンは直ぐに飛び退いてしまう。常にライダーと距離を置いて、決して近付いて来ようとはしなかった。肉弾戦では分が悪い事が分かっているのか、徹底して離れてナイフを投げ続けていた。

その内にアサシンは、一枚のカード取り出してデッキにセットした。

『Hide Vent!』

その途端、突然アサシンの姿がその場から消失する。

「な?……何?」

驚いてライダーは辺りを見回すが、アサシンは姿どころかその気配はすらも完全に消してしまっていた。

「ど……何処だ?……何処に行った?」

そしてそれ以降は、もうライダーに向けてナイフが飛んで来る事も無くなってしま
う。

「ちっ……逃げられたのか？」

僕は元の世界に戻って変身を解き、再び帰路についていた。

歩きながら、さっきのアサシンの事を考えていた。

あの長身……昼間会った神父に近かった……やっぱり、あいつがアサシンか？

僕がマスターだと知って、早速暗殺しようとして来たのか？

どうする？遠坂に相談するか？

しかし、遠坂とはバーサーカーを倒すための同盟だ。アサシンは管轄外か？

僕は悩んだ末、その足で言峰教会に乗り込んだ。今後寝首を搔かれるくらいなら、今
夜中に決着を付けた方がいいと思っただからだ。

言峰神父は、まるで何事も無かったかのように僕を迎え入れる。

「どうかしたかな？間桐慎二……いや失礼、城戸慎二だったかな？」

「どうしたかじゃ無い！いきなり襲い掛かって来やがって！やるなら、ここで決着を付

「けようぜー！」

熱くなっている僕に対して、言峰はあくまで冷静だった。

「襲い掛かった？ 決着？ …… 何の事だ？」

「とぼけるな！ あんたがアサシンなんだろう？」

「私のアサシン？ …… 何故そうなる？」

「な…… 何故って……」

そう言われると、返答に困ってしまう。

「遠坂が言ったから」なんてのは、何の根拠にもならない。実際に、アサシンの正体を見た訳でも無い。証拠は何も無かった。

「それでも私は聖職者だ。神に誓って断言しよう、私はアサシンでは無い！」

「そ…… そうか…… いきなり、済まなかった……」

僕は、そう答えるしか無かった。

言峰が信用できる人間だと思った訳では無いが、その言葉には嘘が無いように思われたからだ。

「邪魔したな……」

僕が仕方なく帰ろうとすると……

「待て！」

言峰が、僕を呼び止められた。

「先程は忘れていた……というか、既に間桐家のマスターがお前だと聞いていたので無関係と思つたが、もう一人マスター候補が居た……正に、アサシンにぴつたりと言う男がな」

「なつ……何だつて?……誰だ?そいつは?」

「お前の祖父……間桐家の当主、間桐臓硯だ!」

「何っ?!」

僕は教会を出た後、六年ぶりに間桐邸を訪れた。六年前は、もう二度とこの屋敷に戻る事は無いと決めていたのだが……

呼び鈴も鳴らさずに、どんどんと屋敷の奥へと入って行く。リビングに入ると爺さんが……いや、間桐臓硯が奥のソファに腰掛けて僕を待っていた。

「くつくつくつ……間桐を捨てた者が、この屋敷に何用じゃ?」

「回りくどいのは嫌いだから、単刀直入に聞かぞ。爺さん、あんたがアサシンか?」

「ふん、言峰にでも聞いて来たのか?あの似非神父が、余計な事を言いおつて……」

臓硯は懐から濃紺のカードデッキを取り出して、僕に翳して見せて来た。それを見た

瞬間、僕の脳裏にある事実が思い浮かんだ。

「そうか？それで判った……桜をこの聖杯戦争に参加させたのは、あんただな？」

「確かにそうじゃが……それは、桜の意志でもあるのじゃぞ」

「何だと？」

「桜には、聖杯に望む明確な願いがあつた」

「な……何だ？それは？」

「くつくつくつ……判らぬか？それはそうよのお……お前達はお互い相手の事を気遣つている癖に、相手の本当の気持ちには気付いておらんだからのお……」

「相手の……本当の気持ちだと？」

「お主は桜の為を想つてこの家を出たつもりじゃろうが、それを知つたあやつがその後どうなつたと思う？」

「何っ？」

「塞ぎ込んで、慟哭に落ちたのじゃよ。自分のせいで、お主を不幸にしてみましたと考え
てな」

その言葉に、僕は例えようの無い衝撃を受けてしまう。

「な……何だつて？じ……じゃあ、桜の願いつて言うのは？」

「お主の幸せに、決まつておるじゃろう？」

「ば……馬鹿なっ?! ぼ……僕は……桜の為にと思って……」

僕はその場に蹲って、項垂れてしまった。

そうだ! どうしてその事を考えなかった?

僕が桜の事を想っているのと同様に、桜も僕の事を想ってくれていた筈だ。そんな僕が自分の為に間桐家から勘当同然で追い出されたと知れば、どれだけ彼女が傷付いてしまおうか?

必要以上に自分を責めて、おそらく自分が許せなくなってしまったのではないか?

そんな時に聖杯戦争の事を知れば、思わずそれに縋ってしまったもおおかしく無いだろう?

酷く衝撃を受けている僕に、臓硯は更に追い打ちを掛けるように言ってくる。

「お主たちは、本当に滑稽じゃったわ。氣遣う相手のために自分が犠牲になる、それが自分を想う相手にとってどれだけの痛みになるか、全く気付いていおらなかつた……まあそれが、儂にはかえって好都合じゃったがな?」

「……好都合?」

その言葉に、僕は顔を上げて臓硯を睨み付ける。

「桜が慟哭に沈めば沈むほど、儂の思い通りに染まって行くからのお……傀儡にするのは容易じゃったわい」

「く……傀儡だと?……ふ……ふざけるな!桜はお前の道具じゃ無い!」

「道具じゃよ!そうで無ければ、わざわざ養子にしたりはせん!」

「何?……ま……間桐の……この家の跡取りの為じゃ無かったのか?」

「跡取り?……別にそのような者はもう必要無い。要は、儂が生き続ければ良いのじゃからな?」

「なつ?……何だつて?」

そして僕は臓硯から、今迄聞かされていなかった間桐家の真実を聞かされた。

今日の前に居る臓硯は、正確には僕の祖父では無かった。もつと何代も前の祖先にあたる。彼の本名は「マキリ・ゾオルケン」。かつてこの地に移り住んだ、冬木の聖杯戦争を生み出した御三家の一人だったのだ。

臓硯は何百年も生き続ける為にその身を蟲に変え、他者を喰らう事でここまで生き続けて来ていた。もはや人間では無く「妖怪」と言つていい。ただそうやって他人を喰らう「生」の維持も限界に来ていて、崩壊のサイクルが異常に早くなつて来ていた。

「そ……それじゃあ……あんたが聖杯に望むのは?」

「そう……儂の望みは若返りと不老不死よ!このような直ぐに腐り出す肉体では無く、昔のような生氣溢れる体を永遠に得る事じゃ!」

「……この妖怪がつ!あんたの思い通りにはさせないぞ!」

この男は狂っている……こんな奴に、絶対に聖杯は渡せない！

元々愛想は尽きていたが、今の話で完全に踏ん切りが付いた。もはやこの男は身内でも何でも無い。今ここで、確実に倒しておかなければならない化物だ！

「変身!!」

慎二はカードデッキに、ライダーのクラスカードをセットする。

『Instal11……Rider! Medusa!』

濃い紫のバトルプロテクターが慎二の体に装着され、慎二は仮面ライダーに変身する。

「ほっほっほっ……変身!!」

臓硯もカードデッキを腹部に取り付け、暗殺者の絵の描かれた「アサシン」のクラスカードをセットする。

『Instal11……Assassin! Hassan!』

濃紺のバトルプロテクターが臓硯の体に装着されていくが、同時にその体型も変化していく。小柄な腰の曲がった老人の体型から、長身の痩せ細った体型に変化する。そして、白い骸骨の面の付いた仮面が頭部を覆う。

「そうか……契約した英霊によって、体型が変化する場合もあるのか?」

「ふっ……元々桜は、儂が敗れた時の保険だったんじゃないがな? 慎二、お主では保険になら

ん！ここで死ぬが良い！」

「そうはいくか！死ぬのは貴様の方だ！臓硯！」

共にリビングの窓に飛び込んで行く、ライダーとアサシン。そうして二人は、ミラーワールドのリビングに姿を現す。そして直ぐにリビングのガラス窓を開け、庭に飛び出して戦闘を開始した。

だがアサシンは、やはり常に距離を取ってライダーに近付いて来なかった。

「キイイイイイイッ！」

アサシンは奇妙な奇声を上げながら、投げナイフでライダーを攻撃して来る。夜の暗がりを利用して、黒塗りのナイフを投げ付けて来ていた。

『Attack Vent！』

ライダーは鎖付きの鉄杭を装備し、黒塗りのナイフを悉くそれで弾き返す。

「うおおおおおおおっ！」

更にはその鉄杭でアサシンを攻撃するが、アサシンは素早く庭を跳び回ってこれを躲している。

「(･･････)のおおおおっ！」

「キイイイイイイイッ！」

ライダーは何とか間合いを詰めようと突進して行くが、アサシンは盛んに逃げ回って

いる為一向にの距離を縮められない。

「くそっ！これじゃ埒が明かない……」

するとそこで、アサシンは前回と同じカードをデッキにセットした。

『Hide Vent!』

直後にアサシンは、再びその姿を消してしまう。

「くっ！……またか？」

ライダーは動きを止め、精神を集中させてアサシンの気配を追う。しかし何処にも、アサシンの気配も感じられない。

“また逃げたのか？……いや、奴は僕を殺すと言った。ならば、まだこの場に居る筈だ……こちらの隙を突いて、必ず仕掛けて来る！その一瞬を狙うしか無い！”

しばしの静寂……そして突然、ライダーの背後にアサシンが姿を現した。

「?!」

直ぐに反応し、振り返るライダー。

しかしアサシンは、即座にデッキに決め技のカードをセットする。

『Final Vent!……Zabaniya!』

アサシンの右腕のプロテクターが外れ、中からオレンジ色に光る腕が現れる。

「……っ！」

その腕に只ならぬ危険を感じたライダーは、慌てて後方に飛び避ける。

「キイイイイイイイッ！」

だがその腕は、異様な程に長く伸びた。ライダーは避けきる事が出来ず、その一撃を胸に受けてしまう。

「し……しまっ……」

やられたかと思われたが、そのアサシンの攻撃に威力は全く無かった。オレンジ色に光るアサシンの腕は、ライダーのプロテクターに難無く弾き返されてしまった。

「何だ？……見掛け倒しか？」

拍子抜けするライダーだが、アサシンの元に戻ったオレンジの腕を見て驚く。

「……っ?!」

その右手の掌には、何故か剥き出しの心臓が乗せられていた。

「あれは？……ま……ま……まずいつ！」

瞬時にアサシンの技を察知したライダーは、慌てて決め技のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Qubelley!』

「はあっはっはっはっ！無駄じゃ！今の儂には、目が存在せん！」

アサシンは左手で、顔面にある骸骨の仮面を外す。そこには目どころか、顔自体が存

在していなかった。

ライダーのバイザーが開き、魔眼が眩い輝きを放つ。しかし目が存在しないアサシンが、その光を目の当たりにする事は無い。

「ふん……愚か者め！これで終いじゃ！」

そう言つてアサシンは、コピーしたライダーの心臓を握り潰す……

「なっ？……何じゃとっ?!」

ところがアサシンは、その心臓を握り潰す事が出来なかった。それどころか、指先ひとつ動かせない。

「愚か者は貴様だ！目があるが無かろうが関係無い！その存在を認識した時点で、既に石化の魔眼の魔力に掛かっているんだよ！」

「ば……馬鹿な?!」

「ライダーキック!!」

「や……やめろおおおおおっ！」

ライダーは大きく跳び上って、アサシンに向けてキックを放つ。火の玉となったライダーが、アサシンに向かって突撃する。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

「ぎゃああああああああああっ！」

激しい爆炎と共に、断末魔の叫びを上げるアサシン。

燃え盛る炎の中から、ライダーはゆっくりと歩み出て来る。そうして振り返った彼の手には、アサシンのクラスカードが握られていた。

未だに燃え盛る炎の中に、バトルプロテクターを失った臓硯の姿があった。その腹部のカードデッキは、爆ぜるように砕け散ってしまう。

「お…………おの…………れ…………」

臓硯は醜い老人の姿から、無数の蟲の姿に変わり、更に焼かれて塵となっていく。

「くくく…………だが…………わしはまだ…………死なん…………今回は…………だめ…………でも…………」
「何っ?」

そのような意味深な言葉を残しながら、臓硯は消滅していった。

「…………」

ライダーはしばらくその場に佇み考え込んでいたが、急に何かを思い立ったのかガラス窓の中へと飛び込んで行った。

新都にある病院の、桜が眠る病室。

その窓から突然、ライダーが飛び出して来る。

ライダーは桜のベッドの横に立つと、一枚のカードを取り出した。それは、キャスターのクラスカードだった。ライダーはそのカードを、デッキへとセットする。

『Borrow Vent!……Caster! Rule Breaker!』

電子音と共にライダーの右手に、歪な形をした短剣が現れる。

「むんっ!」

何を思ったのかライダーは、その短剣を桜の心臓目掛けて突き刺した。

だが剣を刺されても、桜の胸からは血が噴き出す事は無かった。その代わりに……

『ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……』

突如ぐももった呻き声が病室内に響き渡り、桜の胸から一匹の羽の生えた蟲が湧き出して来た。ライダーはすかさず、その蟲を左手で掴み上げる。

『ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……』

そして、握る手に力を込めていく。

『や……やめろおおお……わ……儂を殺せば……ま……間桐の血は……永遠に……絶たれて……しまっぞおお……』

蟲から出ているのは、臓硯の声であった。臓硯は万一の為に、核となる蟲を桜の体内に潜ませていたのだった。ライダーはキャスターの能力を借り受ける事によって、それを桜の体から追い出したのだ。

「間桐の血など、もう既に絶たれている！……お前はもう人間じゃ無い！狂った幻想に取り憑かれた、ただの亡霊だ！」

ライダーは、一気に蟲を握り潰した。

『うぎやああああああああああああ………』

これにより臓硯は、今度こそ完全に息絶えるのだった。

ライダーは変身を解き、慎二の姿に戻る。そのまま、目を覚まさない桜を見詰めながら呟く。

「す……済まなかった……桜……僕は……お前の苦しみを、何にも判っちゃいなかった………」

慎二の目からは、大粒の涙が流れ出す。

慎二は、唯々泣くだけだった。

〈 仮面ライダーメドゥーサ……次回予告 〉

「ようこそおいで下さいました。イリヤスファイル・フォン・アインツベルンです」

「遠坂家六代目当主、遠坂凜です」

「私……その当時の記憶が無いんです。この冬木に来てから、聖杯が封印されるまでの記憶が……」

『……』

「い……イリヤ？」

「イリヤジャ……ナイ……ワ……ワタシハ……クロエ！」

「同時に必殺技を決めれば、その威力は何倍にも跳ね上がるわ！」

『Survive!……Pegasus Cyclone!』

「ふん、死に損ないが……疾く、塵になるがよい！」

『戦わなければ、生き残れない!』

《 第五話 》

その日は午前の中に桜の病院に寄り、昼頃に遠坂と穂群原学園の前で待ち合わせた。イリヤスフィールは、現在この学園の生徒だ。まずは、普段の彼女の様子を探ろうという話になったからだ。

僕は六年振りに、穂群原学園の門をくぐる。僕は学生時代の衛宮を思い出し、少しばかり感傷に浸っていた。すると……

「慎二！ボーツと突っ立って無いで！」

そう言つて、遠坂が僕の腕を引っ張つて来る。

「とりあえず、職員室に行くわよ！」

僕はそのまま引き摺られるように、遠坂と共に校舎の中に入つて行つた。

職員室には藤村先生が居て、見学を申し出ると快く了承してくれた。その後僕達が校庭に出ると、丁度昼休みになつたので生徒達が大勢外に出て来ていた。

「慎二さ〜ん！遠坂さ〜ん！」

そう呼ばれて後ろを振り向くと、美遊ちゃんが手を振りながらこちらに元気に駆けて

来る。

その様子を見る限り、彼女は本当に元気になったようだ。加えて昔に比べると、より明るく活発になったようにも思える。当時は病弱なせいも学校にも行けず、殆ど家に閉じ籠っているだけだったから。

「どうしたんですか？ 今日は何？」

「え？……ああ……せ……折角こつちに来たんだから、久しぶりに母校を見てみたくなってるね……」

僕は、適当に理由をでっちあげた。

「そうなんですか？……で、どうですか？ 六年ぶりに訪れた母校は？」

「え？……いや……その……」

だがその場凌ぎの返答の為、後の対応に困ってしまう。

「施設や先生達は余り変わっていないけど、美遊ちゃんも含めて学生達の質は上がっているわね？ 私達の世代より、皆賢そうでしたっけりしているわ」

「またあ！ 遠坂さんって、本当にお上手ですね？」

遠坂のこう言うところは、本当にさすがだと思う。即興で、当たり障りの無い返答を返して来る。そうやってしばらく談笑していると……

「美遊くう！」

美遊ちゃんを、一人の少女が呼んだ。

雪のように綺麗な銀の長髪の、小柄で赤い瞳の少女だった。

「あつ、イリヤ……待って！今行くねっ！」

『?!』

美遊ちゃんの言葉に、僕達は揃って反応する。

彼女がイリヤスフィール？美遊ちゃんの友達だったのか？

「それじゃあ慎二さん、遠坂さん、ゆっくり見学して行つて下さいねっ！」

そう言つて美遊ちゃんは、その少女に向かって走つて行く。僕らは手を振つて、笑みを浮かべながら彼女を見送つていた。

すると、イリヤと呼ばれる少女とも目があつた。その少女はにっこりと笑つて、僕達に丁寧にお辞儀をして来た。釣られて僕らも、彼女にお辞儀を返した。

美遊ちゃんと合流したイリヤは、その後は振り向くこともせず二人で走り去つ行った。

「あの娘が、イリヤスフィールね？」

遠坂が言う。

「あんな可愛い少女が、本当にバーサーカーなのかい？」

「外見に惑わされない方がいいわよ。昨日貴方を襲つたアサシンだつて、変身後に大き

く体型を変化させたんでしよう?」

「だからって……あの娘とバーサーカーじゃ違いすぎるよ!」

「まあそれは追々調べるとして……私はちよつと、先生方にイリヤスフィールの事を聞いてくるわ。貴方はどうする?」

「ん? ああ……僕は、ちよつとその辺を見て回りたい……」

「そう……じゃあ、一時間後にまたここで落ち合いましょう」

そう言つて、遠坂は職員室に戻つて行つた。

遠坂と別れた僕は、一人弓道場へと向かつた。

昼休みにここに屯する部員はいないのか、弓道場には誰も居なかつた。中に入り射場に立つて、僕は回想に浸る。

六年前、まだ衛宮が退部する前、僕と衛宮と桜が、一緒に居られた時間。思えばあの頃が、一番充実していた時代だったかもしれない。衛宮の弓は正に百発百中で、本気で狙つてあいつが的を外すところは見た事が無かつた。桜は、そんな衛宮の射形に見惚れていた。それは男の僕でも、惚れ惚れするくらいだったから……

そんな事を考えていたら余計に哀しくなり、胸が締め付けられるようだった。とても居た堪れなくなり、僕は直ぐに弓道場を後にした。

その後も校内をぶらぶらと見て回り、一時間後に遠坂と合流する。先生達に色々聞いても、大した情報は得られなかったようだ。そうなればもう直接、本人に問い質して見た方がよい。遠坂はイリヤスフィールの住所を聞いて来たが、それが偽の住所である事を見抜いていた。そこで僕達は、学校が終わるまで学園の外で待つ事にした。

一旦学校の外に出て、僕達はイリヤスフィールが下校して来るのを待つ。

下校時刻が近付いた頃、一台の黒い外車が現れ校門の近くに停まる。かなり立派な金持ちが乗るような車で、どうにもうちの学校には不釣り合いな感じがする。

しばらくすると校門から、仲良く話しながら美遊ちゃんとイリヤスフィールが歩み出て来る。それと同時に、黒い外車の後ろの席のドアが開く。

「じゃあ美遊！また明日ね！」

「うん！また明日！イリヤ！」

校門の前で美遊ちゃんと別れたイリヤスフィールは、開かれたドアからその車に乗り込んだ。そして、車は走り出して行く。

「追うわよ！」

「あ……ああ！」

僕は予め呼んでおいたタクシーに乗り込み、その車を尾行して行つた。

イリヤスフィールを乗せた車は、冬木市郊外の樹海の所まで行き、更に樹海の奥へとどんどん進んで行つた。しかしタクシーはそこまで入っていけなかつたので、僕は樹海の前で降ろされてしまう。

そこからは歩きになつてしまつたが、遠坂が使い魔に車を追わせていたので道には迷わなかつた。一時間くらいは掛つてしまつたが、何とかイリヤスフィールの家には辿り着いた。

ただその屋敷を見て、僕は呆氣に取られてしまう。そこはまるで、西欧の巨大な城だつた。間桐の家も西欧風の大邸宅ではあるが、ここは桁が違う。まるでここの空間だけ、日本では無いかのようであつた。

「行くわよー！」

呆然とする僕とは違い、遠坂はどんどん進んで行く。豪華な玄関の扉の前に立ち、躊躇する事無く呼び鈴を鳴らす。

しばらくして扉が開き、西欧の白いメイド服を着た女性が姿を現す。

「どちら様でしょうか？」

「始めまして。私、遠坂凜と申します。イリヤスフィールさんにお会いしたいのですが

……」

全く物怖じせず、堂々と話す遠坂。僕は、唯々圧倒されていた。

「申し訳ありません。イリヤお嬢様は、アインツベルン家の御当主で有らせられます。

ご予約の無い一般の方々を、おいそれとお通しする訳には……」

そのメイドは、遠坂を門前払いしようとする。

「セラ―」

ところが彼女の言葉を、後ろから少女の声が遮った。

「その方は、この地の霊脈の管理者である遠坂家の御当主様ですよ！無礼な物言いは控えなさい！」

それは、イリヤスフィール本人であった。

「は……はいーも……申し訳ありませんー……遠坂様、ご無礼をお許し下さい」

そう言つてセラと呼ばれたメイドは、深く頭を下げて遠坂にお詫びをする。

「いいのよ」

遠坂は、それをさらつと受け流した。

イリヤは僕達の所まで寄つて来て、改めて遠坂に詫びて来る。

「大変失礼致しました。どうぞお入り下さい……セラ、お二人を応接間にお通しして」

「畏まりました」

そうして僕達は、パーティー会場かと思われるような広い応接間へと通された。

しばらく待たされた後に、応接間にイリヤが現れる。既に学校の制服では無く綺麗なドレスに身を包み、正に貴族のお嬢様と言う姿に変わっていた。気品漂う雰囲気も、学校で見た時とは全く違っていた。

「ようこそおいで下さいました。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです」

ドレスの裾を両手で上げ、西欧の貴族風の挨拶をするイリヤ。僕達も立ち上がって、彼女に挨拶を返す。

「遠坂家六代目当主、遠坂凛です」

「と……遠坂さんの高校時代の同級生で、城戸慎二と言います」

「間桐」とは言わなかった。事実上勘当されているし、間桐の後継者と見られるのも嫌だったからだ。

挨拶が済み、皆席に着く。

まずはイリヤが、口を開いて来る。

「遠坂さんは現在はロンドンの時計塔にいらっしやるとお聞きしていましたが、いつこちらへ？」

「はい、一週間ほど前から」

「こちらには、どのような御用で？」

「はい、知人に呼ばれました。とある、儀式に関する事で……」

遠坂は、いきなり本題に入っていく。

「儀式……ですか？」

「はい……『聖杯戦争』という儀式です。もちろん、ご存知ですよね？」

「はい、当然知っています。元々私は、その為に生み出されたと言つてもいい存在ですから……ですがこの冬木では、もう聖杯戦争は無くなった筈ですが？」

「それが、また始まるとしたら？」

「それは有り得ません。だから、私もこうして普通に暮らしているのですから」「これを、ご存知では無いですか？」

そう言つて遠坂は、カードデッキを取り出してイリヤに見せた。

「おい！遠坂！それは……」

流石にそんな宣戦布告みたいな真似をされて、僕はつい狼狽えてしまう。

「何ですか？それは？」

しかし、イリヤの反応は僕達の予想を裏切るものだった。

「え？……ご存知無いですか？」

「はい……見た事も無い物ですが……」

これには、さすがに遠坂も怪訝な表情をしてしまう。

「もし六年前の……私が聖杯となる筈だった聖杯戦争の事をお聞きしたいと言われるのでしたら、お力になれるとは思えません」

「え？……それはどういう事ですか？」

「私……その当時の記憶が無いのです。この冬木に来てから、聖杯が封印されるまでの記憶が……」

『……』

僕は、言葉を失ってしまふ。

その後は、もうこちらからは何も聞く事が無かった。と言うよりも、聞いても仕方が無かった。

今起こっている聖杯戦争については、カードデッキやクラスカード等、キーとなる事柄をイリヤは何も知らない。六年前の行われなかった聖杯戦争に関する事は、完全に記憶が無い。これでは全く話が進まないのです、続けても何一つ得られる情報は無い。

こちらがさじを投げてしまうと、今度はイリヤの方からいろいろな事を聞いて来た。それはもちろん聖杯戦争の事等では無く、穂群原学園に関する事だった。僕も遠坂も、あの学校のOBで（僕は、家出したから中退だが）彼女の先輩にあたる。現役の穂群原学園生であるイリヤにとっては、聞きたい事は山程あるだろう。

更に僕が美遊ちゃんと昔からの知り合いと判ると、今度は美遊ちゃんに関する質問の嵐になった。美遊ちゃんはイリヤにとつて、初めての同世代の友達だったからだ。そんな質問をする時の彼女は、貴族のお嬢様では無くどこにでも居る普通の十七歳の女の子だった。

その後「是非夕食をご一緒に」と言われ、準備のために少し待たされる事となった。イリヤは自分の部屋に戻り、僕達はバルコニーに出て外の風に当たりながら話をしていった。

「無駄足だったかしらね？」

そう、遠坂は言う。

確かに、彼女程マスターとして適した人間は居ない。聖杯の器としての機能は無くなったが、その体にはまだ常人とは比べ物にならない数の魔術回路が残っている。その上、彼女はアインツベルン家の現当主だ。遠坂と間桐が聖杯戦争で戦う運命だと言うなら、アインツベルンもそういう事になる。衛宮が、彼女をマスターに選ばない筈が無い。しかし、彼女は何も知らない。カードデッキの事も、クラスカードの事も、現在既に新たな聖杯戦争が始まっている事でさえ。

「どう見ても僕には、彼女が嘘をついているようには見えないよ」

「私もよ。綺礼は例外だけど、全く動揺のそぶりも見せないであれだけ嘘を並べられる人間はまず居ないわ」

綺礼は例外って……じゃあ、あの神父は人間じゃ無いのか？

まあ確かにあいつなら、顔色一つ変えずに虚言を並べられそうだが……

自室で鏡を見ながら、髪を整え直しているイリヤ。その鏡の中の彼女の後ろに、突然ある男性の顔が映る。それは、衛宮士郎であった。

「えっ？……誰？」

イリヤは慌てて後ろを向くが、自分の背後には誰も立っていない。だが前に向き直ると、やはり鏡の自分の後ろには一人の男性が立って彼女をじっと見詰めている。そして士郎は、イリヤに向かって言ってくる。

「敵のマスターが目の前に居るのに、何故戦わない？イリヤ……」

「ま……マスターって……」

士郎の顔を見ている内に、イリヤの様子が変わっていく。表情がどんどん強張っていく、目の焦点も合わなくなっていく。

「し……シロ……ウ……」

徐々に彼女の瞳も、狂気に満ちた目へと変貌する。

「シロウ……コ……コロス！」

イリヤの体から、只ならぬ魔力がオーラのように溢れ出し始める。

その魔力を、少し離れた場所に居る凜も察知した。

「……………?!」

「ん?……どうした? 遠坂?」

「何なの?……この異常な魔力は?!」

血相を変えて、部屋の中に戻って行く凜。

「お……おい! 遠坂!」

凜は部屋に戻るや否や、廊下へと飛び出して行く。そして膨大な魔力の元に向けて、全速力で駆け出して行った。

「おい! 何処へ行くんだよ?」

慎二も、慌ててその後を追った。

凜はイリヤの部屋へと駆け込んで行き、慎二もそれに続いた。部屋に入った二人は、そこに立つイリヤの姿を見て愕然としてしまう。

「い……イリヤ?」

イリヤの妖しく光る赤い瞳は、完全に正気を失っていた。

そして彼女の全身からは凄まじい魔力と、異常なまでの殺気が溢れ出している。とても先程までの、気品漂うお嬢様と同一人物とは思われなかった。

「チ…………チガウ…………」

凜が彼女の名を呼んでいたが、イリヤはそれを否定して来た。

「え？…………違うって…………何が？」

「イリヤジャ…………ナイ…………ワ…………ワタシハ…………クロエ！」

「く…………クロエ？」

「ベ…………別な人格が現れたの？」

イリヤ…………いや、クロエの言葉に、慎二と凜は更に驚いてしまう。

「ミンナ…………クロス…………」

そう言いながら、クロエは左手を上げる。するとそこに、褐色のカードデッキが出現する。

「か…………カードデッキ?!」

「あの色は?…………」

更にクロエは、右手も上げる。右手には、バーサーカーのクラスカードが出現した。

クロエは左手のカードデッキを腹部に当てて装着し、そこに右手のクラスカードをセツトする。

「へ……………へんシン!!」

『Installer……Berserker! Heracles!』

クロエの周囲に、巨大な鎧のパーツが出現する。それらは次々と、彼女の体に装着されていく。それによりクロエの体は、原型を全く留めていない姿に変貌していく。頭部にはまるで飾りのように仮面が乗って、褐色の鎧の巨人が完成する。更にはその全身に、血管のような赤い筋が現れて輝き出した。

「や……………やつぱり、彼女がバーサーカーだったのね?」

「だ……………だけど、クロエって何だよ? 彼女は本当にイリヤなのか?」

「それどころじゃ無いわ! こっちも変身するのよ!」

「え?……………あ……………ああ! 分かった!」

凜と慎二も、慌ててカードデッキにクラスカードをセットする。

『Installer……Lancer! Cu Chulainn!』

『Installer……Rider! Medusa!』

バーサーカー、ランサー、ライダーが、イリヤの部屋で対峙する。

『GUOOOOOOOOOOOO!』

バーサーカーは手に持った巨大な斧剣を、いきなりライダーに向けて振り下ろして来る。

「何iiiiiiiiiiiiiiiiっ?!」

ライダーは、慌てて飛び避ける。その背後の壁は一撃で粉微塵に砕かれ、外に筒抜けの大穴が空いてしまう。

「い……いきなり何しやがんだ! 戦うのは、ミラーワールド内であつて決まりだろ?」

「無駄よ! 完全に狂戦士化して自我を失っているわ! そんなルール、その怪物には通用しないわ!」

不平を言うライダーに、ランサーが解説する。

「じゃあ、どうすんだよ? このままここで戦うのか?」

「私達の方が、ミラーワールドに飛び込むのよ! 間違い無く、あいつは追って来るわ!」

そう叫んで、ランサーはイリヤが使っていた鏡の中に飛び込んだ。

「よ………よしっ!」

ライダーもそれに続き、鏡の中へと飛び込んで行く。

『GUUUUUUUUUUUUUUUUU!』

ランサーの詠み通り、バーサーカーもそれを追って鏡の中に飛び込んで来た。

そうして全員が、ミラーワールド内のイリヤの部屋に移動した。

「とおおとおおとおおっ!」

「はあああああああっ!」

ランサーとライダーは、直ぐに窓から城の中庭へと飛び降りる。狭い部屋の中では、思うように闘えないからだ。

『GUOOOOOOOOOOOOOO!』

バーサーカーも当然の如く追って来て、中庭で再び三戦士は対峙する。

「さつき変身の時、 “ヘラクレス” って言ってたわね？」

ランサーが言う。

「ヘラクレス? ……あの、ギリシャ神話の?」

「十二の試練を乗り越えて、神になったっていう大英雄よ!」

「十二の試練? ……それってまさか?」

「もしかしてこいつ、十二の命を持つてるんじゃないの? そうでもなきや、あの不死身さは説明できないわ!」

「な……何だつてえ?」

そんな会話をしているところに、バーサーカーが巨大斧剣で襲い掛かって来る。

「のおわあああああああつ!」

「きやあああああああつ!」

ライダーとランサーは、左右に別れてこれを飛び避けた。

「じゃああいつを倒すには、十二回殺さなきやいけないっていうのか?」

「そう……それも普通の攻撃は効かないから、必殺技レベルの攻撃でね？」
「そ……そんな殺生な……」

『GUOOOOOOOOOOOOOO!』

バーサーカーは、そんな不平を言うライダーの方に向かって来る。

「やばっ！文句を言っている場合じゃ無いか……」

ライダーは急いで、必殺技のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Qubele!』

ライダーのバイザーが開き、魔眼が激しい輝きを放つ。それにより、バーサーカーの動きが……

『GUOOOOOOOOOOOOOO!』

「えっ?!」

「うわあああああああつ！」

止まらなかった。

「何だ?!……どうなってるんだ?」

間一髪で何とか斧剣の攻撃を躲して、その後も逃げ回るライダー。

「な………何でだよおおおおおつ！何で、石化の魔眼が効かないんだ?」

懸命に逃げるライダーを見ながら、ランサーは呆然と立ちながら呟いた。

「ま……まさか?」

バーサーカーから距離を取ったところで、ライダーもようやく反撃に出る。

「こ……こうなりや、魔眼抜きでやるしかない!」

そう叫んでバーサーカーに正対し、一旦腰を落として力を溜めてから大きく跳び上がる。

「ライダー! キイイイイイイイイイック!!」

ライダーは火の玉となって、向かって来るバーサーカーに突撃する。

しかし……

『GUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!』

「うわあああああああつ!」

「何ですって?」

ライダーの火の玉は、バーサーカーの強靱な鎧に難無く弾き返されてしまった。激しい火花は飛ぶがバーサーカーは全くの無傷で、跳ね飛ばされたライダーはランサーの真横に落下した。

「くっ……ど……どうなってやがる?……キックも……効かねえ……」

「い……一度受けた攻撃には、耐性が出来るのかも?」

「な……何だつて? じゃあ、同じ技はもう通用しないのか?」

「お……おそらくね？」

「そんな殺生な？」

ライダーは、思わず泣きたくなってしまった。十二回も必殺技で倒さなければならぬのに、一度使った技は二度と通用しないのだ。しかも今回の闘いでは、既にライダー・キックが使用不可になってしまっている。

『GUOOOOOOOOOOOOOOOO!』

再びバーサーカーは、斧剣でライダーとランサーを攻撃して来る。

ライダーとランサーはまた左右に分かれてこの攻撃を躲し、大きくジャンプしてバーサーカーを飛び越してその後方にて合流する。

「遠坂……あいつを十二回倒せるだけの、必殺技のストックがあるか？」

「あるわけ無いでしょ！」

『GUOOOOOOOOOOOOOOOO!』

バーサーカーは、また向かって来る。

「じゃあ、どうする？」

「一度で、何回分も倒せるくらいの大技を決めるしか無いでしょ！」

「あるのか？ そんな技？」

「作るのよ！ 同時に必殺技を決めれば、その威力は何倍にも跳ね上がるわ！」

「判った！じゃあ、タイミングは任せる！」

ライダーはとっておきのカードを取り出し、デッキにセットする。

『Final Vent!……Bellero phon!』

ライダーの前方に、突如バイクのハンドルだけが出現する。ライダーが両手でそのハンドルを握ると、ライダーの足元から激しい光のカーテンが立ち昇る。

『Survive!……Pegasus Cyclone!』

その光のカーテンを突き破り、銀色に輝くバイクに跨ったライダーが現れた。

「行くぞおおおおおっ！」

ライダーはアクセルを吹かし、バイクに跨ったままバーサーカーに突撃して行く。

『GUAAAAAAAAAAAAAAAA!』

激しい火花が飛び交い、さしものバーサーカーも数歩側方に跳ね飛ばされる。但し倒される事は無く、バランスは崩すが直ぐに持ち直す。一旦駆け抜けて行ったライダーは数十メートル先で反転し、再度バーサーカーに突撃する。

『GUAAAAAAAAAAAAAAAA!』

これを何度も繰り返し、時間を稼ぐ。

この間にランサーも、とっておきのカードをセットする。

『Final Vent!……Death Flight!』

ランサーの槍が、赤く激しく輝き始める。ランサーはそれを投槍の如く構えて、魔力を高めていく。そうして、十分に魔力が溜まった時点で声を上げる。

「慎二！今よ！……たあああああああつ！」

ランサーは叫びながら、その槍をバーサーカーに向けて思い切り投げ付けた。

一方のライダーは、アクセルを全開に噴かせて再びバーサーカーに突進して行く。

「ライダーブレイク!!」

ペガサスサイクロンは急加速して、摩擦熱により激しく燃え上がる。炎の玉と化したサイクロンが、バーサーカーに突撃して行く。

炎の槍と炎の玉、この二つが、ほぼ同時にバーサーカーに激突する。

『GIYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!』

凄まじい爆炎が、バーサーカーを一気に包み込む。

そこから一塊の炎が飛び出し、数メートル先に降り立ってライダーへと姿を変える。

『……』

ライダーとランサーは、じつとその爆炎を見詰めていた。

だが爆炎が治まったその場には、まだ褐色の鎧に包まれたバーサーカーの姿が残っていた。

「……これでも……駄目なの？」

ついランサーは、そう漏らしてしまう。

ただバーサーカーの様相は、今迄とは少し違っていた。全身からは蒸気のように煙を出し、血管のように張り巡らされた赤い筋はその光を弱めていた。更に……

「コ……コロス……ミ……ミンナ……」

バーサーカーの声は、人外の叫びでは無くなっていた。変身前のイリヤ……いや、クロエの声であった。

「狂気が……薄れているのか？」

「効いているわ！ 慎二……おそらく、残る命もあと僅かな筈よ！ もう一度、別な手段で同時攻撃を……」

「待ってくれ！ 遠坂！」

更なる攻撃を提案するランサーの言葉を遮り、ライダーはゆつくりとバーサーカーに歩み寄って行く。

「ば……馬鹿っ！ 何考えてるのよ？……止めなさい！ 慎二！」

ランサーが必死になって制止するが、ライダーは構わず無防備にバーサーカーの前に立つ。

「コ……コロス……」

そんなライダーに、巨大斧剣を振り上げて攻撃しようとするバーサーカー。

「止めるんだ！イリヤ！」

ライダーはそう叫ぶが、バーサーカーは止まらない。容赦無く斧剣を振り下ろして来るが、ライダーはそれを躲しながらまた叫ぶ。

「もう止めろ！お前は、本当はこんな戦いを望んで無いだろう？カードデッキを捨てるんだ！」

「無駄よ！狂気が薄れても、そいつはもうイリヤじゃ無い！別人格のクロエよ！」

ランサーが再度苦言するが、それでもライダーは説得を止めない。

「お前が死んだら、美遊ちゃんも悲しむ……美遊ちゃんを泣かせたいのか？」

「ミ……ミユ?!……」

この言葉に反応し、バーサーカーは動きを止める。

「と……止まった？」

それに驚くランサー。

「もう止めるんだ！お前は、戦うべき人間じゃ無い！……もう、マスターでは無いんだ！」

「チ……チガウ……ワ……ワタシハッ！」

しかしバーサーカーはまた動き出し、ライダーを巨大斧剣で攻撃して来た。今度はライダーも避けきれず、その一撃を胸に受けてしまう。

カードをデッキにセットする。

『Attack Vent!……Gate of Babylon!』

するとアーチャーの背後に、無数の時空の歪が発生する。そしてそこから無数の武器が湧き出して来て、バーサーカー目掛けて放たれる。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

一瞬で、バーサーカーは串刺しになって沈黙してしまおう。

「……っ?!」

「い……イリヤっ！」

ランサーは唯々驚愕し、ライダーはイリヤの身を心配して声を上げる。

だがバーサーカーは直ぐに蘇生を開始し、再び動き出す。但しその様相は、更に弱々しくなっていた。

「ほう? まだ命が残っていたか? しぶとい奴め……では次だ!」

再び黄金の騎士の背後に無数の時空の歪が現れ、先程とは違う武器群が放たれる。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

またもバーサーカーは串刺しになり、一瞬にして沈黙してしまおう。

「ど……どれだけ必殺の手段を持っているのよ? ああ金のピカはっ?」

それでも、バーサーカーは再度蘇生した。ところが……

「コ……コロ……ス……テ……テキ……」

明らかにもう限界のようで、ただ立っているだけのような状態であった。

「ふん！どうやら、今度こそ最後のようだな？」

そんな瀕死の状態でも、バーサーカーは闘いを止めようとはしない。

「や……やめろ……もう……止めてくれ……」

ライダーは、右手を握り締めて呟く。

「これで終いだ！」

アーチャーの背後に今迄の倍以上の大きさの時空の歪が発生し、その中からバーサーカーの腕の太さくらいはありそうな巨大な槍が顔を出す。

「やめろおおおおおおおおおっ！」

ライダーの叫びも虚しく、無情にその槍は放たれてバーサーカーの胸を貫いた。

「……………?!」

もはや断末魔の叫びも無く、バーサーカーの巨体は消滅してしまう。

その跡には、跪いたクロエ……いや、イリヤの姿があった。腹部のデツキは、既に消滅してしまっている。

「い……イリヤっ！」

ライダーは、慌ててイリヤに駆け寄ろうとする。

「ミ…………ミユ…………」

だがその眼前で無情にも、イリヤの体も消滅して消え去ってしまった。

「き…………きさまああああああああつ！」

これに激昂したライダーは、アーチャーに向かって突進を始める。

「だ…………駄目よ！ 慎二っ！」

ランサーはまた制止しようとするが、怒りに我を忘れたライダーは止まらない。

「ふん！ 次は貴様が死にたいか？」

アーチャーの背後に、新たな時空の歪が現れる。

「そこまでだ！」

そこに突然、また新たな別人の声が響き渡った。

『?!』

この声で、その場の全員が動きを止める。何故か激昂していたライダーまでが、突進を止めてしまった。それ程までに、その声には異常なまでの威圧感があった。

そしてその場に、重厚な鎧の歩む音が響き渡って来る。少しずつ、少しずつ、その音の主が近付いて来て、皆の視界に入ってきて来る。

その姿を見て、ライダーは叫ぶ。

「え…………衛宮っ！」

それは遂に他のマスター達の前に姿を現した、黒く重厚な“セイバー”の鎧を纏った衛宮士郎、“仮面セイバー”であった。

へ 仮面ライダーメドゥーサ……次回予告

『Sword Vent!……Barrier of the Wind King
!』

「ぐうわあああああああああああつ!」

「み……見えない剣……ですって?!」

「何を王様気取りになってんのよ?」

「王様気取りでは無い、本当に王様なのだ」

「貴方に、凜を殺すことができますのですか?」

「もう迷いは、完全に断ち切っている。あとはただ、目的を遂行するだけだ……」

「慎二……絶対に勝ちなさい!負けたら許さないわよ!」

「分かった!……お前こそ、衛宮なんかには負けるなよ!」

『戦わなければ、生き残れない！』

《 第六話 》

ライダー、ランサー、アーチャーの前に、この聖杯戦争の仕掛人である衛宮士郎……いや、セイバーが現れた。

重厚な黒い鎧と仮面に包まれたセイバーは、丁度バーサーカーが消滅した辺りまで歩み寄って来て足を止める。

「皆、この場はこれで手を引け！」

『何っ?!』

セイバーの言葉に、その場の全員が驚きを示す。

「これで、残ったマスターは四人となった……そこで一つ提案がある。聞く気があるのなら、明日の二十一時に言峰教会の礼拝堂まで来い」

「お……お前……いきなり現れて、何言ってやがんだ？」

セイバーの一方的な言葉に、ライダーは反感を示す。

「気に入らん……」

そこに、アーチャーも不満そうに口を挟む。

「貴様、この我に命令する気か？」

アーチャーはそう言いながら、威嚇するかのように背後に現れている時空の歪をセイバーの方に向けて来る。

「勘違いするな。別に強制している訳では無い。ここで今直ぐ殺し合いたいのなら、勝手にすればいい。俺はただお前達に、相応しい舞台を用意してやろうと言うだけだ……どうするかは、お前達の自由だ」

そこまで言うのと、セイバーは皆に背を向ける。そうして、元来た方向に歩き去ろうとする。

「ま……待ちやがれ！衛宮あああああつ！」

ライダーはそんなセイバーを逃がすまいと、彼に向かって突進して行く。セイバーの直ぐ後ろまで来ると、そのまま殴り掛かって行こうとするが……

『Sword Vent!……Barrier of the Wind King
!』

セイバーはすかさずデッキにカードをセットし、振り向きざまに剣撃を放つて来た。しかもその剣は光学迷彩されたかのように、カモフラージュされていて視認が出来なかった。間合いの見切れないライダーは、もろに剣撃を受けて弾き飛ばされてしまう。

「ぐうわあああああああつ！」

胸から激しい火花を飛び散らせ、その場に仰向けに倒されるライダー。

「み……見えない剣……ですって?!」

「ほう……」

驚くランサーと、感心するアーチャー。

「ぐっ……ううう……」

ダメージを受けてしまい直ぐには起き上がれないライダーに、セイバーは言い放つ。
「そんなに殺し合いがしたければ、他の奴とやれ……俺は今この場では、殺り合うつもりは無い……」

セイバーは再び背を向けて、どんどん歩き去って行く。

「くくくく……まあそれも良かろう。この場は、口車に乗ってやろうではないか……」
そう言つて、アーチャーも姿を消してしまふ。

「くそっ……ま……待って言ってるだろっ!」

何とか起き上がり、セイバーを追おうとするライダー。

「待って! 慎二……もう、時間が無いわ!」

ランサーに言われて、ライダーは自分達の体が消滅し始めている事に気付く。

「くっ……」

仕方無く、ライダーはランサーと共に現実世界に戻るのだった。

現実世界のアインツベルン城に戻った慎二達は、事の顛末をセラ達に告げた。

セラとリーゼリットと言う二人のメイド達は、かなり沈んではいたが大きく取り乱す事は無かった。逆に慎二達気を使って、

「これも、アインツベルンに生まれた者の運命です。どうか、お気になさりませぬように」

と言つて彼等を見送つてくれた。

その帰り道、落ち込む慎二を凜が慰める。

「貴方が気に病む事じゃ無いわ……どちらにしても、あんなつた彼女を救う術は無かつたんだから……」

それは、慎二にも判つていた。しかし、イリヤの死を知つたら美遊がどれだけ悲しむか？その事を考えると、慎二の胸は酷く締め付けられてしまうのだった。

凜と別れた後、慎二は滞在先のビジネスホテルに帰つて行つた。臓硯が居なくなつても、もう間桐の家には戻らなかつた。

慎二はベッドに横たわりながら、今日起こつた様々な出来事を思い浮かべていた。

穂群原学園でのイリヤとの邂逅。

その後、アインツベルン城での彼女との会談。

イリヤの別人格、クロエの出現。

バーサーカーとの死闘。

そして最後のマスター、アーチャーの登場。

そこまで回想した時、慎二の脳裏にある疑問が浮かんでくる。

“ん？……そう言えば、アーチャーのマスターは誰なんだ？”

色々あり過ぎて、慎二も凜もその事を追及するのを忘れていた。

“あの声と喋り方は、言峰じや無かったな……だいたいあいつ、神に誓って”とか
言つて否定していたし……随分偉そうな奴だったな？まるで王様みたいに……やはり
外国人か？アインツベルンのように、貴族か何かなのか？”

そのような事を考えながら、慎二はそのまま眠ってしまうのだった。

その翌日、言峰教会。

二十一時になる数分前には、礼拝堂に慎二、凜、綺礼の三人が集まっていた。

彼等の他には、誰もその場には姿を現さなかった。この事実は、アーチャーのマス

ターが言峰綺礼である事を物語っていた。

「言峰っ！お前神に誓って違うなんて言っておいて、やっぱりマスターだったじゃないか？」

慎二は、強い口調で綺礼に詰め寄っている。

「私は、〃アサシンでは無い〃と言ったのだ。マスターで無いとは言っていない」

「なっ……何をっ！」

「待って！慎二！」

更に食って掛かろうとする慎二を、凜が制止して綺礼に質問をする。

「それよりも、あんた本当にアーチャーのマスターなの？」

「そうだが？」

「じゃあ、あの高飛車な俺様口調は何なの？あんた、あんな性格だった？声まで違ってたけど、何を王様気取りになってんのよ？」

「王様気取りでは無い、本当に王様なのだ。世界最古の英雄王〃ギルガメッシュ〃、それが私が契約した英霊だ」

「なっ？……」

「あれは、あんたが契約した英霊だったの？何で？英霊本体が戦ってるのよ？」

「本体は私だ。ただ、戦闘を支配しているのは彼の精神だ。それが、私と彼の契約条件な

「あ……ありかよ？そんなの……」

その時礼拝堂の中に、その場の三人とは別な者の声が響き渡る。

「……皆、揃っているようだな？」

慎二達が声のする方に顔を向けると、教会の窓ガラスの中に土郎の姿があった。

「え……衛宮っ！」

慎二は、今にも殴り掛かりたくなる衝動をぐつと抑える。

「相変わらず、ミラーワールドの中なのね？……それで何なの？提案って？」

凜は、いきなり本題を突く。

「……丁度四人残った。そこでここからは、トーナメント形式で戦いたいと思うが……どうだ？」

『トーナメント？』

全員同時に声を上げる。

「まず二組に別れて、一対一で戦う。そして勝ち残った者達で決勝を行い、最後に残った者が勝者となる。シンプルで余計な手間も掛からず、効率的だと思うのだがな？」

「その前に、一つ質問があるわ！」

凜がそこに、口を挟んで来る。

「……何だ？」

「貴方はどうやって？今回の聖杯戦争を起こしたの？この地の聖杯は、未だ封印されたままよ。いったい、どんなトリックを使っているのかしら？」

それはこの場に居る全員が、疑問に思っている事でもあった。

「……今回の聖杯戦争で利用しているのは、この世界の聖杯では無い」

『何だつて（ですつて）?!』

慎二と凜が、同時に驚きの声を上げる。綺礼はある程度予測していたのか、特に反応を示さない。

「俺は固有結界を使って、異世界の聖杯と接触する事に成功した。今使っている聖杯は、別な平行世界の冬木の聖杯だ」

「この世界の冬木の聖杯には、何の影響も無いのね？」

「ああ……」

「判ったわ……トーナメントについては、私には異存は無いわ。どの道戦わなきゃいけないのなら、その方がすつきりしていい……下手な横槍も入らないでしょうしね？」

凜は、土郎の意見に合意する。

「私にも異論は無い」

綺礼も、これに合意する。

「僕も構わない……だけど、どうやって組合せを決めるんだ？」

慎二は合意すると同時に、士郎に質問を返す。

「まず、お前達三人で一組目を決めろ。方法は任せる。そうして残った一人が、俺の相手だ」

そう言われて、綺礼がくじを作る。

くじ引きを行った結果、慎二と綺礼が戦う事となり凜が残った。

「私があなたの相手よ、衛宮くん……それで、戦いの時間と場所は何処にするの？」

「時間は明日の二十一時でいいだろう？……場所は、お前が決めていい」

「あら？余裕ね……まあどの道ミラーワールドの中で戦うんだから、何処でも大差は無いか？……じゃあ、穂群原学園にしましょう！弓道場に集合って事で！」

「……いいだろう」

士郎は全く冷静さを崩さず、殆ど無表情で答える。

「ではな……もし決勝まで生き残っていたら、また会おう……」

慎二と綺礼にはそう言葉を残し、士郎はミラーワールドの奥に消えて行く。

「ま……待て！衛宮っ！」

慌てて慎二がそう叫ぶが、士郎はもう戻っては来なかった。
「くそっ！どこまで勝手な奴なんだ？」

そんな慎二に、綺礼は淡々と話し掛けて来る。

「それで城戸慎二、我々は何時？何処で戦う？」

「そんなもん、同じ時間にここでいい！」

殆ど投げやりに、慎二はそう答える。

「判った……では明日の二十一時に、ここで待っている」

この夜は、これで解散となった。

翌日桜の病院に寄った後、慎二は何気無く深山町の商店街を歩いていた。

“そう言えば衛宮と桜と三人で、部活の帰りによくここに来ていたな……”

そんな感傷に浸りながら歩いていると、商店街の外れの公園のベンチに美遊が坐っているのを見付ける。

“え？……美遊ちゃん？……何をしているんだ？”

美遊は、じつと俯いて座っていた。彼女の横には、ずっしりと荷物の詰まった買い物袋が置かれている。心配した慎二は、美遊に近寄って行って声を掛けた。

「美遊……………ちゃん?」

「え?!」

驚いて美遊は顔を上げ、慎二の方に振り返る。その彼女の目からは、涙が流れていた。

「ど……………どうしたんだ?」

美遊のそんな顔を見て、慎二は狼狽えてしまう。

「し……………慎二さん?……………ごめんなさい!」

美遊は慌ててハンカチを取り出して、頬の涙を拭いている。

「な……………何かあったのか?」

「い……………いえ……………な……………何でも無いんです」

「そんな訳が無いだろう?……………ま……………まさか?」

慎二は、美遊が聖杯戦争の事……………士郎の事を知ってしまったのかと思い、大いに焦ってしまふ。

だが、次に出て来た彼女の言葉は……………

「……………じ……………実は……………お友達が……………」

「え?……………お友達?」

「学校のお友達が……………い……………イリヤって言うんですけど……………」

「……………っ?!」

士郎の事では無かったが、その名前も刃物のように慎二の胸に深く突き刺さる。

「今日突然……転校しちゃったって……私、何にも聞いてなくて……あんなに仲が良かったのに……ううん……わ……私が……そう思っていた……だけ……なの……かな？」

そう言つて、美遊はまた泣き出してしまふ。

「……」

慎二は何も言えず、俯いて泣く美遊をただ見詰めていた。

彼は知っている。「転校」と言うのは余計な心配を掛けまいとするアインツベルン家の気遣いで、イリヤは既に亡くなつてしまつてしまつている事を。

だがその事実を告げれば、余計に美遊を悲しませてしまふ。それだけは、絶対に口にする事は出来なかつた。

慎二がしてあげられる事は、せいぜい泣きじやくる美遊に胸を貸してあげる程度の事であつた。美遊は慎二の胸に縋りつき、声を殺して泣き続けていた。

そんな慎二を、少し離れた木陰から見詰める一つの人影があつた。

凜である。

「あの馬鹿……あんたは、桜だけで手一杯でしょうが？何でそうやつて、何でもかんでも背負い込もうとするのよ？これじゃあ、どつかのお人良しと一緒じゃな……」

そう思いかけて、凜ははっとする。

「どつかのお人よし? ……だ ……誰? それ? ……」

一瞬凜の頭には、何者かの人影が浮かんでいた。だが直ぐに靄が掛かったように、記憶があいまいになってしまう。今思い浮かんだのはいったい誰なのか? 何度思い出そうとしても、凜はその人物を思い出す事が出来なかった。

その後衛宮家に帰って来た美遊は、鏡の前で考え込んでいた。

未だに瞳は、涙で潤んでいる。

つい、思っている事が口に出てしまう。

「お兄ちゃん ……イリヤ ……どうして私の大切な人は、皆居なくなっちゃうのかな?」

また美遊の頬に、涙が流れ始める。

「い …… いけない …… 夕食の支度 …… しなくっちゃっ!」

美遊は涙を拭って、ゆっくりと部屋を出て行った。

彼女が部屋を出て行った後、鏡の中に別の人影が現れる。その人物は実際の部屋の中には存在せず、鏡に映った部屋の中にだけ存在した。もちろんそれは、土郎であった。

土郎はミラーワールドの中から、じつと美遊の居なくなつた彼女の部屋を見詰めてい

る。その士郎の背後に、また別な人影が現れる。当然その人影も、鏡の中にしか居ない。黒い鎧に身を包んだ、ブロンドの髪と金色の瞳の女性……セイバー……いや、セイバーオルタである。

「シロウ」

「……何だ？」

呼び掛けるセイバーオルタに、士郎は振り向きもせず答える。

「良いのですか？今夜、貴方が闘う相手は凜だ」

「それが……どうした？」

「貴方に、凜を殺すことが出来るのですか？」

「何を今更……俺は既に、イリヤを見殺しにした。桜もそうしようとしている……もう迷いは、完全に断ち切っている。あとはただ、目的を遂行するだけだ……」

「そうですか……」

「そんな事より、お前はいいのか？」

「何がです？」

「俺が勝ち残っても、この聖杯戦争ではお前が聖杯を手にする事は無い。それでも、俺との契約を続けるのか？」

その士郎の問いに、セイバーオルタは少し間を置いてから答える。

「……私は前回、貴方の望みを叶えられなかった……誓いを果たしきれなかった……だから、今度こそ貴方の望みを叶える。そうしなければ、私は前へ進めない」

「そうか……ならば来い！」

ここで士郎はようやくセイバーオルタに向き直り、何の絵も描かれていないクラスカードを彼女に向けて鬨す。

「はい……」

セイバーオルタが意を決して目を閉じると、その体は次第に光に包まれていく。完全に光と化した後、その光はカードに吸い込まれていきカードが一瞬激しく輝く。その輝きが治まった時、カードは剣士の絵が描かれたセイバーのクラスカードへと変わっていた。

慎二は美遊と別れた後、再び桜の病室を訪れていた。

二十一時になれば、また殺し合いに行かなければならない。相手はいけ好かない神父なので倒す事に罪悪感はないが、それでも出来れば人殺しはしたく無い。

そもそもあのアーチャーは強敵なので、確実に勝てるという保証も無い。桜を助ける為には、絶対に負ける訳にはいかないのではあるが。

「さ……桜……」

色々な感情を頭の中で巡らせながら、慎二は何も言わない桜の顔を唯々見詰めていた。

二十時が過ぎたところで、慎二はようやく重い腰を上げる。

「行つてくるよ……」

桜にそう言い残して、慎二は病院を出て夜の新都を歩き出す。行先は、言峰教会だ。ところがそんな慎二の行く手に、一人の女性が待ち受けていた。

「と……遠坂？」

言峰教会へと向かう坂道の手前に、凜が立っていた。

凜は真剣な眼差しで、慎二に向かって言つて来る。

「慎二……絶対に勝ちなさい！負けたら許さないわよ！」

「お……お前……」

「いい？聖杯戦争の決着は、遠坂と間桐でつけるのよ！」

慎二は少し考えた後、僅かに笑みを浮かべながら答える。

「分かった！……お前こそ、衛宮なんかには負けるなよ！」

〈 仮面ライダーメドウーサ……次回予告 〉

「エクス……カリバアアアアアアアアアアアツ!!」

「あ……あれが……セイバーの聖剣?……な……何て威力なのよ?!」

「馬鹿め! 石化の魔眼など、効かぬと言ったであろう!」

「石化の魔眼なんて使わねえよっ!」

「お前には……妹の命という……背負ったものがある……衛宮士郎にも……同様に重い……背負ったものがある……」

「し……士郎……わ……私は……あなたを……」

「……遠坂……俺は、修羅の道を選んだ……」

『戦わなければ、生き残れない!』

《 第七話 》

二十一時、慎二は言峰教会の扉を開く。

「来たか？」

言峰綺礼は、祭壇の前に立っていた。

慎二は綺礼の前まで歩いて行って、彼に話し掛ける。

「闘いに入ったら、あんたはあの高飛車な王様になっちゃうんだろ？」

「……そうだが？」

「その前に一つ、聞いておきたい事がある」

「ん？……何をだ？」

「あんたはいつたい、聖杯に何を望むんだ？」

「ふっ……そんな事か？」

綺礼は鼻で笑いながら、淡々と慎二に語り始める。

「私には特に望みなど無い……ただ、聖杯には非常に興味があるのでな？その完成を見てみたい。勝ち残らなければ、それを見る事は叶うまい……そう言うお前は、何を望む

「？」

「俺は……妹を助けただけだ！」

「間桐桜か？」

「何故知っている」と言い掛けて、慎二は言葉を飲み込む。昔からの魔術家系の間桐家の家族構成くらい、聖杯戦争の監督役だった綺礼は知っていて当然だろう。

「よし……それじゃ始めようぜ！」

「よからう」

慎二と綺礼は共にカードデッキを取り出し、腹部に当てて装着する。更にクラスカードを取り出し、それをデッキにセットする。

「変身!!」

『Instaall……Rider! Medusa!』

慎二の体に濃い紫のバトルプロテクターが装着され、頭部をコブラの頭を模った仮面が包み込み、巨大なバイザーがその眼部を覆う。

「変身!!」

『Instaall……Archer! Gilgamesh!』

綺礼の体に、眩い輝きを放つ黄金の鎧が装着される。彼の頭部も、同じく黄金に輝く仮面が包み込む。そして主導権が、綺礼からギルガメッシュへと切替わる。

「では遊んでやろう……ついて来るが良い！雑種！」

「な……何を偉そうに！」

アーチャーとライダーは、教会の窓を通してミラーワールドへと移動する。

「まずは、挨拶代わりだ」

アーチャーは、即座にカードをデッキにセットする。

『Attack Vent……Gate of Babylon!』

アーチャーの背後に、無数の時空の歪が発生する。その中から無数の武器が飛び出し、ライダーに向けて放たれる。

「なっ?……何いいいいいいいいっ?」

雨のように降り注ぐ武器群は、教会の扉どころか壁までをも吹き飛ばした。ミラーワールドの中ではあるが、教会の入口側の壁が完全に無くなってしまう。

アーチャーはそこから、ゆっくりと外に歩み出て来る。外に散らばった瓦礫の中には、何とか攻撃を躲し切ったライダーが立っていた。

「い……いきなり何しやがんだ?この野郎っ!」

「安心しろ。まだ全然本気は出してない……一射で終わってしまったのは、面白味が無いからな」

「へっ!俺はお前と違って、闘いを楽しむ気なんて全く無いね!一気に勝負を決めてや

るー！」

ライダーはいきなり、必殺技のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Qubley!』

ライダーのバイザーが開き、石化の魔眼が激しい輝きを放つ。これでアーチャーの動きを封じたものと、ライダーは勝手に判断する。

「ライダーキック!!」

ライダーはアーチャーに向かって駆け出し、大きく跳び上がってキックの体勢を取る。そのまま火の玉となって、アーチャーに向って突撃して行く。

「うおおおおおおおおおっ！」

ところが……

「ふんー！」

アーチャーは、全く動きを封じられてはいなかった。またも背後に無数の時空の歪を発生させ、突撃して来るライダーの火の玉に向けて無数の武器を放った。

「うわああああああああっ！」

ライダーは武器群の攻撃を受けて、炎も消されて敢え無く撃墜されてしまう。

「ぐっ……ううう……」

派手に撃ち落されて結構ダメージを受けてしまったが、何とかライダーは立ち上がっ

て言う。

「て…………てめえ…………な…………何で動けるんだ？」

「愚か者め！私の鎧は耐魔力に優れておるのだ！如何に石化の魔眼と言えど、この私の動きを封じる事など出来ぬわ！」

「な…………何だつて？」

バーサーカー戦に引き続き、ライダーはいきなり必殺技を封じられてしまう。

「そら！次が行くぞ！」

アーチャーは時空の歪から、次々とライダーに向けて武器群を放つて来る。

「くそっ！それなら…………」

『Attack Vent!』

ライダーは両手に鎖のついた鉄杭を出し、飛んで来る武器群を迎撃する。

「ふん！それでいつまで持つかな？」

しかしアーチャーは、徐々に武器のランクを上げて数を増やしていく。

「くっ…………ううっ…………うわっ！」

徐々に往なし切れなくなっていく、ライダーの体を翳める武器が増えていく。

「そら！そら！そらっ！」

「うぐっ…………ぐ…………ぐうわああああああっ！」

とうとうまともに武器の攻撃を受けてしまい、ライダーは派手に弾き飛ばされてしま
う。

「くっ……うっ……」

「どうした？もうお終いか？……これでは遊びにもならぬな？」

まだアーチャーは、実力の半分も出してはいない。それでこのように一方的では、到底ライダーに勝ち目など無い。

「くそっ……このままじゃ、直ぐに殺られちゃう……こうなったら……」

ライダーは、もう一つの必殺のカードをセットする。

『Final Vent!……Bellero phon!』

ライダーの前方にバイクのハンドルが出現し、ライダーは両手でそのハンドルを握る。更に足元からは光のカーテンが立ち昇り、ライダーの全身を包み込んでいく。

『Survive!……Pegasus Cyclone!』

その光のカーテンを突き破り、銀色に輝くバイクに跨ったライダーが飛び出して来た。

「行くぞおおおおおおおっ!」

ライダーはアクセルを激しく吹かし、アーチャーに向かって突撃して行く。

「ふん！小賢しい!」

アーチャーは引き続き無数の武器でペガサスサイクロンを攻撃するが、ペガサスサイクロンはそれらを巧みに躲したり、弾き返したりして突進を続けている。

「何っ?!」

全く勢いの止まらないペガサスサイクロンは、アーチャーの眼前まで迫ってくる。

「ぬううううううっ!」

アーチャーは、咄嗟に横に飛び避けてこの突撃を躲す。

そのままアーチャーの遙か後方まで疾走した後、ペガサスサイクロンは反転して再びアーチャーに向かって来る。ライダーはアクセルを全開にして、ペガサスサイクロンを加速させながら叫ぶ。

「ライダーブレイク!!」

ペガサスサイクロンは一気に急加速して、炎の塊となってアーチャーに突撃して行く。

「ふん!ならば……!」

アーチャーもここで、とっておきのカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Ea!』

アーチャーは時空の歪から最終兵器、"乖離剣エア"を取り出した。

「エヌマ……エリイイイイイイッシュ!!」

アーチャーがエアを一振りすると、そこから激しい光の斬撃が発生する。地面を砕きながら進む凄まじい衝撃波は、一瞬で迫り来る炎の塊を飲み込んだ。

「うわあああああああああああああああつー！」

その場に途轍もなく大きな爆炎が吹き上がり、地面は激しく振動して辺りに爆音が響き渡る。そこから一塊の炎が離脱し、数メートル先の地面に落下した。

「うぐつ……ううつ……」

その炎の塊は、蹲ったライダーへと姿を変える。何とか直撃は避けられたようだが、かなりのダメージを受けている。ペガサスサイクロンに至っては、粉微塵に吹き飛ばされてしまっていた。

「何とか本体は逃げ延びたようだな？……我に、この剣を使わせた事は褒めてやろう。だがこれでもう、その奥の手はこの戦闘では使えまい？」

「くつ……」

アーチャーは、もう使うまでも無いとエアは締まってしまふ。

『Attack Vent!……Gate of Babylon!』

そしてまた、背後に無数の時空の歪を発生させる。

「さて？あとのくらい持ち応えられるかな？」

時空の歪からは、再び無数の武器が顔を覗かせていた。

穂群原学園の弓道場では、遠坂凜と衛宮士郎が対峙していた。

「ようやく、鏡の中から出て来たわね？」

「御託はいい……さつさと始めるぞ」

「相変わらず、愛想が無いのね？」

凜の口撃には、士郎は一切反応して来ない。元々凜がこの場所を選んだのも、少しは士郎を動揺させられるかと思っただからだ。

しかし士郎は全く動揺は見せず、淡々とクラスカードをデッキにセットする。

「変身!!」

『Instaall……Saber!Alter!』

士郎の体は黒い重厚な鎧に包まれ、頭部を騎士の仮面と黒いバイザーが覆う。

「まったく……何があったらここまで冷血人間になれるのよ!」

仕方無く、凜もクラスカードをデッキにセットする。

「変身!!」

『Instaall……Lancer!Cu Chulainn!』

赤いバトルプロテクターが凜の体に装着され、頭部をツインテールの髪が棚引く赤い

仮面が覆い隠す。

変身後に射場にある鏡を通り抜けて、セイバーとランサーはミラーワールド内へと移動する。

移るや否や、まず先にランサーがカードをデッキにセットする。

『Lance Vent!』

赤い槍が出現し、ランサーの両手に握られる。

「はああああああああああああつ！」

ランサーは槍を構えて、セイバーに向かって突進して行く。すかさずセイバーも、カードをデッキにセットする。

『Sword Vent!……Barrier of the Wind King!』

セイバーは見えない剣を出現させ、ランサーの槍の突きを簡単に弾いてしまう。そして更にその剣で、ランサーへと斬り掛かっていく。

「くっ……」

剣が見えないので間合いが掴めず、バランスを崩されながら避けるしか無いランサー。その為迂闊に攻め込めず、どんどん圧されて射場から矢道に追いやられてしまう。

「だ……だめ……これじゃ、圧倒的に不利だわ！……そ……それならっ！」

凜は後方に大きく飛び退いて、セイバーと距離を取る。そこで、大技のカードをデッキにセツトする。

『Final Vent!……Death Flight!』

ランサーの槍が、赤く激しく輝く。ランサーはそれを投槍の如く構え、魔力を高めてセイバーに投げ付けた。赤く燃える炎の槍が、どんどんセイバーへと迫って来る。

だがそれに対してセイバーも、即座に大技のカードをセツトする。

『Final Vent!……Excaltibur!』

突如見えない剣から、凄まじい風が嵐のように放たれた。そしてその嵐の中心から、黒い極光を放つ聖剣が姿を現す。セイバーはその剣を上段に振り上げ、大きく叫んで振り下ろす。

「エクス……カリバアアアアアアアアアアアッ!!」

激しく広がる黒い極光が地面を裂き、そのまま地を抉りながら進んで行く。その極光の帯は瞬く間に炎の槍を飲み込んで、ランサー目掛けて向かって来た。

「きゃああああああああああっ！」

ランサーは、とつさに転げるようして飛び避けた。その極光の帯は凄まじい衝撃を伴い、ランサーの後方にあつた射的の的を背後の壁ごと吹き飛ばした。

その衝撃が去った後、顔を上げて後方を見たランサーは驚く。

「う……………うそ……………」

射的の的があつたと思われる場所は、地面ごと抉れて的も壁も一切跡形も無くなってしまっていた。そんな何も無い抉れた地面が、かなり遠くの先まで伸びていたのだ。た。

「あ……………あれが……………セイバーの聖剣?……………な……………何て威力なのよ!」

ただランサーの槍だけは消滅を免れ、再び彼女の腕に戻って来ていた。

アーチャーは、時空の歪から絶えず武器を放ち続けている。これに対してライダーは何とか直撃だけは避けているが、確実にダメージは蓄積していつていた。

「ふん! 以外にしぶといが、もう時間の問題であろう?」

「くつ……………これじゃ罫り殺しだ……………な……………何より、全然あいつに近付けない……………」

そう言った時、ライダーはある事に気付く。

“……………いや? 待てよ?……………意図的に、近付けさせないようにしているのか?”

バーサーカーを倒した時も、アーチャーは直接武器を扱ってはいない。唯一乖離剣だけは自分で振るっていたが、超強力な斬撃を放つただけで実際に剣を交えてはいない。

“もしかして、あいつは?……な……ならば!”

ライダーはある事を思い付き、アサシンのクラスカードを取り出してデツキにセットする。

『Borrow Vent!……Assassin! Hide!』

突如ライダーは、その姿と気配を消してしまう。

「何っ?……何処にいった?」

アーチャーは精神を集中させるが、ライダーの魔力も気配も感知出来ない。

「小癩な真似を……だが隠れたところで、もはや我を倒せる武器が奴にはあるまい?」

すると突如、アーチャーの目の前にライダーが出現する。

「なっ?!……」

「うおおおおああああおおおとおおっ!」

「ぐうはああああああああああっ!」

ライダーは怒涛の拳を繰り出し、アーチャーの腹部に連打を浴びせる。激しい火花が飛び交って、アーチャーは後方に跳ね飛ばされてしまう。

「(……この下郎がっ!」

アーチャーは倒れた体勢のまま、上方に時空の歪を発生させてライダーに武器を放つ。しかし、ライダーはまた直ぐに姿を消してしまう。

「くっ……」

アーチャーは直ぐに立ち上がるが、ライダーは今度はその背後に出現する。

「何っ？」

「うおおおああああおおおおおっ！」

「うぐううううううううううっ！」

振り向きざまにまた連打を食らって、再び跳ね飛ばされてしまうアーチャー。

「お……おのれっ！」

アーチャーも直ぐに時空の歪から武器を放って反撃するが、ライダーはまた直ぐに姿を消してこれを躲してしまふ。

そのような攻撃を、ライダーは何度も繰り返した。

「へっ………やっぱり、肉弾戦は不得手か？」

「と……当然だ！そのような野蛮な戦い方を、王である我がする筈がない！」

「ふん！それでやられてりやせわねえぜ！」

「誰がやられたか？こんな小技で、この我が倒せるわけが無かろう？」

「じゃあ、大技を喰らわせてやるよ！」

そう叫び、ライダーは再び姿を消す。

「この雑種が………何をするつもりだ？」

今度はライダーは、直ぐには姿を現さなかった。辺りには、しばしの間静寂が流れる。アーチャーは時空の歪を発生させたままで、何時でも武器の雨を降らせられる体勢でライダーの出現を待っている。

「……っ?!」

そこでライダーは、何とアーチャーの目の前に出現する。そのライダーの手には必殺技のカードが握られていて、出現と同時に彼はカードをデッキにセットする。

『Final Vent!』

「馬鹿め! 石化の魔眼など、効かぬと言ったであらう!」

「石化の魔眼なんて使わねえよっ!」

ライダーは素早い動作で腰を落として、右手に魔力を集中する。それによって炎に包まれた右の拳で、反動を付けて思い切りアーチャーに殴り掛かった。

「なっ?!」

「ライダー! パアアアアアアアアンチッ!!」

炎の拳がアーチャーの胸に炸裂し、今迄に無い程の凄まじい火花を噴き上げる。

「ぐうふうううううううううううっ!」

アーチャーは大きく跳ね飛ばされて、そのまま地面に叩き付けられてしまう。

「とおおとおおとおおとおおとおおっ!」

直後にライダーは、大きく上空に跳び上がった。

「お…………おの…………れ…………」

アーチャーは首を起こして立ち上がるようにするが、結構なダメージを受けてしまった為に思うように立ち上がれなかった。周囲に発生させていた時空の歪も、今のダメージを受け消えてしまっていた。そんな満足に動けないアーチャーに向けて、ライダーは必殺のキックを放つ。

「ライダーアアアアアツッ！キイイイイイイイック!!」

炎の塊となったライダーが、急降下でアーチャーを直撃する。

「があはあああああああああああつっ！」

アーチャーの断末魔の叫びと共に、ひととき大きな爆炎が吹き上がる。

その爆炎の中から、ライダーはゆっくりと歩み出て来る。少し歩いて足を止めて振り返るライダーの手には、アーチャーとバーサーカーの二枚のクラスカードが握られていた。

爆炎が治まったその場には、傷付いて跪く綺礼の姿が残っていた。その綺礼の腹部で、カードデッキが小さく爆ぜて消滅する。

「…………み…………見事…………だ…………」

綺礼が、ライダーに言う。

ライダーは相手がいけない神父と言えども、やはり人を殺める事には大きな抵抗があった。そんな葛藤に苛まれながら、彼は綺札に言葉を掛ける。

「……何か、言い残す事はあるか？」

「ふっ……この聖杯戦争に参加した時から、死ぬ覚悟は出来ている……命は惜しく無いが……その結末を、この目で見れぬのが心残りだ……最後に残るのが……お前か？……衛宮士郎か？……」

「な……何を言っている？遠坂かもしれないじゃないか？」

「ふっ……それは有り得ん……凛では……衛宮士郎には……勝てん……」

「ど……どうして？そう言い切れる？」

「凛には……叶えたい望みが無い……背負ったものが無い……」

「背負ったもの？」

「お前には……妹の命という……背負ったものがある……衛宮士郎にも……同様に重い……背負ったものがある……」

「な……何で？そんな事が判る？衛宮は、何も言わないだろう？」

「そ……そうでなければ……聖杯戦争を……復活させようなどは……考えん……十六年前……自ら地獄を……味わった男が……再び……あの地獄を……再現……しよう……なご……と……は……」

そう言いながら、綺礼は消滅していった。

「地獄?……十六年前?……何を言っていたんだ?」

まだ士郎が幼かった頃、第四次聖杯戦争で受けた爪跡の事等、ライダーには知る由も無かった。

ランサーは、どんどん追い詰められていっていた。

遠距離からの攻防は、完全に分が悪い。かと言って近接戦闘でも、主導権は全く握れなかった。

槍の方が剣に対して間合いが長いものの、セイバーの剣撃は速くて異常に重い為ランサーの突きは悉く弾かれてしまう。それでフランスを崩され、その後の連撃を必死に逃げ回る羽目になる。既にセイバーの剣はカモフラージュが解かれているが、それでも状況は何一つ好転しなかった。そんな感じで迂闊に攻め込めずにいると、逆にセイバーに攻め込まれて来てしまう。とにかくセイバーは一撃一撃の威力が半端では無いので、下手に剣撃を受けてしまえば、直ぐに戦闘不能に陥るのは明白だった。

「こ……ここまで、圧倒的に力の差があるなんて……」

それでも必死に猛攻に耐えて、ランサーは僅かなチャンスを狙っていた。一対一の闘

いであるのならば、彼女には発動さえすれば必殺の決まり手があるからだ。

そしてようやく、その為の絶妙な間合いを手に入れる。

「ふう……確かにまともによつたら全然適わないみたいだけど、貴方でも絶対に防げない必殺技が私にはあるのよ！」

ランサーはそう言つて、素早く必殺技のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Gei Boruku!』

ランサーの槍が、赤く激しく輝き出す。その槍をランサーは両手で構えて、体勢を低く落として技を発動する。

「その心臓、既に貫つたわっ！」

そう叫んでランサーは、セイバーに向かって突進する。その速度はどんどん加速され、光の矢となつてセイバー目掛けて飛んで行く。

“心臓に槍が命中した”という結果を作つてから放たれる槍は、如何にセイバーと言えども回避する術は無い。バーサーカーのように複数の命を持たない限り、この攻撃は間違い無く必殺なのであった。

だが……

これを見たセイバーは、一枚のカードをデッキにセットした。

『Time Vent!』

その瞬間、時間は巻き戻る。

セイバーに当たると寸前であった光の矢は後退し、元居た位置まで来てランサーの姿に戻る。槍の輝きも消えてしまい、必殺のカードをセットする前の状態にされてしまった。

「えっ?」

ランサーには、何が起こったのか判らなかつた。

『Final Vent!……Excaltibur!』

その間に既にセイバーは、自身の必殺のカードをデッキにセットしていた。

「エクス……カリバアアアアアアアアアアアッ!!」

セイバーが起こした極光の帯が、瞬時にランサーを包み込んでいく。

「きゃああああああああああああああっ!」

その極光の帯は数十メートル先まで到達し、周囲の地面までも大きく抉ってしまう。

極光が去った後には、傷付いた凜が横座りしていた。赤いバトルプロテクターも消え去っており、彼女の腹部でカードデッキが小さく爆ぜて消滅する。セイバーの手には既に、ランサーのクラスカードが握られている。

虚ろな目でセイバーを見詰めながら、消滅し始めている凜が呟いた。

「ふ……ふふふ……死に際になって、やっと思い出した……わ……私達……違う……記

憶を……」

「……」

ミラーワールド内にも関わらず、セイバーはここで変身を解いて士郎の姿に戻る。

「し……士郎……わ……私は……あなたを……」

「……遠坂……俺は、修羅の道を選んだ……」

相変わらず表情一つ変えずに、士郎は淡々と答える。

「そ……そうよね……だ……だって……あなた……は……」

最後には涙を流しながら、凜の体は塵のように消滅していった。

「遠坂……」

ここで初めて士郎は、少しでも顔を曇らせるのだった。

〈 仮面ライダーメドゥーサ……最終回予告 〉

「お前と、美遊ちゃんは悲しむ……いや、僕を恨むかもしれないが……僕は、衛宮を倒す

……」

「強がりはやせ……立ち上がったところで、もうお前に俺を倒す手段は存在しない」

「だけど、お前は一つ大事な事を忘れてるぜ。自分で作ったシステムの、最大の利点を……」

「……六年前、この冬木で第五次聖杯戦争が行われなかったというのは、偽りの記憶だ」「何っ?！」

「美遊はその命を犠牲にして、世界を救ったんだ！そのくらいの権利はあるだろう?」「それはお前のエゴだ！美遊ちゃんが望んだ事じゃ無い！それに、お前は一番大切なものを彼女から奪うんだ！それが分かっているのか?」

『戦わなければ、生き残れない!』

《 最終話 》

アーチャーを倒したライダーは、現実空間の教会の礼拝堂へと戻つて来る。

変身を解いて慎二の姿に戻った時、今出て来たガラス窓に士郎の姿が映った。

「……………?!……………衛宮?」

そこに、士郎が現れたという事は……………慎二は即座に、その事実が語る結果を認識する。

「勝ち残つたようだな? 慎二?」

士郎は、淡々と語る。

「と……………遠坂を……………遠坂を殺したのか? 衛宮?」

慎二は、拳を握り締めて叫んだ。

「……………だからここに居る」

何を判り切つた事を聞くのか? そのような口調で話す士郎に、慎二の怒りは頂点に達してしまふ。

「え……………衛宮ああああああああああつ!」

慎二は思わず、デッキにライダーのクラスカードをセットしていた。

『Insta11……Rider! Medusa!』

仮面ライダーに変身した慎二は、士郎が立つ窓ガラスの中に飛び込んで行く。

しかしライダーが飛び込むと同時に、士郎は何処かへと姿を消してしまう。

「ど……何処に行った？ 出て来い！ 衛宮っ！」

『熱くなるな……決勝戦は、明日の二十一時だ』

何処からとも無く、声だけが響いて来る。

「ふざけるな！ 今直ぐ決着をつけてやる！ 僕と戦え！ 衛宮あああああっ！」

『お前は、アーチャーとの戦いで消耗し切っている。戦いにはならない……少し頭を冷やせ』

「舐めるな！ こんなのお前には丁度いいハンデだ！ さっさと出て来て戦えっ！」

『明日、また連絡する……』

その言葉を最後に、士郎は完全に消えてしまった。

「逃げるな！ 出て来い！ 衛宮ああああああああああああっ！」

慎二はしばらくの間、半狂乱になって叫び続けていた。

その後言峰教会からようやく深山町に戻って来た慎二は、遠坂邸の前に来ていた。

慎二は玄関まで歩いて行き、呼び鈴を鳴らす。家主である凜が居なくなつた為、いくら待つても当然誰も出て来ない。それでも慎二は、ひたすら呼び鈴を鳴らし続けた。

そんな慎二の脳裏に、不意に凜の言葉が蘇つて来る。

“あらく？もしかして、間桐くん？”

“覚悟を決めなさい！慎二！”

“貴方が気に病む事じゃ無いわ……どちらにしても、あんなつた彼女を救う術は無かつた……”

“慎二、絶対に勝ちなさい！負けたら許さないわよ！”

「と……とお……さか……」

膝を落として屈み込み、慎二はその場に泣き崩れてしまうのだった。

ミラーワールドの中の、衛宮家の士郎の部屋。

士郎は、セイバーのクラスカードの契約を解除する。それにより士郎の前に、黒い鎧を着たブロンドの髪の毛の金色の瞳の女性が姿を現す。

セイバーオルタは、少しきつい眼差しで士郎を見詰めながら問い掛けて来る。

「……シロウ、貴方は何故？闘いが終わる度に契約を解除するのです？」

それに対して士郎は、相変わらず不愛想に顔を合わせようともしないで答える。

「特に意味は無い……ただの気紛れだ、気にするな」

「私を試しているのか？……しかし、何度聞かれても私の決意は変わらない」

「だから、意味は無いと言っている……」

そう言つて、士郎は姿を消してしまふ。

一人残されたセイバーオルタが、何かを思い立つて呟く。

「シロウ……貴方はもしかして？……」

一夜明けた決戦の日の朝、慎二は穂群原学園の前まで来ていた。

正門の近くの物陰に隠れて、登校して来る生徒達を眺めている。

しばらくして、美遊が登校して来る。彼女は慎二には気付かず、門を通つて校内に入つて行く。慎二は声も掛ける事はせず、じつと美遊を見詰めていた。美遊の姿が完全に見えなくなつたところで、慎二はその場を後にする。

続いて慎二は、桜の居る病室に行く。

桜の眠るベッドの横に座り、いつものように決して目覚める事の無い彼女を見詰めていた。

「……桜……」

しばらくして、慎二の口が開かれた。

「お前と、美遊ちゃんは悲しむ……いや、僕を恨むかもしれないが……僕は、衛宮を倒す……」

そこで慎二は、背後に自分を見詰める視線を感じる。後ろを振り向くと、病室の窓の中に士郎の姿が映っていた。

「……衛宮か？」

慎二はもういきり立つ事はせず、静かにそう言った。

「気持ちは落ち着いたか？」

「ああ……」

「では、戦う場所を決めよう……今夜二十一時、最初の夜に会ったヴェルデの前でいいか？」

「ああ……構わない」

「そうか……では、今夜また会おう……」

「待て」

慎二は、士郎を呼び止める。

「一言だけ言っておく……衛宮、僕はお前を絶対に許さない。必ず倒す!」

「……判った……だが、俺も負けるつもりは無い……」

そう言い残して、士郎は窓の奥に消えていった。

その日の夕方、商店街で買い物を済ませ、美遊は衛宮家に帰って来た。

食材を片付けた後、自分の部屋に戻って制服から私服へと着替える。その自分の姿をチエツクしようと、鏡を覗き込んで思わず美遊は驚いてしまう。

「えっ?!」

自分の後ろに、黒い鎧を着たブロンドの髪の女性が立っているのだ。美遊は慌てて後ろを振り向くが、自分の後ろには誰も居なかった。

だが再び前を向くと、やっぱり背後にはその女性が居て、じつと美遊を見詰めている。

「だ……誰っ?!」

「……ミユ」

その女性は、美遊に話し掛けて来た。

「あ……あなたは……だ……誰?」

「私はセイ……いえ、アルトリア……アルトリア・ペンドラゴン」

「あ……アルトリア……さん？」

「ミュ、シロウに逢いたいですか？」

「えっ？……あ……あなた……お……お兄ちゃんを……お兄ちゃんが、何処に居るか知っているの？」

「知っている……シロウに逢いたいですか？ミュ？」

「逢いたい……あ……逢わせて！お願い！お兄ちゃんに逢わせてっ！」

「ならば……来なさい！」

「……っ?!」

すると鏡の中から美遊の前に、アルトリアの右手が飛び出して来た。

「……」

一瞬怯えてしまっていた美遊だが、意を決してその手を掴む。

「あっ?!」

すると思いい切り手を引かれて、美遊の体は鏡の中に入って行ってしまった。

同じ屋敷内のミラーワールド内の士郎の部屋。

士郎は部屋の中央に立ち、何者かを待っている。そこに背後の襖を開けて、セイバー

オルタが入って来る。士郎は振り向きもせず、セイバーオルタに問い掛ける。

「これが最後だ……いいか？セイバー？」

「はい……問題ありません」

セイバーオルタは即答する。

そこで士郎は振り向き、何も描かれていないクラスカードを彼女に向けて翳す。セイバーオルタは目を閉じて光の塊となり、クラスカードの中へと吸い込まれるように入って行った。

その日の二十一時。新都駅前のヴァルデの前に、二つの人影が現れる。もちろん、城戸慎二と衛宮士郎だ。

お互いに反対方向から現れて対峙した二人は、もう何も話す事は無いかのように無言でしばし睨み合う。先に口を開いたのは、士郎の方であった。

「では……始めるぞ」

「……ああ」

二人は同時にカードデッキを腹部に装着し、お互いのクラスカードをセットする。

『変身！』

『Install!...Rider! Medusa!』

『Install!...Saber! Alter!』

変身したライダーとセイバーは、向き合ったまま横に移動してヴァルデのショーウィンドーからミラーワールド内に飛び込んだ。

ミラーワールドに入るや否や、ライダーは戦闘用のカードをデッキにセットする。

『Attack Vent!』

両手に鎖付の鉄杭を出し、ライダーはセイバーに先制攻撃を仕掛ける。

「うおおおおおおおっ!」

セイバーも、即座に戦闘用のカードをデッキにセットして対応する。

『Sword Vent!...Barrier of the Wind King
!』

セイバーは風王結界を纏った見えない剣を抜き、ライダーの放つ鎖付き鉄杭を難無く弾き返す。

その間隙を縫って、ライダーは間合いを詰めようとするが……

「むんっ!」

「のおわあああああっ!」

見えない剣の為間合いがうまく掴めず、迂闊に近寄る事が出来なかった。

「くそっ！それならば……」

ライダー一旦後退して距離を取り、必殺のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Qubley!』

ライダーのバイザーが開き、石化の魔眼が輝きを放つ。

「ライダーキック!!」

そしてライダーはセイバーに向かって駆け出し、大きく跳び上がってキックを放つ。足元から炎の玉と化して、セイバーに向かって突撃して行く。

「うおおおおおおおおおっ!」

しかしセイバーは、動きを封じられてはいなかった。

「はああああああああっ!」

セイバーは一旦剣を引つ込め両手を前に翳して、そこに魔力を集中させる。そうして何と、炎の玉と化したライダーを受け止める。

「なっ?……なにいいいいいいっ?」

「ぐうおおおおおっ!」

「うわああああああっ!」

セイバーはそのまま、ライダーを弾き返してしまう。

「ぐうはああああああっ!」

派手に飛ばされたライダーは、後方の壁に手酷く叩きつけられてしまった。

「くっ……な……何で？……動けるんだよ？……お……お前？」

起き上がりながら、ライダーはセイバーに問い掛ける。

「セイバーの耐魔力を甘く見るな……石化の魔眼で、俺の動きを完全に止める事は出来ない」

「ちっ！……ま……またこのパターンかよ？」

「今度はこっちから行くぞ！」

セイバーは再び見えない剣を抜き、ライダーに向かって斬り掛かって来る。

「はああああああああああっ！」

「くうううううううううっ！」

ライダーは何とかそれを躲しているが、未だに間合いが見切れないのでどんどん追いつめられていく。

「（……このままじゃジリ貧だ……それならっ！）」

ライダーはアサシンのクラスカードを取り出し、それをデッキにセットする。

『Borrow Vent!……Assassin! Hide!』

突如セイバーの前から、ライダーの姿と気配が消えてしまう。

「ぬっ?!」

だがセイバーは慌てる事無く、静かに精神を集中させて周囲に気を配る。
するとライダーは、必殺技のカードを構えてセイバーの目の前に出現した。

『Final Vent!』

ライダーは素早く腰を低して構え、右手に魔力を込めて渾身の拳をセイバーに向けて突き出す。アーチャーを倒した時の戦法である。

「ライダーアアアアアッ! パアアアアアアアンチ!!」

だがしかし……

「ふんっ!」

「何っ?!」

セイバーも左手に魔力を溜めて、ライダーの放つ右拳を受け止めてしまう。

「馬鹿め! さっきキックを弾き返されたのを忘れたか?」

動きが止まったライダーに、セイバーの右手の剣が襲い掛かる。

「ぐうわああああああああああああっ!」

胸部に激しい火花が飛び散って、ライダーは大きく弾き飛ばされてしまった。

「うっ……うううう……」

かなりのダメージを受けてしまったが、ライダーはよろけながらも何とか立ち上がる。

「ち……ちくしょう！……こいつ、接近戦も隙がねえ……」

「騎士王に、不得手な戦闘など無い！」

再びセイバーは、見えない剣での攻撃を再開する。ライダーは防戦一方になってしまい、どんどん追い詰められていってしまう。

「……このままじゃやられる……こ……こうなったら……とおおおおおおっ
！」

ライダーは大きく後方にジャンプして、セイバーとの距離を取った。

「これならどうだ？」

ライダーはもう一枚の必殺のカードを、デッキにセットする。

『Final Vent!……Bellero phon!』

ライダーの手前にバイクのハンドルが現れ、ライダーは両手でそれを握りしめる。足元からは眩い光のカーテンが立ち昇り、ライダーの体を完全に包み込んだ。

『Survive!……Pegasus Cyclone!』

その光のカーテンを突き破って、ペガサスサイクロンに跨ったライダーが飛び出して来る。

「行くぞおおおおおっ！」

ライダーはアクセルを吹かし、ペガサスサイクロンでセイバーに突進して行く。

「ふん……ならばこちらも……」

対するセイバーも、必殺のカードをデッキにセットする。

『Final Vent!……Excaltibur!』

突如見えない剣の周りに、激しい旋風が巻き起こった。

「はあああああああああああつ!」

それをセイバーは、突進して来るライダーに向けて振う。それは猛烈な突風となつて、ライダーに向かって来る。

「な……何だどつ!」

凄まじい強風に、マシンのスピードが減速される。

「ま……負けるかあああああああつ!」

ライダーは更にアクセルを吹かし、この突風を打ち負かす。風を切ったペガサスサイクロンは、セイバーの眼前まで迫って来る。

「はあつ!」

ところがセイバーは大きくジャンプして、ペガサスサイクロンの体当たりを躲してしまふ。

「ちいさいい小さいい小さいい!」

だがライダーも、これで諦めたりはしない。直ぐさま反転して、アクセルを全開にし

でもう一度セイバーに突撃する。

「ライダアアアアアアッ！ブレイクウウウウウウツッ!!」

炎の塊となったペガサスサイクロンが、砲弾の如くセイバーに襲い掛かる。

しかしセイバーの一手も、避けてお終いでは無かった。ライダーが反転して迫って来る間に、セイバーはカモフラージュが取れてその姿を露わにした黒い聖剣を上段に構えていた。

「はあああああああああああああつっ！」

聖剣は凄まじい極光を放ち、黒いオーラの柱を天に向かって伸ばしている。

「エクス……カリバアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

セイバーは、聖剣を一気に振り降ろす。それにより天高く伸びた黒い極光の柱が、倒れるように迫り来る炎の塊を押し潰した。

「がああああああああああああああああああつっ！」

地面が抉れ、轟音と共に左右に激しい爆炎が立ち昇った。それは凄まじい粉塵も巻き起こし、しばしの間周囲の視界が利かなくなる。

粉塵が晴れて視界が戻った時には、抉れて何も無くなった地面の上に傷付いたライダーが突つ伏していた。

「うつ……うつうつ……」

相当のダメージを受けてはいたが、何とか消滅は免れたようだった。

「く……………くそつ……………」

必死に立ち上がろうとするライダーだが、思うように体が動かない。セイバーはそんなライダーに向かって、ゆっくりと歩み寄って来る。

「んっ……………くうっ……………はあっ！」

ようやく体を起こしたものの、直ぐにまた尻餅をついてしまうライダー。

「うっ……………」

そのライダーの眼前に、セイバーの聖剣の切っ先が突き付けられた。

「勝負あつたな……………」

相変わらず不愛想に、そうライダーに告げるセイバー。それに対してライダーは、精一杯の強がりと言う。

「へん……………ぼ……………僕は……………まだくたばっちゃ……………いないぜ……………」

「強がりはやせ……………立ち上がったところで、もうお前に俺を倒す手段は存在しない」

ここまでの戦闘は、完全にライダーの負けであった。全てにおいて、セイバーの能力はライダーのそれを上回っている。だがライダーにはまだ、隠された奥の手が残っていた。

「ふん……………それは……………どうかな？」

「何だと?」

「確かにライダーの能力じゃ、どうやってもセイバーには敵わない……だけど、お前は一つ大事な事を忘れてるぜ。自分で作ったシステムの、最大の利点を……」

「最大の利点……だと?」

「俺には今迄倒した、他のマスターのクラスカードがあるんだぜ!」

そこでライダーは転がるように後退りして、一気に立ち上がる。そしてアーチャーのクラスカードを取り出し、それをカードデッキにセットした。

『Borrow Vent!……Archer!Ea!』

ライダーの右手に、乖離剣エアが出現する。

「何っ?!……ま……まさか?」

慌ててセイバーは、聖剣を上段に構える。ライダーも、エアを上段に構えた。

「エヌマ……」

「エクス……」

「エリイイイイイイイイイッシュ!!」

「カリバアアアアアアアアアアッ!!」

二人は同時に、剣撃を放った。

その威力はほぼ互角で、二人の間でぶつかり合っただけは燻っていた。だが遂に

は、周囲を巻き込む大爆発を引き起こした。

「ぐうわあああああああああああつっ！」

「うわあああああああああああつっ！」

セイバーもライダーも、完全にその爆発に呑み込まれてしまうのだった。

凄まじい爆煙が晴れた後、周辺一帯は何も無い荒地と化してしまっていた。

そんな荒地地の中央に、二つの人影だけが残されていた。共に鎧が消滅してしまつた、慎二と士郎である。

慎二の方は尻餅をついて坐っていて、士郎の方は立つてお互いに睨み合っている。二人の腹部では、カードデツキが激しい火花を飛ばしている。やがてそれは、小さく爆ぜて消滅してしまふ。

「こ………こういう場合はどうなるんだ？カードデツキが破壊されたから、もう僕達はここから出られないし、助からない……勝者が居ないじゃないか？」

そう問い掛ける慎二に、士郎は淡々と答える。

「いや……勝者は……俺だ」

「何っ？」

「俺は……もう人間じゃ無い……この体は、サーヴァントも同然だ。だからこの中でも、

消滅する事は無い……」

「ど……どういう事だ？」

「俺の肉体は、一年前に死んでいるんだ」

「な……何だつて？」

そこで慎二は、今迄も土郎の行動を思い起こす。

確かに土郎が現れる時、彼は常にミラーワールドの中に居た。慎二達は少しでも長くミラーワールドにいれば、直ぐに体の消滅が始まってしまう。だが土郎だけは、あれだけ長く中に居ても全く消滅する様子が無かった。

「な……何だよそれ？ 最初から、そんなアドバンテージを持ってやがったのか？」

呆れたように、慎二は言う。

「お前から見れば、そうなるだろうな？ このシステムを構築する代償に、俺は自分の肉体を失った……」

「そうか……じゃあお前の望みは、自分が蘇る事……の訳は無いよな？ こんなシステムを作らなければ、命を落とす事は無かったんだから……」

「美遊だ……」

「え？」

「俺が蘇らせたいたいの、美遊だ！」

「な……何を言ってるんだ！美遊ちゃんは、ぴんぴんしていたじゃないか？あれで、どこが悪いって言うんだ？」

「美遊も、俺と同じだ……」

「なっ……」

「美遊は既に、六年前に死んでいる……今のあいつは、聖杯の力を借りて一時的に肉体を得ている……サーヴァントも同然の存在に過ぎない」

その言葉に慎二は、愕然としてしまう。

だが良く考えてみれば、衰弱して寝たきりだった彼女が突然何事も無かったかのように、健康体に戻る筈などは無かった。

「そうか……じゃあ、美遊ちゃんと一緒にお前も……」

「いや……蘇れるのは、美遊だけだ」

「はあ？何だよそれ？……二人一緒に蘇ればいいだろう？何で、美遊ちゃんだけなんだよっ。」

「美遊は……特別なんだ……」

「特別？」

「あいつを助けるといふ事は、世界全体を救うのと同格なんだ……だから……」

「何を言っているんだ？訳が分かんないよ！」

「……」

士郎は、言葉に詰まってしまふ。

「おい！最後くらい、ちゃんと説明しろよ！」

「……美遊は、聖杯と同じだ……」

「はあ？」

「あいつ自身が、どんな願いでも可能にする願望機なんだ！」

「何……だつて？」

「お前達は、記憶も変えられているから知らないだろうが……六年前、この冬木で第五次聖杯戦争が行われなかったというのは、偽りの記憶だ」

「何っ?!」

「第五次聖杯戦争は、本当は行われていた……そしてそれは、最悪の結果をもたらしていた」

「最悪の……結果？」

「冬木の聖杯は過去の愚かな参加者のルールを破った召喚の為、〃人を殺す〃という呪いに犯されていた。その聖杯が完成してしまった事で、大いなる悪〃アンリマユ〃が世に放たれた。それにより、世界は滅亡の危機に瀕してしまった……」

「ば……馬鹿な……」

「その滅亡から世界を救う手段は、唯一つしか無かった。どんな願いでも可能にする願望機である、美遊の力を解放するしか……だがそれは、美遊の命と引き換えにしなければならぬものだった」

「そ……そんな……」

「俺の親父……衛宮切嗣は、迷わず美遊の力を解放させた」

「な……じ……自分の娘を？」

「本当の娘じゃ無い……元から美遊は、この世界の人間じゃ無かった。第四次聖杯戦争から数年後に突如発生した時空の歪から、この世界に迷い込んだ異世界の人間なんだ！」

「な……」

「切嗣は美遊のその力に気付き、もしもの時のために養女にして俺と共に衛宮家で匿っていたんだ。家から外に出さずに、外界と完全に遮断してな。『病弱』というのは、それを貫き通す為の口実に過ぎない……」

慎二には、とても信じられないような話であった。

しかしこの期に及んで、士郎が慎二に嘘言う理由は無い。何よりそれ程の事でも無ければ、常に他人の幸せを優先する士郎がこんな戦争を自分から引き起こす筈が無かった。

「切嗣は世界を救うのと同時に、呪われた聖杯を二度とこの世に出さないように完全に封印した。聖杯戦争自体を無かった事にして、死んだ者も全て蘇らせた。そして聖杯戦争に関わった者、全ての記憶を書き換ええたんだ」

そこで慎二は、ある疑問に気付く。

「ま……待てよ。なら、お前の記憶も書き換えられたんだろう？何でお前は、その事を覚えてるんだよ？」

「切嗣が死んだ後、隠されていた日記を見つけた。それに、全てが書かれていた。それを見た時に、俺の記憶は戻った……」

しばらくは衝撃を受けて呆然としていた慎二だが、ふと自分の体が消滅し始めている事に気付く。もう自分の命もあと僅かと悟ったところで、ようやく慎二は士郎の気持ちの本心に理解する。それと同時に、士郎の大きな間違いにも気付いてしまう。

「ふっ……全ては美遊ちゃんの為か……変わってしまったと思っていたが、本当は何も変わっていないかったんだな？お前は？」

「ん？……何を言っている？」

「他人の幸せばかり考えて、自分の事はいつも勘定に入っていない……だから、相手の本当の気持ちに分からないんだ！」

「相手の……本当の気持ちだと？」

「お前は、美遊ちゃんの気持ちを全然分かっていない……」

「そんな事は無い！俺は、美遊の幸せだけを考えて……」

「こんな事で、美遊ちゃんが幸せになると本気で考えているのか？」

「何?!」

「人の命を犠牲にして蘇って、美遊ちゃんが喜ぶと思っているのか？」

「美遊はその命を犠牲にして、世界を救ったんだ！そのくらいの権利はあるだろう？」

「それはお前のエゴだ！美遊ちゃんが望んだ事じゃ無い！それに、お前は一番大切なものを彼女から奪うんだ！それが分かっているのか？」

「一番大切なもの？……何だ？それは？」

「お前だよ！美遊ちゃんにとって一番大切なものは、この世でたった一人の兄であるお前なんだ！お前が居ない世界に一人で蘇って、どうして美遊ちゃんが幸せになれる？そんな事も分からないのか?!」

「なっ……」

終始冷静を貫いていた土郎が、この慎二の言葉に大きく衝撃を受け狼狽えてしまう。

ただ慎二の方も、偉そうに説教をしながらも自責の念に苛まれていた。

「ふん……僕も、お前の事を言える立場じゃ無いけどな……あいつの、桜の本当の苦しみを、全然分かっていなかったんだから……」

「し……慎二……」

「あばよ衛宮……あの世で、目いっぱい後悔するがいいぜ……」

最後にそう言つて、慎二は消滅していった。

慎二が消滅すると同時に、士郎の手に七枚のクラスカード全てが出現する。これで聖杯の召喚が可能となるが、士郎は硬直してしばらく動けなかった。唯々クラスカードを見詰めながら、慎二に言われた事を考え込んでいた。

「……お兄ちゃん……」

その時、士郎は後ろから声を掛けられる。

驚いて振り向いたそこには、美遊が立っていた。

「み……美遊?!ど……どうしてここに?」

「アルトリアさんが……連れて来てくれたの!」

「あ……アルトリア?……セイバーか?あいつが何故?……」

「お兄ちゃん、もう止めて!」

「何?」

「慎二さんの言つた通りだよ……私、他の人を犠牲にして生き返りたくなんか無い!」

「な……何を言うんだ……今の世界は、元々お前の犠牲で成り立っているんだぞ!」

「だからって、同じ事をしていいの?」

「え？」

「やられたらやり返すって事と同じでしょ？そんなの、ただ哀しみが増すだけじゃない？」

「だ……だけど……」

「お兄ちゃん、自分の立場だったらどうなの？そうまでして、生き返らせて貰って嬉しいの？」

「そ……それは……」

「それに私……お兄ちゃんの居ない世界で、一人で生きていくなんで嫌！そんな風に生き返ったって幸せになんか絶対になれない！」

美遊の目からは、大粒の涙が流れ出している。

「み……美遊……」

美遊は、士郎に抱き付いていく。

「こ……ここのなら、ずっとお兄ちゃんと一緒に居られるんですよ？……私、それで幸せだよー！」

「みゆ……美遊っ！」

士郎はクラスカードを手放して、その両手でしっかりと美遊を抱きしめる。

「ねっ……お兄ちゃん……だから……」

顔を上げて士郎を見上げながら、美遊は彼に何かを語る。

「……………ああ……………分かったよ……………美遊」

士郎はようやく笑顔を見せ、地に落ちた七枚のクラスカードに左手を翳す。

カードは激しく輝き出し、宙に浮かんでいつて抱き合っている士郎と美遊を囲んでいく。その輝きはどんどん強くなって広がり、士郎と美遊をも呑み込んでいった……

「いつまで寝てるのよ？ 慎二！」

僕は、その声で目を覚ました。

「えっ？……………」

そこは、桜の病室だった。

更に、僕を起こした人物が目の前に居る。それは……

「とお……………さか？」

「何保けてんのよ？」

え？ 何で？ 遠坂が？……………そもそも僕は、消滅したんじゃないのか？

「姉さん、兄さんは疲れているんですから……………もう少し寝かせてあげて下さい」

「何言ってるのよ！ 人をロンドンから呼び付けといて、呑気に寝てるなんて失礼じゃな

いの?。」

「えっ?。」

桜が?普通に目を開けて喋っている……それに今、遠坂を“姉さん”って呼んでたよな?」

今迄ずっと、“遠坂先輩”じゃなかったか?

ここは……ひよつとして天国?

すると、遠坂が僕に目配せをして来る。“一緒に来い”と言っているようだ。

僕は、それに軽く頷いて立ち上がる。

「桜、ちよつと慎二借りるわよ」

「姉さん……あ……あんまり酷くしないで下さいね」

桜は、遠坂が僕に説教でもするのかと思つて心配しているようだ。

僕達は病院の屋上に場所を移し、二人だけで状況を整理していた。

「私も、さつき目覚めたばかりよ……気が付いたら、この病院に居たの」

「じゃあ、ここは現実で……僕達は、生き返つたつて事なのか?」

「そうなるわね……でもいきなり桜が意識を回復していて、話したら“姉さん”って言つて来るからびっくりしたわ。おまけに、私は貴方に呼ばれてロンドンから飛んで来

た事になつていた……」

「他の皆も、生き返っているのかな？」

「さあ？……ただ、衛宮くんは居ないわ！」

「えっ？」

「存在ごと消えているわ！美遊ちゃんもよ！」

「ど……どういふ事だよ？それ？」

「私にも分からないわ……桜に話したら、全く彼の事を知らないのよ。そして自分のアドレス帳を調べたら、彼の名前だけ完全に無くなつていたわ」

「何だつて？」

その後僕達は、聖杯戦争に参加したマスター達の事を調べて回つた。

僕達同様に生きている者が殆どだったが、二人だけ居なくなつている者がいた。一人は当然衛宮だが、もう一人は僕の祖父……間桐臓硯だった。

ただ生き残っている者達も僕達とは違い、聖杯戦争の事は全く覚えていなかった。元々戦いはミラーワールドの中で行われていたから、現実世界に実被害は殆ど出ていない。六年前の時と同様に、聖杯戦争自体が無かつた事になつていた。

おそらく衛宮が、最後に望みを変えたのだ。僕達を蘇らせ、皆から余分な記憶を消したのだ。間桐臓硯だけを排除したのは、桜の為を思ってくれたのだろう。

冬木大橋の近くの公園で、ベンチに腰掛けて僕と遠坂は話していた。

「何で衛宮は、僕達の記憶だけは消さなかったんだろう？」

「桜との事を考えてくれたんじゃない？この事件が無ければ、私達と桜の距離は離れたままだった……」

「そうか……そうだよな？」

「それとも……私達だけには、覚えておいて欲しかったのかもね？」

遠坂のその言葉は、素直に納得出来た。

衛宮士郎、衛宮美遊、この二人についての記憶は、その存在と共にこの世界から完全に消えてしまっていたのだから。

へ 完 へ

《 番外編 : 失われた聖杯戦争 》

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた……」

「何だよそれ？憧れてたって、諦めたのかよ？」

「うん、残念ながらね……ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんな事、もつと早くに気が付けば良かった」

「そっか……それじゃ、しようがないな」

「そうだね、本当にしようがない」

「うん……しようがないから、俺が代わりになってやるよ！」

「ん？」

「爺さんは大人だからもう無理だけど、俺なら大丈夫だろ？任せろって！爺さんの夢は……」

「……そうか、ああ……安心した……」

ふと、五年程前に親父と交わした会話を思い出した。

先日、俺の父『衛宮切嗣』が他界した。

父といつても、血は繋がっていない。

十年前、冬木市を原因不明の大火災が襲った。その火災で俺は実の両親を失い、自身も死にかけて。そんな俺を救ってくれて、養子として引き取ってくれたのが切嗣だった。

俺にとって切嗣は、正に“正義の味方”だった。

だから、自分がその意志を継ごうと思った。

本来なら死んでいた筈の自分が生き残ったのは、その為だったのだという使命感すらあった。

そう、あの日記を見つけるまでは……

俺と暮らし始めても、切嗣は家を空ける事が多かった。一年近く帰って来ないという事もざらだった。どうやら、国外に行っていたらしい。

切嗣は魔術師だった。

俺には最初、

“僕は、魔法使いなんだ”

と言っていたが、こちらにも知識が付いて来ると“魔法”と“魔術”の違いは判って

来た。『魔術』とは、傍目には『魔法』のように見えるが、ちゃんとタネも仕掛けもあつて人間が体現できる物を言う。『魔法』とは、本当にタネも仕掛けも無い。およそ人間の力では体現できない、人知を超えた力のことを言う。そして切嗣は、本物の『魔法使い』を捜していたようだ。

亡くなる一年程前から、また切嗣は家を離れて帰つて来なかつた。そして数週間前に帰つて来て、突然体調を崩したかと思うと、そのまま他界してしまつた。

結局切嗣は、魔法使いを見つける事は出来なかつたのだろうか？

俺には、『美遊』と言う妹が居る。

俺と美遊……もちろん切嗣も、血は繋がっていない。美遊も俺と同様に、切嗣が引き取つて来た身寄りの無い孤児だつた。

本当の兄妹では無かつたが俺は美遊を実の妹のように想い、美遊も俺を実の兄同然に慕つてくれていた。しかし美遊は生まれつき体が弱く、殆ど外出する事は出来ず家の中で生活していた。切嗣が亡くなつてからは余計に様態が悪化してしまい、今ではずっと寝込んでしまつていた。

ある日俺は切嗣の遺品を整理する為に、部屋を押し入れの中に頭を突っ込んだ。その時にふと、中の奥行の狭さに違和感を覚えた。

「何だ?……この奥、何かあるのか?」

俺は生前の切嗣から、「魔術」を習っていた。教わっていたのは「強化」と言い、物質の構造を透視して解析してその性質を変化させるものだった。

「トレース・オン!」

気になった俺は、押し入れの奥をトレースして見た。そしてそこが、二重構造になっている事に気付いた。その二重構造の中には、何かの書物が隠されている。

「何だ? いったい……」

故人の遺品を漁るのは気が咎めたが、気になって仕方が無かった為、俺は壁を壊してその書物を取り出した。

「これは……日記帳?」

それは、切嗣の残した日記であった。

「どうして爺さんは、わざわざ日記をこんな所に隠したんだ?」

俺は何気なしに、その日記を読み始めた。

「……っ?!」

その途端、俺の世界は一変する。

失われた記憶が、雪崩のように押し寄せて来た。今迄俺が信じていた事は、全てが偽りの記憶だったのだ。

切嗣が十年前の大火災から俺を助け、引き取って育ててくれた事は紛れも無い事実だ。だが五年前、俺が切嗣にあの言葉を言つて以降の俺の……いや、世界の記憶が書き換えられていた。

切嗣は一人で旅に出ているのでは無い、常に俺も一緒に旅に出ていた。そして俺達は見つけていた……本当の“魔法使い”を！

俺は切嗣の部屋を出て、離れにある妹の美遊の部屋に急ぐ。

ノックもせず、荒々しくドアを開ける。中に入り、ベッドに眠る美遊に近寄る。

「……これが現実か？……み……美遊ううううっ！」

俺は、ベッドの前に跪いて泣き崩れた。

そこに眠っているのは、美遊では無かった。よく出来てはいるが、命の無い人形だ。魔法により、昏睡状態の少女に見せかけられているだけの……

美遊は、もう居ない。

世界の代わりに、彼女は犠牲になったのだ。

そう、あの第五次聖杯戦争による悲劇から、この世界を救う為に……

正義の味方になる誓いをして以降、俺は切嗣の旅に同行するようになった。切嗣と二人で世界中を飛び回り、魔法使いを捜した。

しかし、何処を捜しても魔法使いなど見つからなかった。そもそも、本当に居るのかどうかすらも分からなかった。

だが、それは突然に見付かる事になる。それも、この冬木市で……

何度目かの旅の帰りに柳洞寺の近くを通った時、突然切嗣が時空の歪みを感じ取る。

「な……何だ？これは？」

「ど……どうかしたのか？爺さん？」

切嗣は急ぎ、その場所に車を向かわせる。それは、円蔵山の麓の辺りだった。

「誰か居る……」

雨に濡れた道端に、六、七歳くらいの女の子が倒れていた。

切嗣は慌てて車を降りて、その少女に駆け寄って行く。俺も、その後に続く。その少女を抱き上げた切嗣は、大きく衝撃を受けながら呟いていた。

「つ……遂に……見つけた……」

その少女は、荷物を何も持っていなかった。この近辺では、全く見た事も無い顔で

あつた。おそらく、冬木の人間では無いであろう。

何故この娘は、突然ここに現れたのか？

この言い方は少しおかしいが、そうとしか思われなかった。その日はずっと雨が降っていて、周囲の道はかなりぬかるんでいた。その為その少女が倒れていた付近には、彼女の残した足跡がくつきりと残っていた。

だがそれは、少女が倒れていた場所から数メートル先で途切れていた。その周りをいくら探しても、彼女が歩いて来た痕跡も車等が通った痕跡も残っていないかった。この足跡を信じるのならば、少女は突然この場所に現れて、数歩歩いた後に倒れていたのだ。

少女が目を覚ました後、俺達は色々と質問をしたが彼女は殆ど何も答えられなかった。

耳が聞こえない訳でも、口が利けない訳でも無い。彼女には、普通の六く七歳の少女が持ち得る知識が何も無かった。知識的には、赤ん坊と大差が無かった。殆ど閉鎖された場所で、外界と接する事無く育てられたのだろう。

その少女が俺達に答えられたのは、『美遊』という名前だけだった。

切嗣は美遊を衛宮家に連れ帰り、離れの部屋に匿った。

部屋に結界を張り、外部からは部屋の存在が判らないようにした。俺と切嗣以外の人

間が屋敷に居る時には、決して美遊を部屋から外に出さなかった。

また俺には美遊の世話を任せたが、必要以上に親密になる事を禁じた。

理由を聞くと、切嗣はこう言った。

「美遊は、特殊な力を持っている。それこそ、本当の魔法使いなんだ。どんな願い事でも叶えてしまう、万能の願望機と言ってもいい。それ故に、人間の欲望や喜怒哀楽の感情で汚染させてはいけない。願望機自体がそのような感情を持つては、願いを良からぬ形に歪めてしまう危険がある。あの歳まで彼女が何の知識も持たずに、閉鎖空間で育てられていたのはその為なんだ」

しかし、俺はそれを完全に守れてはいなかった。

美遊の世話は俺がしていた為、彼女はいつも俺の後ろを付いて来た。美遊にとっての遊び相手は、俺一人だけだった。

そうやって接し続ければ、当然愛着も沸いて来る。日に日に愛おしくなつて来る美遊を、俺は邪険には出来なくなつていった。それどころか、本当に自分の妹のように思えてならなかった。

「美遊に、外の世界を見せてあげたい」

「彼女にも、人間らしい生活をさせてあげたい」

「同世代の、友達も作つてあげたい」

俺の願望は、募るばかりだった。

美遊が来てからしばらくして、切嗣はまた別な用事で海外に頻繁に出掛けるようになった。

今度は美遊が居る為、俺は付いては行けなかった。美遊の監視と世話が出来る者は、俺しか居なかったからだ。

ただその間、切嗣から固く命じられていた事があった。

・美遊と、必要以上に親密になつてはならない

・美遊を、屋敷の敷地より外に出してはならない

・美遊の存在を、他人に知られてはならない

しかし、俺はそれを守りきれなかった。

切嗣が不在がちになつた途端、俺は今迄以上に美遊と親密に接するようになっていった。そして美遊も、そんな俺にどんどん懐いていった。

俺が学校に行っている間は、美遊は家で一人きりになつてしまう。その間寂しく無い様に、俺は学校から本を借りて来るようになった。

美遊は、今迄知らなかった一般的な知識を得る事が余程楽しかったのだろう。毎日熱

中して、それらの本を読み続けていた。

そんな中で星や星座に関する本を借りて来た晩に、縁側で星を眺めていると急に美遊が言い出した。

「星に願いたい事……もし、ひとつだけ願いたい事が叶うなら……私、士郎さんと本当の兄妹になりたい……」

そう言つて真剣な目で俺を見た後、美遊は直ぐに訂正する。

「何て……だ……駄目だよね？」

美遊の目には、涙が溜まっている。

「いや……駄目な訳……無いだろう？」

ついそう答えてしまった俺の目からも、涙が流れ出る。

俺はこの時、覚悟を決めたのだった。

その日以降、俺は完全に美遊に対し兄として接するようになった。

学校からもっと色々な本を借りて来て、美遊に読ませ始めた。今迄僅かな知識しか無かった為か、美遊の学習速度は異様に早かった。次々と、知識を吸収していった。

美遊が人並みの知識を身に付けると、今度は人目にも晒してしまった。

まずは、毎日のように家に顔を出す藤姉に紹介する。最初は怖がった美遊だが、屈託

無く明るい藤姉に美遊は直ぐに懐いてくれた。

次は、親友の慎二だ。ちよつと癖のある奴だが、根はいい奴なので美遊も直ぐに仲良くなつた。

流石に外に出すのだけは不味いと思ひ、「病弱」という事にして他人と接するのでも家の中だけにした。それでも俺以外の人と接する事により、美遊はより人間らしくなり、明るくなっていった。

そうして一年近く過ぎた頃、突然あの事件が起こつてしまう。

何があつたのかは知らないが、突然慎二が間桐の家を出てしまった。

高校も中退して、一人東京に行くと言う。彼の妹の桜に聞いても、何も答えてはくれなかつた。ただ桜自身は、酷く落ち込んでしまつていた。

東京に行く当日に、俺は慎二を捕まえて問い質した。

「どういう事なんだ？ 慎二？」

「お前には関係無い……これは、間桐家の問題なんだ」

「関係無いって……お前……」

慎二は何も理由を言わず、そのまま行つてしまおうとする。

「桜はどうなるんだ？お前、桜の事が心配じゃ無いのか？」

俺のその言葉に、慎二は足を止める。

「……………な……………何も理由を言わないで、虫が良すぎるって事は判ってる……………だけど……………頼む！衛宮！美遊ちゃんの半分……………いや、十分の一でもいい……………桜の事を、気にかけてやって欲しい……………」

そう言い残して、慎二は俺の前から去ってしまった。

桜は塞ぎ込んで、学校にも来なくなってしまった。

そうしてその数日後に、俺はあの恐ろしい戦争に巻き込まれる事になったのだ。

その日俺は生徒会の手伝いで遅くなった後、弓道場の清掃も行った為に帰る頃には陽が暮れてしまっていた。

もう校内には誰も居ないと思われたが、校庭を歩いているとサッカー場の方から金属的な騒音が聞こえて来た。気になって様子を見に行ったら俺は、そこでとんでも無いものを目撃する。

その場ではおよそ人間とは思われないような超人的な動きをする、二人の男達が殺し合いをしていたのだ。しかもそれを見てしまった為に、俺は争っていた男達の内の一人、赤い槍を持つ青いタイトツ姿の男に命を狙われる羽目になってしまう。

散々追い回された挙句に校内で一度は殺されたと思つたが、何故か俺は一命を取り留めていた。その後何とか家まで帰つたのだが、タイツ姿の男は再び俺を殺しに家まで追つて来ていた。今度は殺されまいとは微かな抵抗を試みながら、俺は直ぐに庭へと逃げ出した。出来るだけ、眠っている美遊から遠ざけようとした。だが直ぐに追い付かれて痛めつけられた挙句、俺は土蔵の中に追い詰められてしまう。

もう駄目かと思われたその時、突如俺の前に彼女が現れた。

「あなたが、私のマスターか？」

青い礼装に銀の鎧を纏つた、ブロンドの髪と蒼い瞳の少女は俺にそう言った。

それが、セイバーとの出会いだった。

セイバーが青いタイツ姿の男“ランサー”を退けた後、俺達はお互いに自己紹介をする。その時何故かセイバーは、俺の姓である“衛宮”に反応を示した。

その後同じ穂群原学園の同級生であり、“物静かな優等生”で通つていた“遠坂凛”とそのサーヴァントの“アーチャー”とも遭遇する。

騒ぎを聞きつけて起きて来てしまった美遊を再び眠らせた後、俺は遠坂から自分が“聖杯戦争”という魔術師同士の殺し合いに巻き込まれてしまった事を告げられる。

俺も遠坂も、その聖杯戦争に参加するマスターである事。

セイバーとアーチャーはマスターが使役する、サーヴァントと呼ばれる使い魔である

事。

聖杯戦争とは、どんな願いでも叶う万能の願望機「聖杯」を求めて、七人のマスターが七人のサーヴァントを使役して戦うサバイバルである事等を。

どんな願いでも叶う万能の願望機……それは切嗣から聞かされた、美遊の存在と同じであつた。

「ならば美遊も、その聖杯なのか？」

俺の心に、大きな疑念が生まれてしまう。

更にその後、俺は遠坂に連れられて新都の言峰教会に向かう。そこで聖杯戦争の監督役であると言う、「言峰綺礼」という神父により詳しい説明を受けた。その結果俺は、衝撃的な事実を知る事になる。

聖杯戦争は二百年も前から始まっており、過去に四度も行われている事。

前回は十年前で、俺の父切嗣と言峰綺礼もマスターとして参加していた事。

切嗣は一度聖杯に接触していながら、何も望みを叶えなかつた事。

十年前に俺が死にかけたあの大火災は、聖杯戦争により起こされていた事等。

あのような悲劇を二度と起こさない為、俺は聖杯戦争に参加する事を決心する。

そんな俺に、言峰綺礼は言った。

「喜べ少年、君の願いはようやく叶う……例えそれが君にとつて容認し得ぬものであろうと、『正義の味方』には倒すべき『悪』が必要なのだから」

こうして聖杯戦争は膜を開けた。

その後俺はバーサーカーやライダー、他のマスターやサーヴァントとも戦う羽目になった。その中で遠坂は、俺に同盟関係を申し入れて来た。俺は二つ返事で、その申し出を受け入れた。

ただ同盟関係は結ばなくとも、他のマスターとも戦う事にはかなりの抵抗があった。何しろバーサーカーのマスターは、『イリヤスフィール』と言う美遊と同年くらいの少女だった。非戦闘時に遭遇する彼女は、何処にでも居るあどけない普通の女の子だった。

加えてライダーのマスターは、何と慎二の妹の桜であった。

またセイバーは、実は十年前の聖杯戦争でもサーヴァントとして召喚されていた。その時の彼女のマスターが、よりにもよって俺の父切嗣だった。そしてあろう事か切嗣は、やっと出現させた聖杯をセイバーに令呪による命令で破壊させていたのだった。

それは、本当に信じられない話だった。

切嗣は、魔法使いを捜していた。その理由は「戦争の根絶」、本当に争いの無い世の中を実現させる事だった。万能の願望機なら、その願いも叶えられた筈なのに……

その聖杯があれば、美遊を探し出す必要も無かった。美遊より先に冬木の聖杯に接触しているながら、切嗣はそれを破壊して新たに美遊を探し出した。

いったい何故？……

それとセイバーが、俺の事をどう思っているのかも気になった。俺は思いきって、その事をセイバーに問い質した。

「セイバー、本当に俺と契約を続けていいのか？俺はお前を裏切ったマスター、衛宮切嗣の息子なんだぞ」

だがセイバーは、迷わずにこう答えて来た。

「私は、既に貴方に誓った。この身は貴方の剣になると……それにここまで貴方と接して、私は確信している。シロウ、貴方は切嗣とは違う。目的のために平気で人を陥れたり、相手を裏切ったりは絶対にしない！」

かえって俺とセイバーの絆は、より強いものとなったのだった。

俺は聖杯戦争を戦いながら、もう一つの聖杯と思われる美遊も必死に護っていた。

特に、敵マスターやサーヴァントにその存在を知られないように注意した。皆、聖杯

を求めてこの戦争に参加している。簡単に手に入る聖杯がもうひとつあると判れば、躍りになって手に入れようとするだろう。

但し、遠坂には本当の事を話した。同盟関係を結び、家に泊まるようになって彼女の方が気付いたという事もあるが、他のマスターと違って遠坂は聖杯自体を求めてはいなかったからだ。

その後ライダーを倒し、桜を影で操っていた間桐臓硯も倒して彼女を解放した。

かなりの苦戦を強いられアーチャーを失う結果となってしまったが、バーサーカーも何とか倒してイリヤとも和解をした。

イリヤは衛宮家で引き取る事にして、俺達と一緒に暮らす事になった。丁度美遊と同じくらいの歳だったので、美遊に同世代の友達を作ってあげたいと言う願望もあったからだ。案の定二人は、直ぐに仲良しになってくれた。

そうしてキャスターも倒して、残る敵はランサーのみとなった。

そんな時イリヤが突然熱を出して、意識も失って寝込んでしまう。何故か美遊までも、同じように熱を出して寝込んでしまった。

遠坂は、イリヤは実は聖杯の器なのだと言った。サーヴァントが倒されると、その魂は一時的に器であるイリヤに吸収される。それはやがてイリヤを完全な器と化し、人間としての機能を失わせてしまう。仕組みは違えど美遊も聖杯と同等の存在と考えられる為、何らかの影響を受けてしまっているのであろうか？

何とか美遊とイリヤを救う術は無いのか？

俺は、言峰にその事を聞きに教会へと向かう。

しかしそこで、俺は言峰の罠に嵌ってしまった。実は言峰こそが、最後に残ったランサーのマスターだったのだ。

教会の地下で不意打ちを喰らい、俺はランサーに胸を貫かれた。駆け付けたセイバーをランサーが制している間、言峰は生死の境を彷徨う俺に問うて来る。

「私は、聖杯を相応しい者に授けただけだ。衛宮士郎、お前が望むのなら、お前に聖杯を授けよう……どうだ？ 聖杯を求めるか？」

しかし俺はこの聖杯戦争を通して、聖杯の存在に疑念を抱いていた。イリヤを助ける為にも、聖杯は完成させてはいけない。だからこそ答えた。

「聖杯なんていらぬ……この道は、間違つて無いって信じてる……俺は、置き去りにして来たものの為にも、自分を曲げる事はできない……」

俺の答えに失望した言峰は、今度はセイバーに問う。

「お前はどうか？ セイバー？ 小僧は聖杯などいらぬと言う。だが、お前は違うのではないか？ お前の目的は、聖杯による世界の救罪だ。よもや英霊であるお前まで、小僧のようにエゴはかぎすまい？ 交換条件だセイバー。己が目的の為、その手で自らのマスターを殺せ！ そのあかつきには、お前に聖杯を与えよう」

だが、セイバーもそれを拒絶した。

「シロウは殺せない……聖杯が、私を汚す物ならばいらぬ！ 私が欲しかった物は、もう全て揃っていたのだから……」

セイバーが、俺に寄り添って来る。すると、見る見る俺の傷が回復していった。

「お前達はつまらない……ここで死んでもらおう！」

完全に俺達を見限った言峰は、冬木の聖杯が既に汚染されている事を俺達に告げた。

全ての願いを「人を殺す」という手段でしか叶えられない、呪いの壺であると言う事を。

更に、それを自分がそれを完成させると言う事も。

最後にランサーに俺達の始末を命じて、言峰は地下室を出て行ってしまった。

その後はランサーとの壮絶な戦いとなったが、俺を庇いながらもセイバーは何とかなんサーを打ち破った。

教会を出た俺達は、傷の回復を待ったために少しその場で休む。そこで、セイバーが俺に言う。

「切嗣が何故？ 私に聖杯の破壊を命じたのか、ようやく判りました……この地の聖杯は、私が必要とする物では無い……」

俺もようやく理解した。

何故切嗣が、冬木の聖杯を破壊してまで美遊を求めたのか？

何故美遊を、他人と接触させないよう隔離していたのか？

セイバーに、俺も言った。

「セイバー、聖杯を破壊しよう！」

「はい！ 貴方なら、そう決断すると信じていました」

家に戻る頃には、もう日が暮れていた。

帰って来た俺達を待っていたのは、傷付いた遠坂だった。俺達の居ない間に言峰が来て、イリヤを連れ去っていたのだ。美遊の方は、熱を出して奥の部屋で寝込んでいた為に無事だった。

言峰の目的は、聖杯を完成させる事だ。それを行う場所は、柳洞寺しかない。遠坂は

言った。俺にアゾット剣を託して、遠坂は気を失う。そんな遠坂と寝込んだ美遊の二人だけを残すのは心配だったが、今はそんな事を言っている場合では無かった。

聖杯の完成を阻止する為に、俺とセイバーは直ぐさま柳洞寺へと向かった。

だが俺達は、大きな見落としをしていた。柳洞寺の山門に、まだサーヴァントが一人残っていたのだ。

アサシン……キヤスターが、ルールを破って召喚したサーヴァント。

柳洞寺の山門を憑代としていたこのサーヴァントは、キヤスターが消滅した後も何故か現世に留まっていた。

セイバーにアサシンを任せ、俺は単身で言峰に挑んだ。

言峰は既にサーヴァントであるランサーを失っていたが、何故か呪われた聖杯の機能を一部使う事が出来た。その為俺一人では酷く苦戦を強いられたが、それでも何とか言峰を倒す事が出来た。最後に遠坂のアゾット剣を、奴の胸に突き刺したのだ。

しかしそうするまでに、あまりにも時間が掛かり過ぎていた。俺達が闘っている間に、聖杯は完成してしまっていたのだった。

「ふ……ふ……残念だったな？衛宮士郎……聖杯は……既に完成した……」

勝ち誇る言峰の背後の空に開いた大穴から、一気に暗黒の泥が流れ出して来る。

「うわあああああああつー！」

言峰も俺も、その泥に飲み込まれてしまった。

しばらくして、俺は何とかその泥から這い出る事が出来た。正直よく、正気を失わなかったものだ。泥に呑み込まれた途端、頭の中に数多の憎しみや怨念が流れ込んで来た。普通ならば、精神が破壊されていてもおかしくはなかった。

そんな中で俺が耐えられたのは、体の中にある何だが判らない聖なる力に依るところが大きかったのだろう。

気付くと、左手の甲の令呪が無くなっている。セイバーもあの泥に飲み込まれて、聖杯に取り込まれてしまったのか？

俺は高台に立って、街を見て愕然とした。

「そ……そんな……」

そこは見渡す限り、地獄のような光景だった。

街中をあつきの暗黒の泥が覆い、街中が激しい炎に包まれている。十年前の惨劇の再現……いや、それよりも更に被害は広がっている。こうしている今も、空に開いた大きな穴から泥が溢れ出し続けている。

深山町は、完全に炎に包まれている。俺の家も、遠坂や桜の家も……

「み……美遊……遠坂……」

これでは皆、到底助からなかつただろう？

「士郎……」

その時突然名前を呼ばれ、俺は後ろを振り向いた。

「じ……爺さん?!」

そこに立っていたのは、ずっと音信不通だった養父の切嗣だった。

そしてその腕には、意識を失ったままの美遊が抱かれていた。

「み……美遊!」

俺は切嗣に駆け寄って、その腕から美遊を奪い取るようにして抱き締める。

「よ……良かった……美遊……無事で……」

「これは……聖杯が、完成してしまったのか?」

そんな俺の背後で、目の前に広がる地獄を見詰めて切嗣が言う。

「す……濟まない爺さん……俺が……もつと早く言峰を倒していれば……」

「そうか……士郎、お前もマスターになつていたのか?」

切嗣は実は自分の娘であるイリヤを助ける為に、北欧のアインツベルン城に行つて
た。

しかし何とか城への侵入には成功したものの罫に嵌まり、今迄ずっと地下牢に監禁さ

れていた。しかも彼と丁度入れ替わりで、イリヤは既に聖杯戦争の為に日本に送られてしまっていたのだった。

切嗣はずっと監禁されていたところを、十年前の聖杯戦争では敵でもあったロード・エルメロイⅡ世（旧ウエイバー・ベルベット）に助けられた。そして彼から日本で再び聖杯戦争が勃発している事を知らされ、慌てて帰国したのだった。

「ど……どうすればいいんだ？このままじゃ、冬木だけじゃ無く世界が……」

そう問い掛ける俺に、切嗣は言う。

「土郎……お前は、僕の言い付けを守らなかったな？美遊と、必要以上に親密な関係になっっているな？」

俺の問い掛けには答えず、切嗣は突然その事を追及して来た。

「あ……ああ……その通りだ……」

俺は美遊を自分の妹同然に可愛がった事、色々な本を読ませてこの世界の知識を吸収させた事、藤姉や慎二達にも打ち解けさせた事等を洗いざらい話した。

「そうか……土郎、お前は美遊の……兄になる事を選んでしまったんだな？」

「す……済まない、爺さん……だけど、あのままじゃあまりにも美遊が不憫でならなくて

……」

「いや、僕のミスだ。お前にこの娘を任せれば、こうなる事も予想できた筈なのに……」

そう言いながら切嗣は、俺の腕から再び美遊を抱き上げる。
そして……

「士郎……お前には更に辛い思いをさせてしまうが、世界を救う為に僕は美遊を使う」
「え？……っ……使うつて？……っ?!」

気付くと体が、金縛りに合ったように動かなくなっていた。切嗣が俺に、何らかの魔術を掛けたのだ。

「ま……まさか……」

切嗣は美遊を抱いたまま、高台の端の方へ歩いて行く。

彼は美遊を『使う』と言った。ならば、やはり美遊は……

「や……やめてくれ！切嗣！み……美遊は、道具なんかじゃ無い！人間なんだ！」

切嗣は俺の言葉は一切聞かず、美遊の体を天に翳すように高々と上げる。

「や……やめろおおおおおおおおおっ！」

美遊の体が、眩い輝きを放ち出した……

こうして、世界は救われた。

停止させられた冬木の呪われた聖杯は、二度とこの世界に現れぬよう完全に封印され

た。

聖杯戦争により壊された街、失われた命は全て元通りになり、人々の記憶も書き換えられた。第五次聖杯戦争自体が、行われなかった事にされたのだ。

俺が少人数だが美遊を他人に会わせてしまった為、その者達には余分な記憶が付け加えられた。生まれつき病弱だった美優は、数ヶ月前から病状が悪化して寝たきりになってしまったという記憶が……

だが、俺はその全て思い出してしまった。

美遊は世界を救う為に、その短い生涯を終えた。

どうせあのままでは、俺達も美遊も助からなかった。美遊一人の犠牲で世界の全てが救われるのならば、それは恐らく正しい選択であろう。

しかし……それじゃあ、美遊の人生は何だったのか？

彼女がどんな世界に生まれて、俺達と逢うまでにどんな生活をして来たのかは知らない。だが俺達と逢った後、あいつが人間らしい生活を送れたのはたった一年だけだ。それだけで、美遊の人生が終わってしまったていいのか？ 聖杯として生まれた美遊には、人並みの人生を送る事さえも許されないのか？

俺はかつて、切嗣の横で正義の味方になる事を誓った縁側に立ち、改めて呟いた。

「切嗣……大勢を助ける為にたった一人を犠牲にするのが『正義の味方』だと言うのなら、悪いが俺は『正義の味方』にはなれない……」

切嗣の残した日記を握り締め、更に俺は続けて呟く。

「俺は、どんな事をしてでも美遊を蘇らせる……例えば、この手を血に染めてでも……それを『悪』だと言うのなら、俺は『悪』でいい！」

（第一話につづく）